奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成15年度

2006

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成15年度

2006

奈良市教育委員会

曲柄平鍬

12・13. 柄　8・10. 曲柄又鍬

15　田下駄

31　馬形

22. 斧膝柄未製品　16. 木錘　21. 編台目盛板

東紀寺遺跡第６次調査　河川 01 出土木製品

はじめに

平成17年４月、添上郡月ヶ瀬村と山辺郡都祁村との合併によって、人口373,574人の新奈良市が誕生しました。

新しく合併した東部地域にも祖先が育んできた郷土の歴史や文化が多く残されており、月ヶ瀬尾山にある「尾山代遺跡（おやみでいせき）」や都祁村南之庄町の「三陵墓古墳群（さんりょうぼこふんぐん）」はいずれも県の史跡に指定されています。また、奈良市の中央市街地には、奈良時代の都である平城京跡の遺跡が所在するとともに、古都奈良の文化財の歴史そのものが残されています。

奈良市は、長引く景気の低迷にもかかわらず、マンション建設や宅地造成などの民間による大規模開発や市域・道路整備等の開発によって、市街地はますます発展しています。しかしながらその反面、数多くの遺跡が消滅してきており、文化財の保護・保存が大きな問題となっています。やむをえず記録保存を講じた遺跡についても年々件数が増え、調査成果を迅速に公開できないのが現状であります。

このような中で、少しでも早く概要報告書を刊行することをめざし、今年度は平成14年度概要報告書に加え、平成15年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査概要報告書を刊行しました。本書が地域の歴史研究や遺跡の理解を深める上で一助となれば幸いです。

最後になりましたが、関係各位におかれましては、今後ともより一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年3月

奈良市教育委員会
教育長　中尾　勝二

例　　言

1．本書は、平成15年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要をまとめたものである。
2．平成15年度～平成17年度の調査体制については下記のとおりである。なお、各調査の現場担当者は発掘調査一覧表に示した。

平成15年度

社会教育部　文化財課	課　長	前原武嗣	主　幹	森川倫秀
埋蔵文化財調査センター	所　長	高谷明男		
庶務係	係　長	北尾秀一	事務吏員	山形和宏
調査第一係	係　長	西崎卓哉	主　任	立石堅志
	技術吏員	鐘方正樹、秋山成人、安井宣也、松浦五輪美、宮崎正裕、久保清子、原田憲二郎、池田富貴子、山前智敬、大窪淳司		
調査第二係	係　長	篠原豊一	主　任	三好美穂
	技術吏員	森下浩行、武田和哉、中島和彦、久保邦江、池田裕英、原田香織		

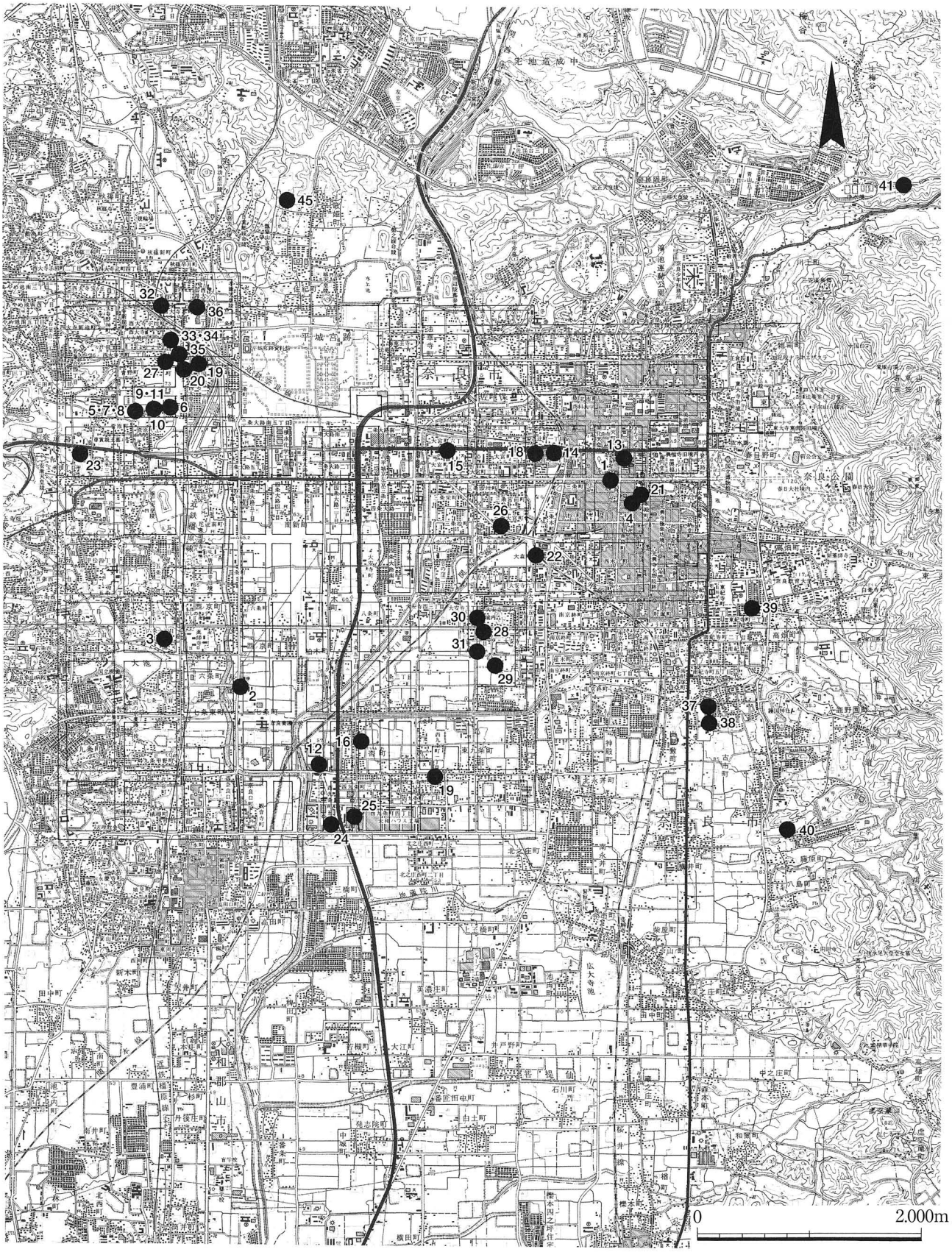
平成16・17年度

社会教育部　文化財課	課　長	福井　進	主　幹	谷村　勝　　課長補佐　森下恵介
埋蔵文化財調査センター	所　長	高谷明男（～16年度）、川本恭久（17年度）		
庶務係	係　長	北尾秀一	事務吏員	山形和宏
調査第一係	係　長	立石堅志		
	技術吏員	鐘方正樹、秋山成人、安井宣也、松浦五輪美、宮崎正裕、久保清子、山前智敬、大窪淳司		
調査第二係	係　長	三好美穂		
	技術吏員	森下浩行、武田和哉、中島和彦、久保邦江、池田裕英、原田香織		
	再任用職員	森川倫秀		

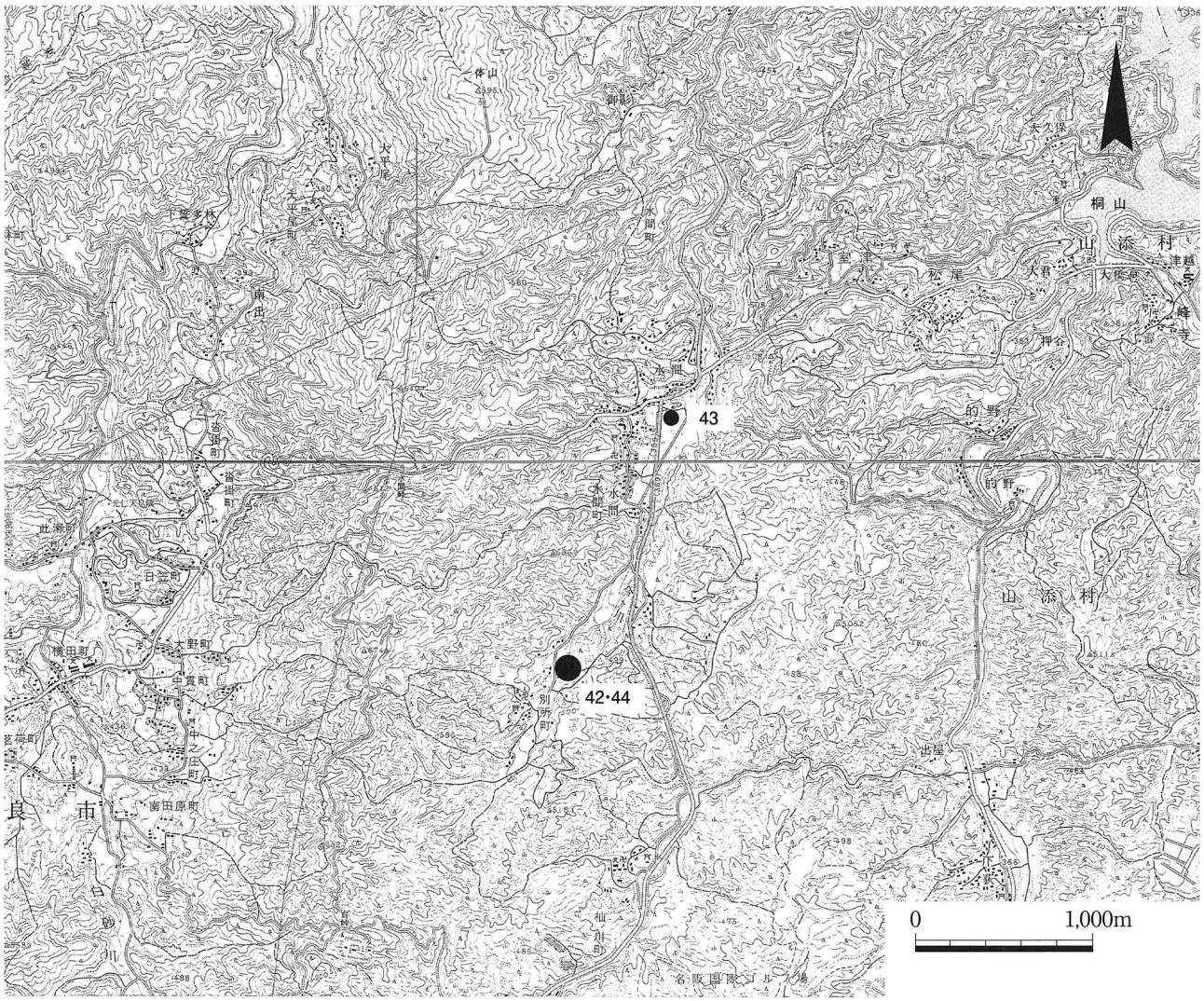
3．発掘調査と本書の作成については、奈良文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会等関係諸機関からご指導とご教示を賜った。また、土地所有者等からの多大なご協力いただいた。ＨＪ第506次調査出土乾漆箱については、宮内庁正倉院事務所からの御教示を賜った。記して感謝いたします。
4．各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した通算次数である。
遺跡の略号は以下のとおりである。
ＨＪ－平城京跡　ＤＡ－大安寺旧境内　ＧＧ－元興寺旧境内　ＳＤ－西大寺旧境内　ＳＲ－西隆寺旧境内　ＮＲ－奈良町遺跡　ＦＳ－古市遺跡　ＨＫ－東紀寺遺跡　ＵＡ－歌姫赤井谷横穴墓群　ＫＷ－川上町遺物散布地　ＭＭ－水間遺跡　ＢＳ－別所下ノ前遺跡　ＢＴ－別所辻堂遺跡
5．本書で使用した遺構等の番号は一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構の番号の前には、ＳＡ（塀・柱列）、ＳＢ（掘立柱建物）、ＳＤ（素掘り溝）、ＳＥ（井戸）、ＳＦ（道路）、ＳＫ（土坑）、ＳＸ（その他）の記号を付した。また、遺構の大きさの表記は、すべて遺構検出面での計測値である。
6．本書で使用した奈良時代の遺物名称・形式・型式は、一部を除いて以下の刊行物に準拠した。
軒瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会　1996
鬼瓦：毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦－8世紀を中心として」『研究論集Ⅳ』奈良国立文化財研究所　1980
土器：『平城宮発掘調査報告書Ⅺ』奈良国立文化財研究所　1982
7．発掘区位置図については、奈良市発行の1/2,500大和都市計画図を、調査地位置図については、国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。
8．本文中、図中に示した位置の表示は、法改正（2002年4月）前の平面直角座標系Ⅳによる。
9．古墳時代以前の遺跡については、仮に大字名を付して遺跡名としたものもある。
10．本書の作成は、埋蔵文化財調査センター職員と文化財課記念物係職員が分担して行った。文責は基本的に各調査担当者である。
11．本書の編集は、三好美穂、立石堅志が担当した。

本　書　目　次

1. 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る調査 …… 1
　(1) 平城京右京二条三坊十二坪の調査　第494－1・－3・－4次 …… 2
　(2) 平城京右京二条三坊五坪の調査　第494－5、495－1・－2次 …… 5
　(3) 平城京右京二条三坊四坪の調査　第494－2次 …… 8
　(4) 平城京右京二条三坊一坪の調査　第511次 …… 9
　(5) 西大寺旧境内の調査　第16－1・－2・－3次 …… 10
2. ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業に係る調査
　平城京左京五条五坊一・二坪、東四坊大路、条間北小路の調査　第506次 …… 14
3. 平城京跡（左京四条六坊八坪）・奈良町遺跡の調査　第490次 …… 21
4. 平城京跡（左京七条一坊十四坪）の調査　第491次 …… 23
5. 六条野々宮古墳・平城京跡（右京六条三坊六坪）の調査　第492次 …… 28
6. 平城京跡（左京四条六坊十坪）・奈良町遺跡の調査　第493次 …… 30
7. 平城京跡（左京九条一坊七坪）の調査　第496次 …… 34
8. 平城京跡（左京三条六坊十一坪）の調査　第497次 …… 35
9. 平城京跡（左京三条五坊六坪）の調査　第498次 …… 37
10. 平城京跡（左京三条三坊十一坪）の調査　第499次 …… 38
11. 杏遺跡・平城京跡（左京八条二坊二坪）の調査　第500次 …… 41
12. 平城京跡（左京九条三坊八坪）の調査　第501次 …… 42
13. 油坂遺跡・平城京跡（東四坊大路）の調査　第502次 …… 43
14. 平城京跡（右京二条二坊九・十六坪）の調査　第503次 …… 46
15. 平城京跡（右京二条二坊十六坪）の調査　第504次 …… 49
16. 平城京跡（左京四条六坊十五坪）・奈良町遺跡の調査　第505次 …… 53
17. 平城京跡（右京三条四坊十四坪）の調査　第507次 …… 55
18. 平城京跡（左京九条一坊十二坪）の調査　第508次 …… 57
19. 平城京跡（左京九条東一坊坊間路）の調査　第509次 …… 61
20. 平城京跡（左京四条四坊五坪）の調査　第510次 …… 62
21. 史跡大安寺旧境内の調査 …… 66
　(1) 北面僧房の調査　第101次 …… 67
　(2) 西塔跡の調査　第102次 …… 68
　(3) 食堂并大衆院推定地の調査　第103次 …… 72
　(4) 西面・南面築地の調査　第104次 …… 73
22. 平城京跡（右京一条三坊八坪）・西大寺旧境内（食堂院跡推定地）の調査　第15次 …… 75
23. 平城京跡（一条北大路）・西隆寺跡の調査　第7次 …… 83
24. 古市遺跡の調査　第5次 …… 85
25. 古市遺跡の調査　第6次 …… 87
26. 東紀寺遺跡の調査　第6次 …… 89
27. 川上町遺物散布地の調査　第1次 …… 100



平成 15 年度　発掘調査地位置図 A　1/50,000



発掘調査地位置図Ｂ　1/40,000

（※地図Ａ・Ｂに記した番号は次頁の地図番号である）

平成15年度発掘調査一覧

地図No.	調査次数	枝番	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	担当者	事業者	事業内容	届出受理番号
1	HJ490		平城京左京四条六坊八坪・三条大路／奈良町遺跡	上三条町15	H15.4.10 ～ 4.24	30.0 ㎡	中島	専念寺	住宅の改築	H14・3106
2	HJ491		平城京右京七条一坊十四坊・西一坊大路	七条町95-1他	H15.4.24 ～ 7.9	1,560.0 ㎡	武田・池田	医療法人康仁会	医院建設	H14・3285
3	HJ492		平城京右京六条三坊十一坪	六条一丁目497-4	H15.5.6 ～ 5.29	52.5 ㎡	三好	個人	個人住宅増築	H14・3291
4	HJ493		平城京左京四条六坊十坪／奈良町遺跡	椿井町20・東城戸町47	H15.5.20 ～ 6.30	176.0 ㎡	立石・原田・松浦	(株) ケイエムケイ	共同住宅建設	H14・3222
5	HJ494	1	平城京右京二条三坊十二坪	菅原町246他	H15.5.26 ～ 8.8	800.0 ㎡	宮崎・山前	奈良市長	西大寺駅南地区土地区画整理臨時交付金事業1	S63・3056
6		2	平城京右京二条三坊四坪	菅原町182-4他	H15.5.28 ～ 6.27	90.0 ㎡	池田富	奈良市長	西大寺駅南地区土地区画整理臨時交付金事業1	S63・3056
7		3	平城京右京二条三坊十二坪	菅原町245他	H15.8.18 ～ 10.24	660.0 ㎡	宮崎・山前	奈良市長	西大寺駅南地区土地区画整理臨時交付金事業2	S63・3056
8		4	平城京右京二条三坊十二坪	菅原町244-1他	H15.8.18 ～ 10.24	80.0 ㎡	宮崎・山前	奈良市長	西大寺駅南地区土地区画整理臨時交付金事業2	S63・3056
9		5	平城京右京二条三坊五坪	菅原町228-1他	H15.11.5 ～ H16.1.14	370.0 ㎡	宮崎・山前	奈良市長	西大寺駅南地区土地区画整理臨時交付金事業3	S63・3056
10	HJ495	1	平城京右京二条三坊五坪	菅原町229-1他	H15.7.1 ～ 9.3	380.0 ㎡	池田富	奈良市長	西大寺駅南地区土地区画整理促進事業	S63・3056
11		2	平城京右京二条三坊五坪	菅原町214-3他	H15.10.1 ～ 10.27	120.0 ㎡	池田富	奈良市長	西大寺駅南地区土地区画整理促進事業	S63・3056
12	HJ496		平城京左京九条一坊七坪	西九条町五丁目2番地	H15.6.2 ～ 6.23	252.0 ㎡	三好	共栄社化学株式会社	研究所の建設	H14・3314
13	HJ497		平城京左京三条六坊十一坪	林小路町1-1,1-10番地	H15.6.3 ～ 6.19	85.0 ㎡	中島	株式会社ビルド	共同住宅建設	H14・3297
14	HJ498		平城京左京三条五坊六坪	大宮町一丁目38-1他	H15.6.26 ～ 7.9	464.0 ㎡	中島	株式会社森下組	共同住宅建設	H14・3206
15	HJ499		平城京左京三条三坊十一坪	大宮町四丁目281番地	H15.7.1 ～ 9.2	355.3 ㎡	三好	清水建設株式会社奈良営業所	店舗付事務所新築	H14・3167
16	HJ500		平城京左京八条二坊二坪／杏遺跡	杏町404番地	H15.8.4 ～ 8.19	40.0 ㎡	秋山・久保清	奈良市長	第11号(杏中) 市営住宅建替事業	H15・3027
17	HJ501		平城京左京九条三坊八坪・八条大路	西九条町二丁目2番地の44	H15.9.1 ～ 9.24	120.0 ㎡	立石・原田・松浦	奈良市長	仮称辰市地域ふれあい会館建設事業	H15・3102
18	HJ502		平城京東四坊大路	大宮町二丁目125-7他	H15.9.10 ～ 12.9	585.0 ㎡	久保清	奈良市長	芝辻大森線街路整備補助事業	H10・3091
19	HJ503		平城京右京二条二坊九・十六坪	西大寺国見町一丁目2137	H15.9.16 ～ 10.28	450.0 ㎡	池田裕	中道不動産株式会社	分譲マンション建設	H15・3100
20	HJ504		平城京右京二条二坊十六坪	西大寺国見町一丁目2137-85他	H15.10.15 ～ 12.5	450.0 ㎡	中島	東急不動産株式会社 関西支店	マンション建設	H15・3105
21	HJ505		平城京左京四条六坊十五坪／奈良町遺跡	椿井町25番地	H15.11.4 ～ 12.2	132.0 ㎡	立石・原田・松浦	奈良市長	椿井小学校建設事業	H14・3088
22	HJ506		平城京左京五条五坊一・二坪／東四坊大路	大森町123-1他	H15.11.7 ～ H16.3.3	638.0 ㎡	立石・原田・松浦	奈良市長	JR奈良駅南特定地区土地区画整理連立関公事業	H12・3145
23	HJ507		平城京右京三条四坊十四坪	宝来四丁目968-1他	H15.11.25 ～ 12.11	150.0 ㎡	武田	個人	共同住宅建設	H14・3142
24	HJ508		平城京左京九条一坊十二坪	西九条町五丁目3-2番地	H15.11.26 ～ H16.1.16	305.0 ㎡	三好	関西セキスイ工業(株)	店舗新築	H15・3072
25	HJ509		平城京左京九条東一坊坊間小路	西九条町五丁目3-1番地	H15.12.1 ～ 12.10	171.0 ㎡	池田裕	関西セキスイ工業(株)	展示棟の増築	H15・3134
26	HJ510		平城京左京四条四坊五坪	三条大宮町212-2	H16.1.6 ～ H16.1.26	234.0 ㎡	武田	(株) フクダ不動産	マンション建設	H15・3170
27	HJ511		平城京右京二条三坊一坪	西大寺南町2388-1他	H16.1.26 ～ H16.2.24	190.0 ㎡	宮崎・池田富	奈良市長	西大寺駅南地区土地区画整理通常事業2	S63・3056
28	DA101		史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目1145番地の1	H15.5.13 ～ 5.20	4.0 ㎡	中島	個人	倉の改築及び塀のやり替え	H15・1055
29	DA102		史跡大安寺旧境内(西塔)	東九条町1335他	H15.7.1 ～ 10.31	370.0 ㎡	松浦	奈良市長	史跡大安寺旧境内保存整備事業	H15・1006
30	DA103		史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目1052-1他	H15.11.7 ～ 11.20	30.0 ㎡	三好	個人	個人住宅新築	H15・1031
31	DA104		史跡大安寺旧境内	大安寺町1320他	H16.1.14 ～ H16.2.16	188.0 ㎡	中島	奈良市教育委員会教育長	遺跡範囲確認	H15・1056
32	SD015		西大寺旧境内	西大寺本町258-1他	H15.8.28 ～ 10.20	332.0 ㎡	武田	(株) オーナーズブレーン	共同住宅建設	H15・3067
33	SD016	1	西大寺旧境内	西大寺南町2414-1他	H15.9.26 ～ H16.1.22	740.0 ㎡	安井	奈良市長	西大寺駅南地区土地区画整理通常事業1	S63・3056
34		2								
35		3	西大寺旧境内	西大寺南町2390-6他	H16.2.16 ～ H16.2.20	100.0 ㎡	安井	奈良市長	西大寺駅南地区土地区画整理通常事業2	S63・3056
36	SR007		西隆寺旧境内	西大寺東町一丁目70-4番地他	H16.2.9 ～ H16.3.19	230.0 ㎡	山前	奈良市長	西大寺近隣公園整備事業	H15・3267
37	FS005		古市遺跡	古市町1226番地	H15.5.6 ～ 6.12	302.7 ㎡	久保清	奈良市長	古市人権文化センター建設事業	H15・3016
38	FS006		古市遺跡	古市町1226－1他	H15.6.10 ～ 7.1	238.0 ㎡	秋山	奈良市長	第10号(古市) 市営住宅建替事業	H15・3026
39	HK006		東紀寺遺跡	東紀寺町三丁目707番地	H15.11.21 ～ 11.26	402.0 ㎡	秋山	奈良市長	第9号(紀寺) 市営住宅建替事業	H15・3183
40	FJ004		古市城跡	古市町98-1他	H16.2.4 ～ H16.3.3	425.0 ㎡	大窪	奈良市長	古市公園整備事業	H15・3266
41	KW001		川上町遺物散布地	川上町897-8他	H16.2.2 ～ H16.2.17	188.0 ㎡	秋山	奈良市長	道路新設工事奈良阪川上線	H15・3234
42	BT001		別所辻堂遺跡	別所町399他	H15.5.6 ～ 6.4	726.0 ㎡	鐘方・大窪	奈良県知事	県営ほ場整備事業	H13・3153
43	MM007		水間遺跡	水間町634他	H15.6.16 ～ 8.28	710.0 ㎡	鐘方・大窪	奈良県知事	県営ほ場整備事業	H13・3153
44	BS002/BT002		別所下ノ前遺跡・別所辻堂遺跡	別所町409他	H15.9.16 ～ H16.1.9	2,240.0 ㎡	鐘方・松浦・大窪	奈良県知事	県営ほ場整備事業	H13・3153
45	UA001		歌姫赤井谷横穴	歌姫町986-2	H16.1.30 ～ H16.2.19	750.0 ㎡	池田裕	奈良市教育委員会教育長	遺跡範囲確認	

(※別所辻堂遺跡、水間遺跡、別所下ノ前遺跡、歌姫赤井谷横穴は、別に収録)

1．近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る調査

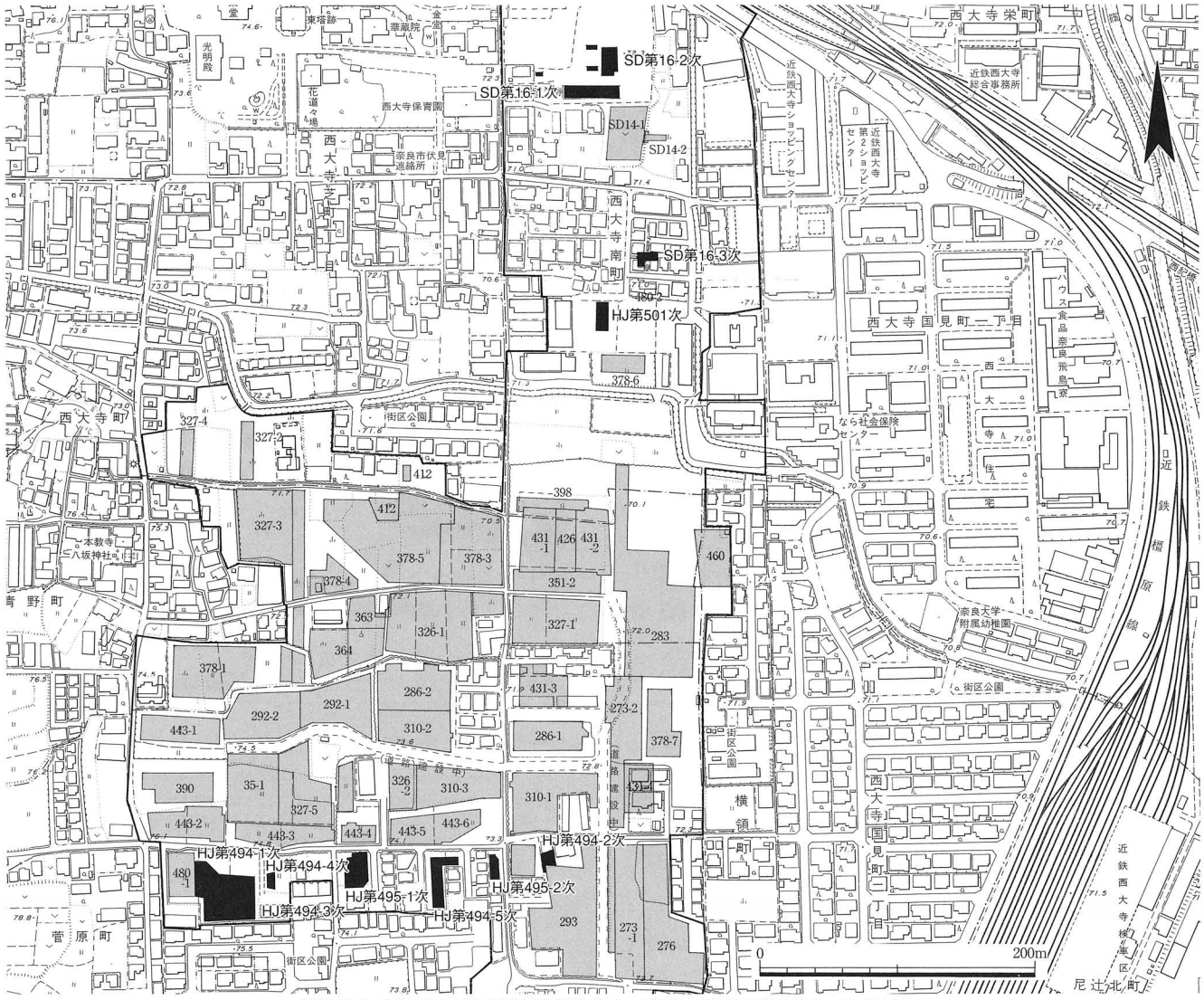
この調査は、奈良市が進める西大寺駅南地区土地区画整理事業（総面積約30万㎡）に係り実施した埋蔵文化財発掘調査である。奈良市教育委員会では、昭和63年度から事業地内の発掘調査を継続して実施している。

下表の通り、平成15年度は臨時交付金事業で5箇所、促進事業で2箇所、通常事業で4箇所の発掘調査を実施した。調査面積は3,530㎡であり、初年度からの総発掘面積は104,659㎡になる。

平成15年度の調査地は、平城京右京二条三坊一・四・五・十二坪の4坪分と西大寺旧境内に及んでいる。ここでは、それらの調査を各坪と西大寺旧境内に分けて報告する。遺構番号は、坪ごとの通し番号とし、古墳時代以前の遺構に2桁の番号を、奈良時代以降のものに3桁の番号を付している。

平成15年度　近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内発掘調査一覧表

遺　跡　名	調査次数	事　業　名	調　査　地	調査期間	調査面積	調査担当者
平城京右京二条三坊十二坪	HJ494-1	臨時交付金事業	菅原町246他	平成15.5.26 ～ 8.8	800㎡	宮崎・山前
平城京右京二条三坊四坪	HJ494-2	臨時交付金事業	菅原町182-4他	平成15.5.28 ～ 6.27	90㎡	池田富
平城京右京二条三坊十二坪	HJ494-3	臨時交付金事業	菅原町245他	平成15.8.18 ～ 10.24	660㎡	宮崎・山前
平城京右京二条三坊十二坪	HJ494-4	臨時交付金事業	菅原町244-1他	平成15.8.18 ～ 10.24	80㎡	宮崎・山前
平城京右京二条三坊五坪	HJ494-5	臨時交付金事業	菅原町228-1他	平成15.11.5 ～平成16.1.14	370㎡	宮崎・山前
平城京右京二条三坊五坪	HJ495-1	促進事業	菅原町229-1他	平成15.7.1 ～ 9.3	380㎡	池田富
平城京右京二条三坊五坪	HJ495-2	促進事業	菅原町214-3他	平成15.10.1 ～ 10.27	120㎡	池田富
平城京右京二条三坊一坪	HJ511	通常事業	西大寺南町2388-1他	平成16.1.26 ～ 2.24	190㎡	宮崎・池田富
西大寺旧境内	SD16-1	通常事業	西大寺南町2414-1他	平成15.9.26 ～ 11.22	470㎡	安井
西大寺旧境内	SD16-2	通常事業	西大寺南町2414-1他	平成15.12.5 ～平成16.1.22	270㎡	安井
西大寺旧境内	SD16-3	通常事業	西大寺南町2390-6他	平成16.2.16 ～ 2.20	100㎡	安井



近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内の調査　発掘区位置図　1/5,000

（1）平城京右京二条三坊十二坪の調査　第494－1・－3・－4次

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京右京二条三坊の十二坪の北辺中央にあたる。平成14年度に西隣接地で、十二坪内北1/4の位置に造られた東西方向の坪内道路を検出している（市HJ第480－1次調査）。今回、十二坪内の様相解明を主目的に、西から順にHJ第494－1・3・4次発掘区を設定した。

Ⅱ　検出遺構

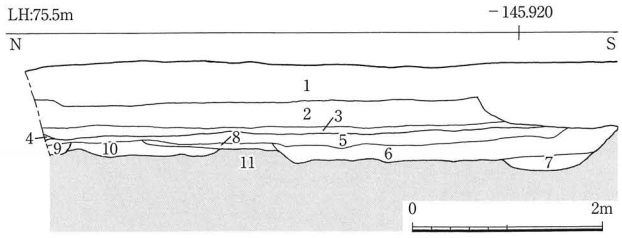
調査地の現況は水田及び畑である。基本層序はHJ第494－1次発掘区では、耕作土・床土の直下の地表面から0.3ｍで淡黄色粘質土の地山に至る。HJ第494－3次発掘区では、耕土・床土の下に遺物包含層が堆積し、地表面から0.8ｍで黄灰色粘砂の地山に至る。HJ第494－1・3次発掘区の北半の地山直上に整地土が堆積していた。HJ第494－4次発掘区でも耕土・床土の下に遺物包含層が堆積し、地表面から0.5ｍで淡黄灰色砂質土の地山に至る。地山上面の標高は発掘区の南西で74.7ｍ、発掘区の北東で74.2ｍである。HJ第494－1・3次発掘区北半の遺構を整地土上面で、他の遺構を地山上面で検出した。

検出した主な遺構には、縄文時代の土器埋納土坑1、古墳時代の4条、奈良時代前半の掘立柱建物2棟、中頃～後半の掘立柱建物4棟、後半の掘立柱建物2棟、後半～末葉の掘立柱建物2棟、坪内道路1条、土坑1、平安時代の掘立柱建物5棟・塀1条がある。その他、時期の特定できなかった掘立柱建物12棟、土坑4がある。

掘立柱建物・塀の概要は一覧表に記し、以下、時代ごとに遺構の概要を述べる。

縄文時代　晩期後半の土器埋納土坑ＳＸ03がある。掘形は東西0.7ｍ、南北0.5ｍの平面楕円形で、深さ0.1ｍである。掘形内には、口縁端部の外面に刻目突帯を付す船橋式の深鉢が口縁部を西に横向きに据えられていた。

古墳時代　溝4条（ＳＤ04～07）は、後期の素掘りの溝で、すべて北東に振れる。幅・深さはともに0.3ｍ程度で、発掘区外に続く。



1.盛土　5.茶褐色粘砂（炭混、整地層）　9.淡灰黄色粘砂
2.灰色砂質土　6.淡黄灰色粘砂　10.淡黄灰色粘砂
3.黄灰色粘砂　7.淡灰色粘砂（淡黄色粘砂混）　11.淡黄灰色粘質土（地山）
4.黄茶灰色粘砂　8.黄茶灰色粘砂

第494－1次調査　発掘区東壁（北端）土層図　1/80

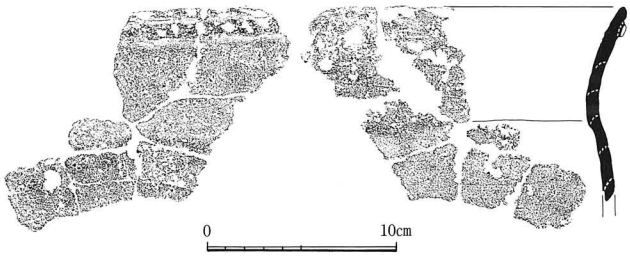
奈良時代

前半　発掘区南西隅にＳＢ216・217が建つ。両者とも発掘区外に続く。重複関係からＳＢ216はＳＢ228・221、ＳＢ217はＳＢ221よりも古い。

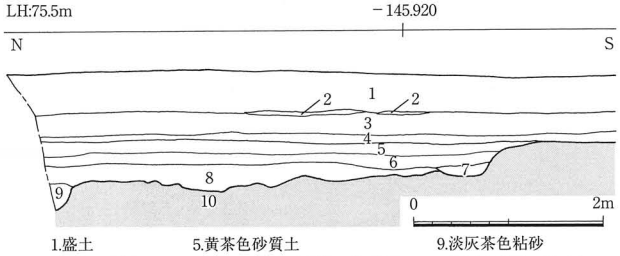
中頃～後半　ＳＢ218～221がこの時期に相当する。ＳＢ218の西妻柱と東妻柱を揃えるＳＢ219、ＳＢ218の東妻柱と西妻柱を揃えるＳＢ220がＳＢ218の南に建ち、ＳＢ219・220が東西に並立する。また、ＳＢ221がＳＢ220の南で、ＳＢ220の西妻柱と西側柱を揃えて建つ。重複関係からＳＢ218はＳＢ212とＳＡ215、ＳＢ220はＳＢ222よりも古く、ＳＢ221はＳＢ216・217よりも新しい。

後半　ＳＢ208・222・223とＳＡ215がこの時期に相当する。ＳＢ208は東西両面庇南北棟建物である。ＳＡ215は3間分を検出し、塀の東端を確認した。ＳＢ222はＳＡ215と北妻柱を揃え、南妻柱をＳＢ223の南側柱と揃える。ＳＢ223は妻柱を持たない。重複関係からＳＢ208はＳＢ213よりも古く、ＳＡ215はＳＢ218、ＳＢ222はＳＢ220よりも新しい。

後半～末葉　東西方向の坪内道路ＳＦ901が敷設される時期である。ＳＦ901の道路心の国土座標値はＸ＝－145,922.100、Ｙ＝－20,000.000。ＳＤ101・102は素掘りの溝で、ＳＦ901の両側溝である。北側溝ＳＤ101は、幅0.9ｍ、深さ0.4ｍで、長さ42ｍ分を検出した。溝心の国土座標値はＸ＝－145,920.600、Ｙ＝－20,000.000。南側溝ＳＤ102は、幅0.5～1.2ｍ、深さ0.3ｍで、発掘区西端から28.5ｍで途切れる。溝心の国土座標値は、



土器埋納遺構SX03出土縄文土器　1/4

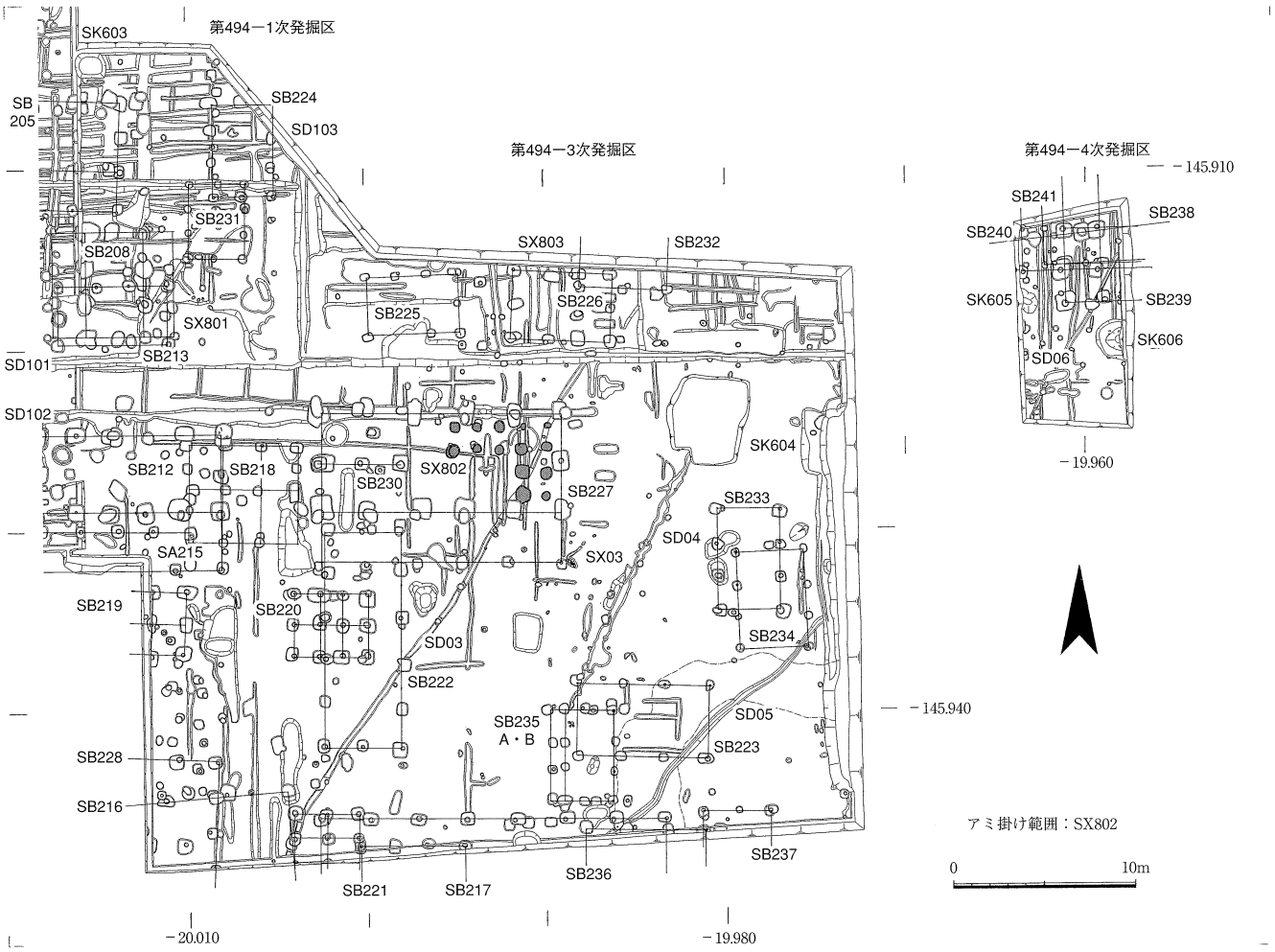


1.盛土　5.黄茶色砂質土　9.淡灰茶色粘砂
2.灰色砂質土　6.茶褐色粘砂（炭混、整地層）　10.黄灰色粘砂（地山）
3.灰黄色砂質土　7.淡灰茶色粘質土
4.淡黄灰色粘砂　8.黄茶色粘砂（灰茶色粘砂混）

第494－3次調査　発掘区東壁（北端）土層図　1/80

掘立柱建物・塀一覧

遺構番号	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長 m	梁間全長 m	桁行柱間寸法 m	梁間柱間寸法 m	廂の出 m	備考
SA215	東西	13 以上	26.0 以上		2.0 m等間			西に延びる
SB205	東西	4 × 3	7.5	5.7	2.5 m等間	北から 1.8-1.8-2.1	南 2.1	西に延びる
SB208	南北	4 × 4	6.0	6.0	北から 2.1-2.1-1.8	1.5 m等間	西・東 1.5	西に延びる
SB213	東西	3 × 2	6.0	3.0	西から 2.1-1.8-2.1			西に延びる
SB212	東西	5 × 3	10.0	7.2	2.0 m等間	北から 2.1-2.1-3.0	南 3.0	西に延びる
SB219	東西	2 以上× 2	1.8 以上	3.6	1.8 m	1.8 m等間		総柱建物
SB228	南北	4 以上× 2 以上	6.0 以上	2.1 以上	北から 2.1-1.8-2.1	2.1 m		桁行 4 間以上か？
SB216	東西	3 以上× 2 以上	6.6 以上	2.7 以上	3.3 m等間	2.7 m		西で南に振れる
SB224	南北	3 × 2	5.1	3.2	1.5 ～ 2.1 m	1.6 m等間		桁行柱間が不揃い
SB231	南北	3 × 2	4.2	3.0	1.2 ～ 1.5 m	1.5 m等間		桁行柱間が不揃い
SB225	東西	3 × 2	5.1	3.2	1.7 m等間	1.6 m等間		
SB218	東西	3 × 2	5.4	5.4	1.8 m等間	2.7 m等間		総柱建物
SB230	東西	2	4.2		2.1 m等間			門？
SB227	東西	5 × 3	13.0	8.1	2.6 m等間	2.7 m等間	南 2.7	
SB222	南北	5 × 2	12.0	4.0	2.4 m等間	2.0 m等間		
SB220	東西	3 × 2	3.9	3.4	1.3 m等間	1.7 m等間		総柱建物
SB221	南北	2 以上× 2	1.3 以上	3.4	1.3 m	1.7 m等間		総柱建物
SB229	東西	7 × ?	18.9		2.7 m等間			
SB217	?	東西 3 間	5.7		西から 1.8-1.8-2.1			北側柱か北妻柱
SB226	東西	3 × 2	5.4	3.6	西から 2.1-1.8-1.8	1.8 m等間		
SB232	南北	? × 2		4.8		2.4 m等間		南妻柱
SB233	南北	3 × 1	5.4	3.4	1.8 m等間	3.4 m		南北妻柱無
SB234	南北	3 × 2	5.4	3.6	1.8 m等間	3.6 m		南北妻柱無
SB223	東西	3 × 1	7.2	4.0	2.4 m等間	4.0 m等間		妻柱無
SB235A	南北	3 × 2	5.1	2.7	北から 1.8-1.5-1.8	西から 1.5-1.2		
SB235B	南北	3 × 2	5.1	3.6	北から 1.8-1.5-1.8	1.8 m等間		SB235A の建替
SB236	?	東西 3 間	6.6		西から 2.1-2.4-2.1			
SB237	南北	? × 2		3.6		1.8 m等間		北妻柱
SB238	?	東西 2 以上	2.7 以上		2.7 m			西で南に振れる
SB239	南北	3 以上× 2 以上	4.2 以上	2.0 以上	2.1 m等間	2.0 m	西 2.0	
SB240	東西	3 以上× 2 以上	4.2 以上	2.4 以上	2.1 m等間	2.4 m		
SB241	?	2 以上× 2 以上	2.1 以上	2.1 以上	2.1 m	2.1 m		



第 494 － 1 ・ 3 ・ 4 次調査　遺構平面図　1/400

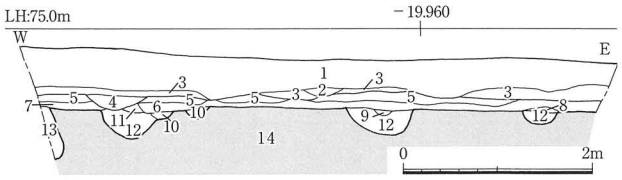
X = − 145,923.600、Y = − 20,000.000。両者の溝心々距離は3.0 mである。ＳＤ103はＳＤ101から北へ流れる南北方向の素掘りの溝で、幅1.8 m、深さ0.4 mで、長さ11 m分を検出した。ＳＢ224はＳＢ205の北側柱と北妻柱を揃える。ＳＸ801は南北3.0 m、東西9.5 m、深さ0.3 mの土坑である。重複関係からＳＤ101はＳＸ801よりも新しく、ＳＤ102はＳＢ212･227よりも古い。

平安時代前半　ＳＤ101・102・103埋没後の時期に相当する。ＳＢ213の東側には、ＳＢ225・226が両側柱筋を揃えて建つ。さらに南側には、ＳＢ212と南側柱筋を揃えてＳＢ227が建つ。ＳＢ227は南庇付東西棟建物であり、身舎内の東半部分で、埋甕跡であるＳＸ803を検出した。甕はすべて抜き取られていたが、深さ0.2 m前後の擂鉢状の痕跡を14個確認した。ＳＡ230はＳＢ227廃絶後に築かれる。他に、ＳＢ228がＳＢ212の東妻柱と、ＳＢ229がＳＢ227の西妻柱と柱筋を揃えて建つ。重複関係からＳＢ225はＳＤ101よりも新しく、ＳＢ226はＳＸ803よりも古い。ＳＢ212はＳＤ102・ＳＢ218、ＳＢ227はＳＤ102よりも新しく、ＳＢ230よりも古い。ＳＢ228はＳＢ216、ＳＢ229はＳＢ221よりも新しい。

時期不明の遺構　以下、時期の特定できなかった遺構について述べる。ＳＢ233・234は妻柱を持たない南北棟建物である。両者は建物位置が重なるが、先後関係は不明である。ＳＢ235A・Ｂは東側柱を共有し、桁行・梁間と間数を変えずにＡをＢに建て替える。建物位置はＳＢ223と重なるが、先後関係は不明である。ＳＢ238は南側柱あるいは南妻柱を一部検出した。重複関係からＳＢ239・240よりも古い。ＳＢ239・240・241は建物の南西隅を検出した。重複関係からＳＢ239はＳＢ240よりも古い。

ＳＫ603は南北1.5 m、東西1.8 m、深さ1.4 mの土坑で、断面形は袋状である。ＳＫ604は南北22 mの溝状の土坑で、東西1.5 m、深さ0.7 mまで確認した。発掘区外東に続く。ＳＫ605は南北1.3 m、東西0.9 m以上、深さ0.4 mの平面不整形な土坑である。西端は発掘区外に続く。ＳＫ606は南北2.5 m、東西1.7 m以上、深さ1.6 mの土坑である。発掘区外東に続く。枠材はなかったが、平面・断面の形状から、井戸の抜き取り痕跡の可能性がある。ＳＸ804はＳＢ226廃絶後、当建物の北西隅の柱痕跡上に掘られた土器埋納土坑で、南北0.45 m、東西0.6 m、深さ0.25 mである。土坑底には、須恵器壺Ａが正位置で置かれ、壺内には流入土以外に内容物は無かった。

遺物は、整理箱で87箱分が出土した。大部分が遺物包含層から出土した奈良時代の土師器・須恵器の小片である。他に、奈良時代の丸瓦･平瓦や古墳時代の土師器･須恵器・埴輪の小片が少量ある。（宮﨑正裕、山前智敬）



1.灰色砂質土　6.黄茶灰色粘砂　11.淡橙色粘砂
2.灰黄色砂質土　7.黄茶色粘砂　12.黄灰褐色粘砂
3.淡灰茶色粘砂　8.茶灰色粘砂　13.黄灰色粘砂（茶灰色砂混）
4.淡茶灰色粘砂　9.黄橙色粘砂　14.淡黄灰色砂質土（地山）
5.黄灰色粘砂　10.淡黄茶灰色粘砂

第494 − 4次調査　発掘区北壁土層図　1/80

第494 − 1次調査　発掘区全景（北西から）

第494 − 3次調査　発掘区全景（北から）

第494 − 4次調査　発掘区全景（東から）

（2）平城京右京二条三坊五坪の調査　第494－5・495－1・－2次

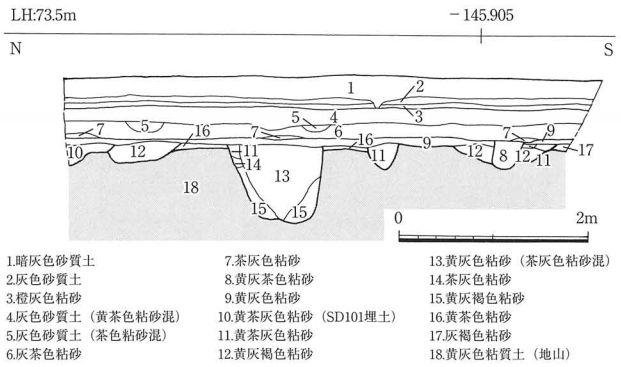
第494－5次調査　調査地の北側で、平成12年度に実施した市HJ第443－5・6次調査で、五・六坪坪境小路とその北側溝を検出している。今回、五坪の宅地内北端の様相確認を主目的として実施した。

基本層序は、耕土・床土以下、灰色砂質土、灰茶色粘砂と続き、地表下0.6mで黄灰色粘質土の地山に至る。地山上面の標高は概ね72.7mで、遺構はすべて地山上面で検出したが、発掘区北東部の一部に整地土を確認した。

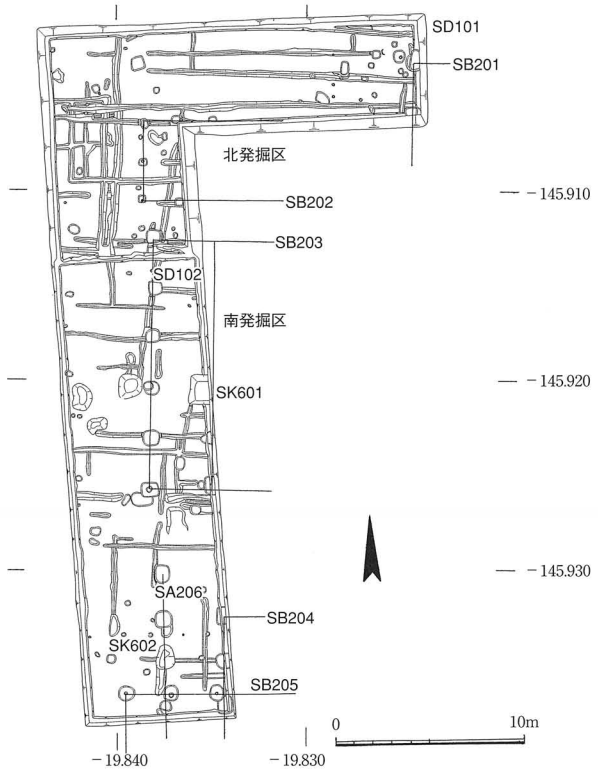
検出遺構には、溝2条、掘立柱建物5棟・塀1条、土坑2がある。SD101は東西方向の素掘溝で、溝の南端を検出したのみであるが、SD102は幅・深さともに0.3m、長さ約13mの南北方向の素掘溝で、国土方眼方位北で東に振れる。重複関係からSB203よりも古い。SB201は南北1間（3.0m）以上の建物の北西隅である。SB202は桁行2間（3.6m）以上、梁間2間（3.9m）の東西棟建物である。SB203は桁行5間（13.0m）、梁間1間（3.3m）以上の西庇付南北棟建物で、柱掘形から奈良時代後半の土器が出土した。重複関係からSD102よりも新しく、SK601よりも古い。SB204は南北2間（4.8m）以上、SB205は東西2間（4.8m）以上の建物の北西隅で、重複関係からSB204はSB205よりも古い。SA206は南北3間（4.2m）以上の塀で、柱掘形から奈良時代後半の土器が出土した。重複関係からSK602よりも古い。SK601は南北1.5m、東西1.2m以上、深さ0.4mの土坑で、重複関係からSB203よりも新しい。SK602は南北1.2m、東西1.0m、深さ0.5mの土坑で、重複関係からSA206よりも新しい。

遺物は、整理箱で10箱分が出土した。大半が遺物包含層から出土した奈良時代の土師器・須恵器である。

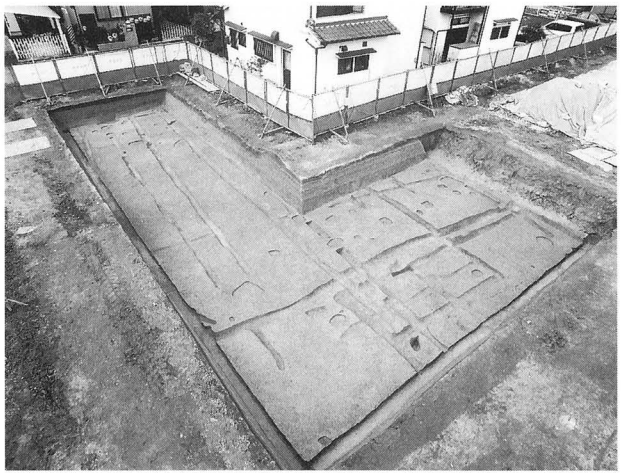
（宮崎正裕、山前智敬）



第494－5次調査　発掘区東壁土層図　1/80



第494－5次調査　遺構平面図　1/400



第494－5次調査　北発掘区全景（北西から）

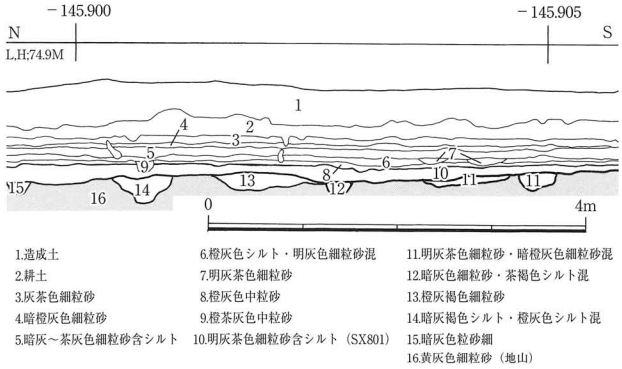
第494－5次調査　南発掘区全景（北から）

第495－1次調査　調査地は五坪の北西隅に位置する。調査地の北で、平成12年度に実施した市HJ443－4次調査で、五・六坪坪境小路とその北側溝を検出している。今回、五坪北端の様相確認を主目的として実施した。

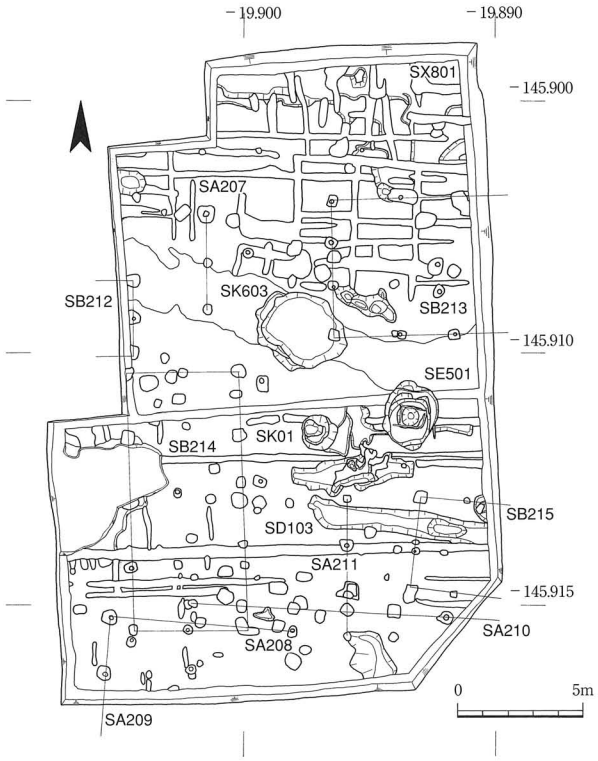
基本層序は、造成土、耕土以下、灰茶色細粒砂、暗橙灰色細粒砂、灰茶色シルト質細粒砂、橙灰色中粒砂～シルト質細粒砂と続き、地表面から0.8～1.0mで、黄灰色～灰色細粒砂の地山に至る。また、発掘区北半には南東から北西に流れる自然流路がある。北岸を検出したが、南岸は発掘区外である。地山上面の標高は73.2～73.3mで、遺構はすべて地山上面で検出した。

検出遺構には、弥生時代の土坑1（SK01）、奈良時代の掘立柱建物4棟（SB212～215）、掘立柱塀5条（SA207～211）、溝1条（SD103）、井戸1基（SE501）の他、耕作に関連すると考えられる素掘溝がある。以下、主な遺構について述べる。SK01は直径0.6m、深さ0.3mの土坑である。弥生土器の甕底部の破片が少量とサヌカイトの剥片1点が出土した。SA210は東西方向の塀で、5間（10.0m）分を検出した。発掘区外東に続く。SB214は桁行4間（10.0m）、梁間2間（4.5m）の南北棟建物である。SB215は梁間2間（3.6m）の東西棟建物で、桁行1間（1.8m）分を検出した。SB214・215は、両建物の柱抜き取り痕跡から8世紀後半～末の遺物が出土した。SD103は幅1.0m、深さ0.2mの東西方向の素掘溝で、長さ7m分を検出した。発掘区外東に続く。8世紀の土師器、須恵器が出土した。重複関係からSA208・SB215よりも古い。SE501は井戸の枠抜き取り痕跡で、南北2.8m、東西2.1m、深さ2.8mである。8世紀後半～末の土師器、須恵器、9世紀後半～10世紀前半の土師器、黒色土器A類、平瓦が出土した。SK603は南北3.0m、東西3.5mの土坑で、深さ0.45mである。SX801は東西方向の溝状の落ちで、発掘区北端の最深部は深さ0.3mである。8～9世紀後半の土師器、須恵器が出土した。重複関係からSX801は耕作に関連すると考えられる素掘溝よりも新しい。

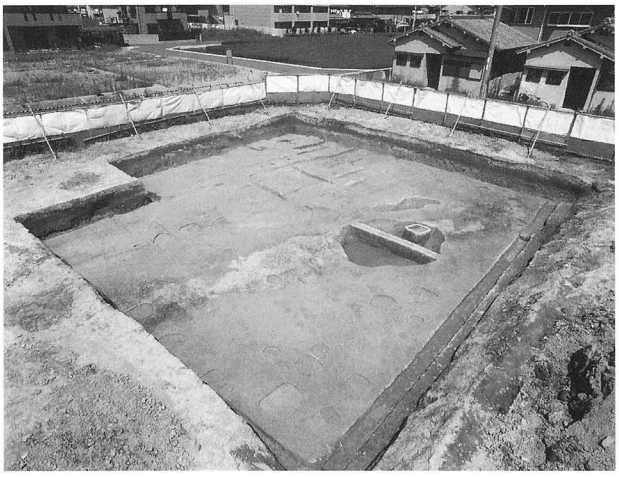
（池田富貴子）



第495－1次調査　東壁土層図（1/80）



第495－1次調査　遺構平面図　1/300



第495－1次調査　北発掘区全景（南西から）

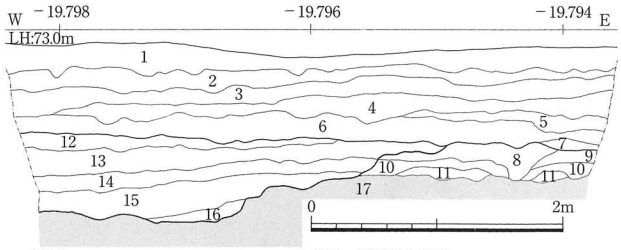
第495－1次調査　南発掘区全景（北西から）

第495－2次の調査　調査地は、五坪の北東隅に位置する。調査地の北には五・六坪坪境小路、東には四・五坪坪境小路が想定されている。今回、これら周辺の条坊に関連する遺構の確認を主目的として実施した。

基本層序は、造成土、耕土以下、明灰茶色細粒砂、淡茶灰色細粒砂、暗灰～茶灰色細粒砂、明灰色細粒砂、明橙茶灰色シルト、暗橙灰色シルト、明茶褐色シルトと続き、地表面から1.1 mで黄灰色～橙灰色シルト～細粒砂の地山に至る。地山上面の標高は発掘区の北端で71.8 m、南端で72.1 mである。遺構はすべて地山上面で検出したが、発掘区北端から南へ3 m程度の範囲に概ね0.3mの厚さの整地土が広がることを確認した。

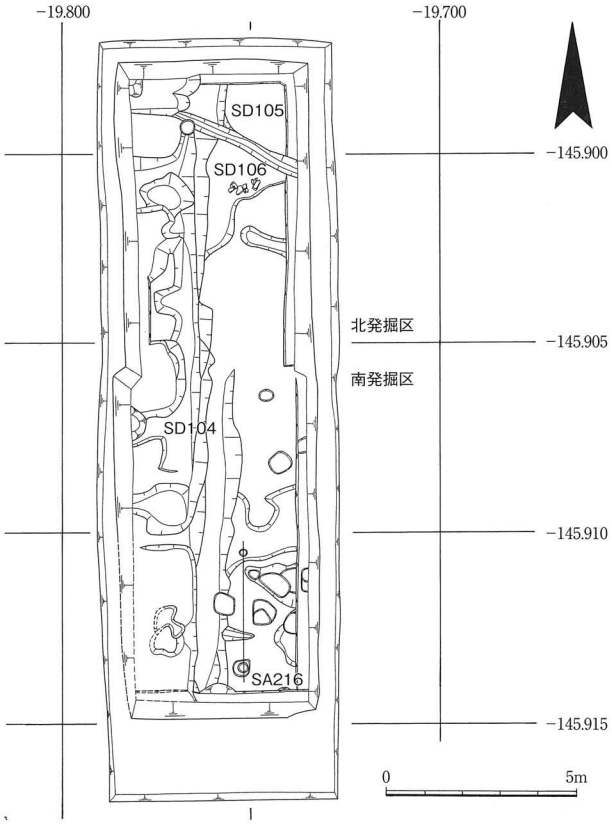
奈良時代の遺構には、五坪の東を画する築地塀（ＳＡ216）とその雨落溝（ＳＤ104）、素掘溝（ＳＤ105・106）、柱穴がある。ＳＡ216は南北1間（3.0 m）分を検出。築地の西添柱の可能性がある。雨落溝ＳＤ104は溝幅3.0 m以上、深さ0.3 mの南北方向の素掘溝で、東肩を検出したが、西肩は発掘区外である。溝底の標高は南端で71.56 m、北端で71.46 mである。溝内埋土は、上層が暗褐色細粒砂、下層が茶灰色～黄灰色シルトに大別される。ＳＤ105は南東から北西へ斜行する幅0.3 m、深さ0.2 mの溝で、遺構内には暗褐色細粒砂が堆積していた。出土遺物はなく、ＳＤ104と同時期に埋没する。ＳＤ106は上層埋土がＳＤ104と似ており、ＳＤ104のあふれの可能性がある。

遺物の大半が築地雨落溝ＳＤ107から出土している。ＳＤ107の出土遺物には、土師器、須恵器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、磚、刀子がある。ＳＤ107の下層埋土には8世紀後半の、同上層埋土には8世紀末～9世紀初頭の遺物が含まれる。ＳＤ110からは、軒丸瓦6313型式Ｄ種、軒平瓦6685型式Ａ種、同6710型式Ｃ種が出土している。　（池田富貴子）

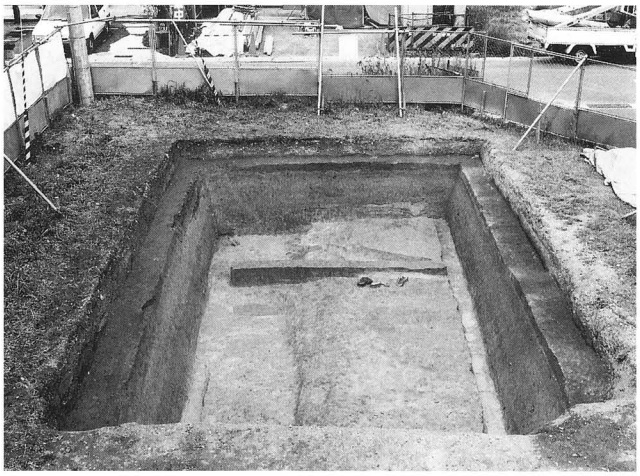


1.耕土
2.淡灰色細粒砂
3.明灰茶色細粒砂
4.暗灰～茶灰色細粒砂
5.暗橙灰色シルト含明灰色細粒砂
6.明茶褐色シルト含明灰色細粒砂
7.橙茶褐色細粒砂
8.橙灰色シルト
9.青灰～茶灰色中粒砂
10.青灰～橙灰色中粒砂含橙灰色シルト
11.橙灰色シルト含青灰色中粒砂
12.茶灰褐～暗橙褐色細粒砂
13.暗褐色細粒砂
14.茶褐色シルト含暗灰色細粒砂
15.茶灰色細粒砂含黄灰色シルト
16.黄灰色シルト含茶灰褐色シルトブロック
17.青灰～橙灰色中粒砂（地山）
（12～16　SD104）

第495－2次調査　北壁土層図　1/60



第495－2次調査　遺構平面図　1/200



第495－2次調査　北発掘区全景（南から）

第495－2次調査　南発掘区全景（北から）

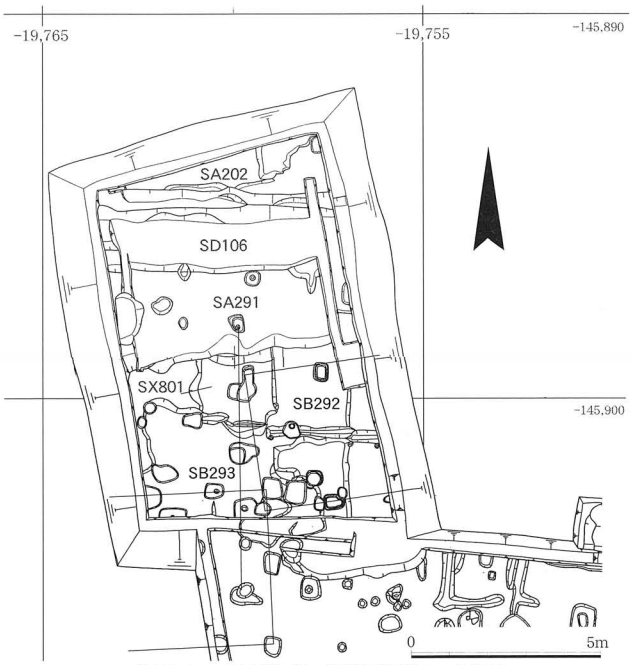
（3）平城京右京二条三坊四坪の調査　第494－2次

調査地は、平城京右京二条三坊四坪の北西部に位置する。調査地の北に三・四坪坪境小路が想定される。発掘区の南で、平成6年度に市HJ第293次調査、発掘区の西で平成9年度に市HJ第378－2次調査を実施しており、三・四坪坪境小路南側溝、四坪の北辺築地とその雨落溝などを検出している。今回、条坊に関連する遺構の確認を主目的として実施した。

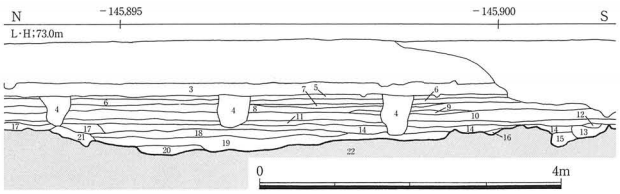
基本層序は、造成土、耕土以下、明灰色細粒砂、橙灰色細粒砂、明灰色細～中粒砂、暗褐色細粒砂、橙灰色シルト含青灰色細粒砂、橙茶灰色シルト含マンガン、暗灰青色中粒砂と続き、地表面から1.2mで黄灰色シルトの地山に至る。地山上面の標高は71.65～71.7mである。遺構はすべて地山上面で検出した。

奈良時代の遺構には、四坪の北辺築地（SA202）とその雨落溝（SD106）、掘立柱建物2棟（SB292・293）、掘立柱塀1条（SA291）と、浅いくぼみ状の遺構SX801がある。SD106は幅4.0～5.0m、深さ0.1～0.3mである。南へ広がる浅い部分は上層、北側の深い部分は下層である。後述するSA291との重複関係からあふれなどが原因で、当初の掘形より幅広くなっていると考える。SA202は添柱痕跡を検出していないが、市HJ第378－2次の調査成果から北辺築地と考える。SA291はHJ第293次調査で検出した柱穴と合わせて、南北4間（4.8m）の塀となる。北端の柱穴はSD106の上層を掘削後に検出しており、SD106が南へ広がる前の遺構と考える。重複関係から、SB292はSA291よりも新しい梁間2間（3.6m）の東西棟建物で、桁行1間（1.9m）分を検出した。SA291と重複する北西隅の柱穴は、2回作り直された後、柱が抜き取られている。SB293は、桁行2間（3.3m）以上、梁間2間（4.2m）の東西棟建物である。東側柱列はHJ第293次調査区まで続く。北側柱列はHJ第378－2次調査区までは続かず、両発掘区間で収まる。SB292とは建物位置は重複するが、新旧関係は不明である。SX801は、くぼみ状の遺構で、重複関係からSD106、SA291よりも古い。遺構内には、灰茶色シルトが0.05～0.1mの厚さで、2m四方の範囲に堆積している。

出土遺物には、土師器、須恵器、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、磚、石器、石製品がある。SD106からは、8世紀後半～末を中心とした遺物が出土し、上層と下層の出土土器には、明確な時期差は確認できなかった。また、上層の出土土器には、9世紀的に見えるものもあったが、溝内の大部分は8世紀末頃にはほぼ埋没していたものと考えられる。SX801、掘立柱建物・塀の柱穴の出土土器には、詳細な時期が分かるものは少ないが、建物としてまとまらなかった柱穴の1つから、8世紀後半の土器が出土している。掘立柱建物・塀の重複関係からみて、3時期以上の変遷が確認できる。　（池田富貴子）



第494－2次調査　遺構平面図　1/200



1. 攪乱
2. 造成土
3. 旧耕土
4. 暗灰色細粒砂(橙灰色細粒砂混)
5. 明灰色細粒砂
6. 橙灰色細粒砂(明灰色細粒砂混)
7. 暗灰色細粒砂(暗灰色粘土混)
8. 明灰色細・中粒砂
9. 明褐色細粒砂
10. 明灰色細・中粒砂(暗褐色細粒砂混)
11. 橙灰色シルト含青灰色細粒砂
12. 暗橙褐色細粒砂
13. 橙褐色細粒砂(明灰色細粒砂混)
14. 暗灰青色中粒砂(暗褐色中粒砂混)
15. 黄灰色シルト(明灰色シルト混)
16. 暗灰青色細粒砂
17. 橙茶灰色シルト含マンガン
18. 茶褐色シルト含明灰色細粒砂
19. 暗灰青色細粒砂含橙褐色シルト
20. 暗灰青色細粒砂含む茶褐色シルト (18～20　SD106)
21. 暗茶褐色シルト含細粒砂
22. 黄灰色シルト(地山)

第494－2次調査　発掘区東壁土層図　1/100

第494－2次調査　発掘区全景（南から）

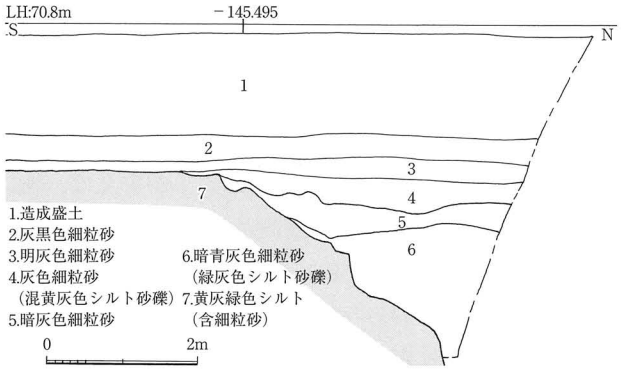
（4）平城京右京二条三坊一坪の調査　第511次

調査地は、平城京右京二条三坊一坪の北辺部中央に当たり、すぐ北には一条南大路が通る。現況は駐車場で、それ以前は水田であった。過去に一坪内で実施した調査は3件（市HJ第51次・第378－6次調査、国183－18次調査）ある。一坪内は、坪の中央を西から東に流れる旧流路があり、奈良時代をはじめ室町時代の掘立柱建物や井戸を検出しているが、全体的に建物をはじめ遺構密度が希薄である。また、調査地の北東にあたる一条南大路と西二坊大路の交差点付近で実施した市HJ第480－2次調査で、南北方向の近世流路を検出している。今回、一条南大路と一坪北半部に関する奈良時代以降の土地利用の様相を把握することを主目的に調査を実施した。

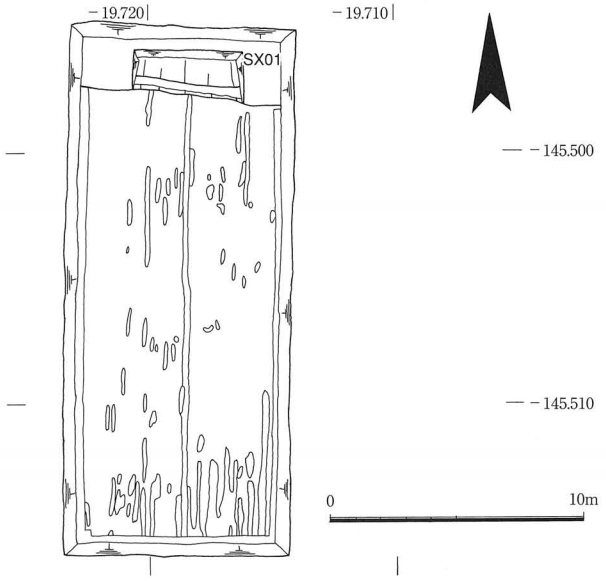
基本層序は、駐車場の造成盛土（厚さ0.6 m）の下に水田耕作土・床土（厚さ0.3 m）がある。遺物包含層は確認できず、地表下0.9 mで黄灰緑色シルト（含細粒砂）の地山に至る。地山の標高は概ね70.1 mである。

遺構はすべて地山上面で検出した。耕作に関連すると考えられる南北方向の素掘り溝や杭の痕跡を多数確認した以外は、発掘区北端で東西方向の溝状の落ち（ＳＸ01）を検出したのみである。ＳＸ01は東西長7.5 m以上で、発掘区外に続く。国土方眼方位東で南にやや振れる。幅は2.5 m以上になるが、北端は発掘区外北に続く。坑内を深さ1 mまで掘削したが、最深部には到達していない。埋土から近世陶磁器が出土した。土層観察の結果、流水の痕跡は確認できないことと、堆積状況から、少なくとも上層の0.2 m程度は水田耕作土（西壁土層図の「4」層）で、その下層は水田化した際の盛土（同図の「5・6」層）である可能性が高い。

当調査地の西約20 mで実施した市HJ第51次発掘区でＳＸ01を検出していない。ＳＸ01は当調査地と市HJ第51次調査地の間で途切れるか、国土方眼方位西でさらに北に振れるものと考えられる。今回、一条南大路に関わる遺構は検出できなかったが、ＳＸ01は検出位置と規模を考えると、一条南大路の南側溝を踏襲したか、あるいは元来「切り通し」であった一条南大路を踏襲した可能性が高い。（宮崎正裕）



第511次調査　発掘区西壁（北端）土層図　1/100

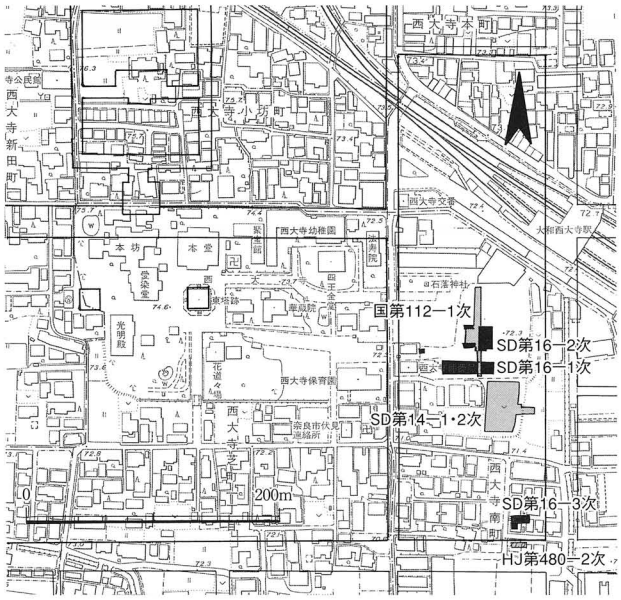


第511次調査　遺構平面図　1/300

第511次調査　発掘区全景（南から）

第511次調査　ＳＸ01（西から）

（5）西大寺旧境内の調査　第16－1・－2・－3次



第16－1～－3次調査　発掘区位置図　1/6,000

調査地は、平城京の条坊復原では右京一条三坊三・四坪で、西大寺造営後は伽藍の東に隣接する寺地になったと推定されている。ＳＤ第16－１・２次調査地は三坪の南半部中央にあたる。現状は駐車場で、その前は水田であった。ＳＤ第16－３次調査地は四坪の南東隅にあたる。現状は宅地であるが、その前は四坪の南を画する一条南大路の遺存地割の水田で、東を画する西二坊大路の遺存地割の水田とともに周辺より１～２ｍ低くなっていた。

Ⅰ．ＳＤ第16－１・２次調査の概要

ＳＤ第16－１・２次調査地が位置する三坪内では、昭和53年度に奈良国立文化財研究所が第112－１次調査（490㎡）を実施し、奈良時代の掘立柱建物・塀、溝と中世の土坑を確認したが、奈良時代の遺構は西大寺に関連するのか、それ以前の宅地に伴うのかは不明である。

今回の調査は、発掘区を前述の国第112－１次調査と一部重複して設定し、西大寺造営前の三坪内や造営後の寺地内の様相を確認することを主な目的として実施した。

Ａ．層序　基本的には造成土（厚さ0.2～0.3m）、黒灰色砂質シルトの耕作土層（厚さ0.2m）の下で明黄灰色砂質シルト層の地山となる。地山上面が奈良時代の遺構面で、標高はＳＤ第16－１・２次発掘区とも概ね71.７ｍである。

Ｂ．検出遺構　奈良・平安時代と室町時代の遺構がある。以下、主なものを記す。なお、遺構番号は奈良国立文化財研究所と区別して付した。

奈良・平安時代　掘立柱建物２棟（ＳＢ201・202）、掘立柱列４条（ＳＡ203～206）、井戸１基（ＳＥ501）、土坑２基（ＳＫ601・602）、性格不明遺構１基（ＳＸ801）がある。

ＳＢ201は重複関係から後述のＳＥ501より古いことがわかる。掘立柱列のうちＳＡ203・204は塀で、発掘区の縁辺で確認したＳＡ205、ＳＡ206は建物の一部の可能性がある。ＳＡ203はＳＢ202の西側柱列と柱筋を揃える。

ＳＥ501は一辺2.1ｍの平面隅丸方形で深さ0.9ｍの掘形内に一辺0.9ｍの方形縦板組横桟止め構造の井戸枠を据える。枠材は一部が残る。枠内底部に据えた径0.3m、深さ0.2ｍの曲物を水溜とし、その周囲に礫を敷く。曲物内から須恵質の円面硯が出土した。

ＳＫ601の埋土からは奈良時代の土器片とともに炭や銅滓が出土した。付近で銅製品の鋳造が行われたことがうかがえる。ＳＸ801は、一辺1.2ｍの平面隅丸方形で深さ0.5ｍの掘形の底部中央西寄りに東西0.4m、南北0.6ｍの平面方形の礫敷きがあり、その周縁に土師器や須恵器の甕片や平瓦片が立ち並んでいた。礫敷き上には木片が残存した。掘形が明黄灰色砂質シルト層の地山でおさまるため、井戸ではなく何らかの目的で礫敷き上に木製の枠か箱を据えた可能性を考える。

室町時代　井戸３基（ＳＥ502～504）、土坑３基（ＳＫ603～605）がある。

ＳＥ502は、径1.5ｍの平面円形の掘形をもつ瓦積井戸で、深さは2.1ｍ。底部に径0.6ｍ、深さ0.6ｍの桶を据えて水溜とする。瓦積に利用した瓦は大半が平瓦で、他に軒瓦や瓦質土器片も含む。水溜内から15世紀の土師器皿、瓦器椀が出土した。ＳＥ503、ＳＥ504はともに径1.2ｍの平面円形の素掘りの井戸で、深さは1.2ｍ。前者からは14～15世紀とみられる土師器皿片が、後者からは14～15世紀とみられる瓦質土器摺鉢片が出土した。

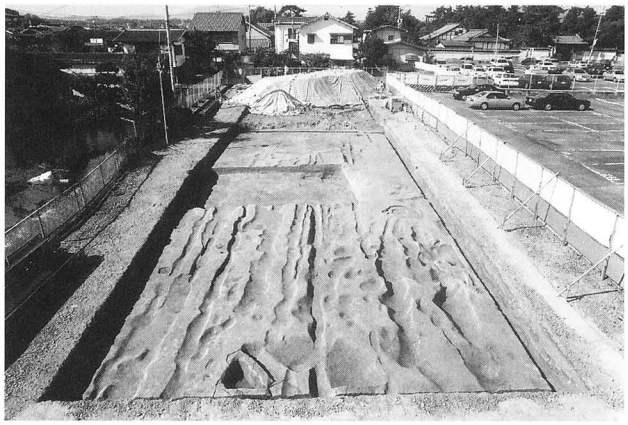
ＳＫ603～605の埋土からは、14～15世紀の土師器・瓦質土器・青磁や瓦塼類が出土した。

Ｃ．出土遺物　土器、瓦塼類、木製品等が遺物整理箱70箱分出土した。大半は瓦塼類である。

土器　奈良・平安時代の土師器（杯・甕）、黒色土器Ａ類（器種不明）、須恵器（杯・甕・壺・平瓶）、須恵質の円面硯と、室町時代の14～15世紀の土師器（皿・羽釜）、瓦器（椀）、瓦質土器（鉢・擂鉢）、青磁（椀）がある。

瓦塼類　大半は室町時代の井戸ＳＥ502の瓦積みに利用されたものである。平瓦・熨斗瓦・塼のほか、奈良時代の軒丸瓦（6125型式Ａ種、6235型式Ｃ種、6236型式Ｆ種、6316型式Ｍ種）、軒平瓦（6663型式Ｂ・Ｆ・Ｈ・Ｊ種、6675型式Ａ種、6710型式Ｄ種、6712型式Ｇａ種、6719型式Ａ種、6721型式Ｄ・Ｄｂ種、6732型式Ｑ種、6761型式Ａ種、6764型式Ａ種、6775型式Ａ種）や平安

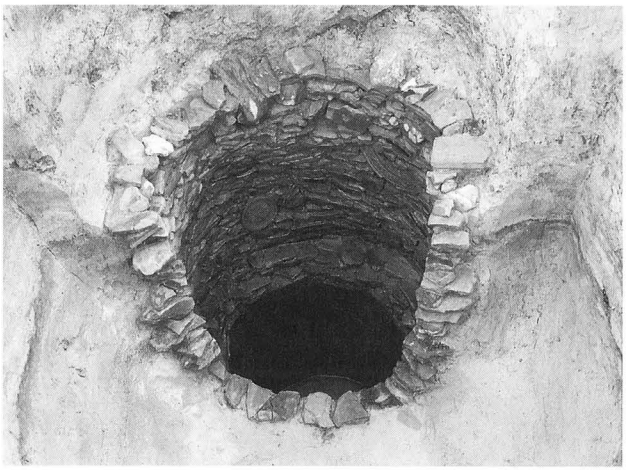
第16－１次調査　Ａ発掘区西半部（東から）



第16－１次調査　Ａ発掘区東半部（東から）

井戸ＳＥ501（西から）

第16－１次調査　Ｂ発掘区全景（南西から）



井戸ＳＥ502（北から）

性格不明遺構ＳＸ801（南から）

時代以降の軒丸瓦（巴紋）、軒平瓦がある。奈良時代の軒瓦の多くは西大寺旧境内や西隆寺跡で出土している。なお、室町時代の土坑ＳＫ603の埋土からも平安時代以降の軒丸瓦（巴紋）、軒平瓦や塼が出土した。

Ｄ．まとめ　奈良～平安時代の遺構は、重複関係から少なくとも２時期の変遷があったことが把握できた。ＳＤ第16－１次発掘区の西寄りで大型の建物やその一部とみられる柱列を確認したことから、この付近に大型の建物が複数存在した可能性がある。

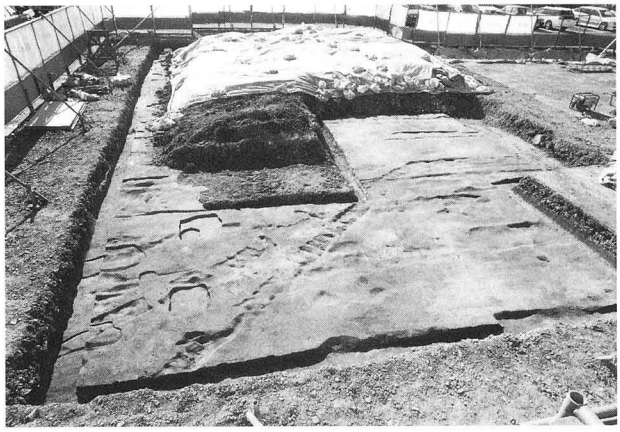
室町時代の遺構の形成時期は14～15世紀の間におさまるようである。井戸があることや土坑から出土した土器の多くが日常雑器であることから、調査地付近が当時居住地であった可能性がある。

Ⅱ．ＳＤ第16－３次調査の概要

ＳＤ第16－３次調査地が位置する四坪南東隅の一条南大路の遺存地割と認識できる水田においては、南隣接地で平成14年度にＨＪ第480－２次調査（45㎡）を実施している。調査の結果、耕作土下に暗灰色のシルトや粘土が約３ｍ堆積することを確認し、水田化する前は流路であったことがうかがえた。

今回の調査は、四坪の南東隅の様相を把握することや一条南大路の遺存地割と認識できる水田の形成過程を確認することを主な目的として実施した。

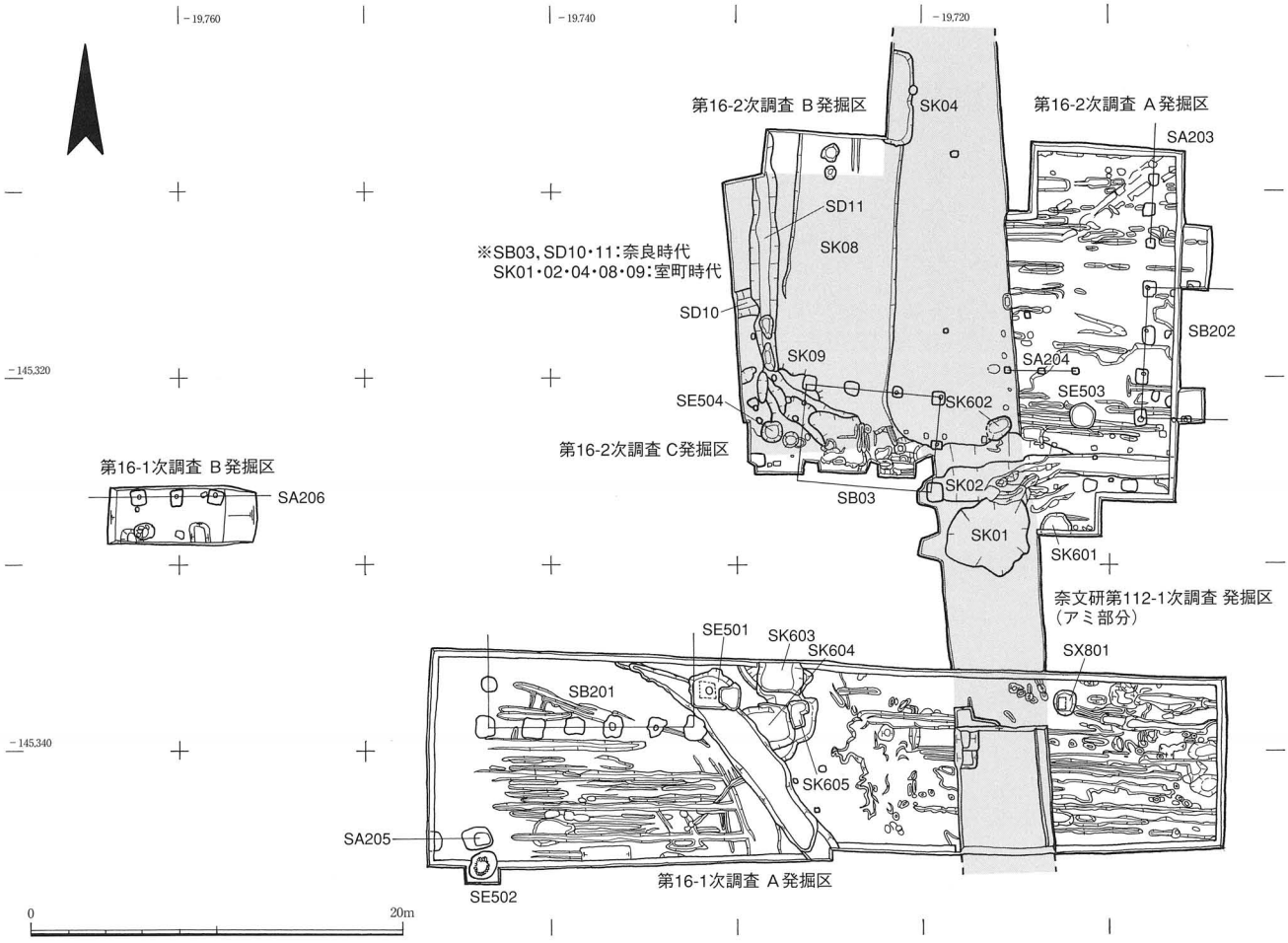
第 16 － 2 次調査　A 発掘区（北から）



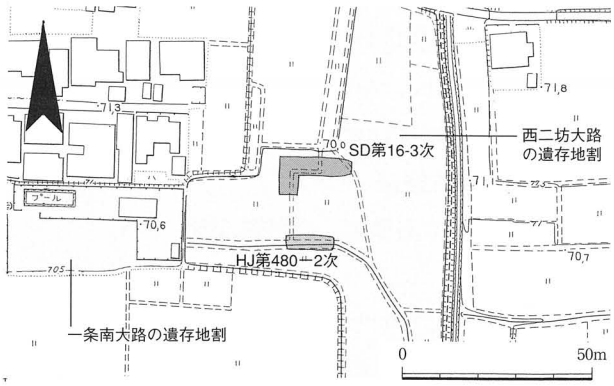
第 16 － 2 次調査　A 発掘区北部分（北から）

第 16 － 2 次調査　A 発掘区（北から）

第 16 － 2 次調査　C 発掘区（南から）



第 16-1・2 次調査　遺構平面図　1/400



調査地と周辺の水田　1／2,000（基図は奈文研作成の地形図）

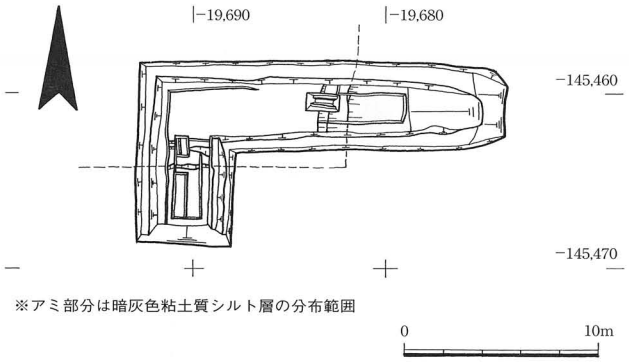
A．層序　基本的には、造成土（厚さ1.4m）、黒灰色粘土質シルトの耕作土及び灰色砂質シルトの床土（ともに厚さ0.1～0.2m）の下で青灰色砂質シルトブロック・シルト混じり砂層（以下ブロック・砂層と記す、厚さ0.9m）となる。ブロック・砂層の下は、発掘区の西辺では青灰色砂質シルトの地山、東辺では灰色砂礫層となることを一部深く掘り下げて確認した。地山上面の標高は68.6mで、周辺の調査地より2～3m低い。ただし、発掘区の東部分と南西部分では床土の下が暗灰色粘土質シルト層（厚さ0.9m）になり、その下で灰色砂礫層となる。

ブロック・砂層は、分布範囲がかつての水田地割とほぼ対応することから、水田造成に伴う盛土の可能性がある。暗灰色粘土質シルト層と灰色砂礫層は水成の堆積層で、層相から前者は湿地、後者は流路を反映するとみる。

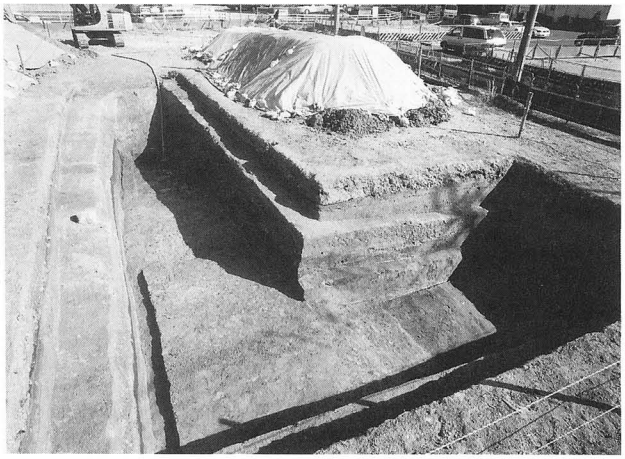
B．遺構・遺物　遺構検出はブロック・砂層の上面で行ったが、溝や土坑といった遺構はみられなかった。

出土遺物は、土器、瓦類、木製品が遺物整理箱1箱分ある。ブロック・砂層から室町時代（14～15世紀）とみられる瓦質土器浅鉢片が出土した。発掘区の東寄りで確認した暗灰色粘土質シルト層から江戸時代（17世紀中葉以降）の肥前系陶器椀片が、同南西寄りで確認した暗灰色粘土質シルト層から曲物、下駄、漆器椀等の木製品がそれぞれ出土した。

C．まとめ　発掘区南西寄りや東寄りで確認した暗灰色粘土質シルト層は、南隣接地で平成14年度に実施した市ＨＪ第480－2次調査地で確認した耕作土下の堆積層と様相がよく似ていることから、相互に対応すると判断する。今回の調査地で確認した地山上面が周辺の調査地より低いことや、層相及び暗灰色粘土質シルト層の出土遺物の時期を勘案すれば、一条南大路の遺存地割が認識できる水田は、室町時代以前の切通し状を呈する流路が江戸時代頃に埋没した後に開発されたと考える。室町時代以前の流路は、一条南大路の位置を踏襲することから人為的に掘削されたもので、その際に四坪南辺部は切土により大幅に改変されている可能性がある。（安井宣也）

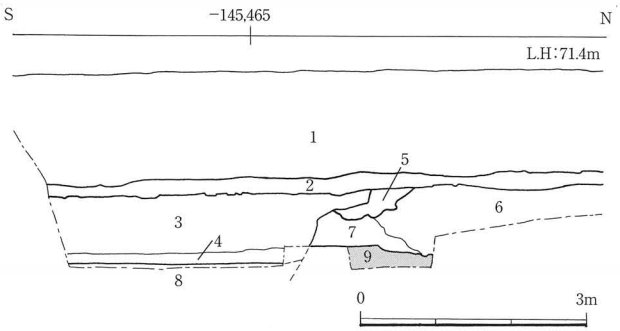


第16－3次調査　遺構平面図　1/400



第16－3次調査　発掘区全景（西から）

第16－3次調査　発掘区西壁（南東から）

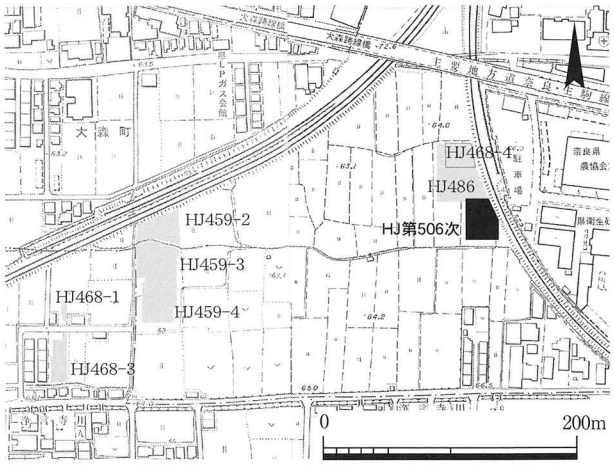


1 造成土
2 黒灰色粘土質シルト（耕土）
3 暗灰色粘土質シルト
4 灰色砂混じりシルト質粘土
5 灰色砂質シルト
6 青灰色砂質シルトブロック・シルト混じり砂
7 青灰色砂質シルトブロック・砂質シルト
8 灰色砂礫
9 青灰色砂質シルト（地山）

第16－3次調査　発掘区西壁断面図　1/100

2. JR奈良駅南特定土地区画整理事業に係る調査 平城京左京五条五坊一・二坪、東四坊大路、条間北小路の調査 第506次

調査次数	HJ 第506次	調 査 期 間	平成15年11月7日～平成16年3月3日
事業内容	ＪＲ奈良駅南特定土地区画整理事業	調 査 面 積	638㎡
届出者名	奈良市長	調査担当者	立石堅志、原田憲二郎
調 査 地	奈良市大森町123－１他		



第 506 次調査　発掘区位置図　1/6,000

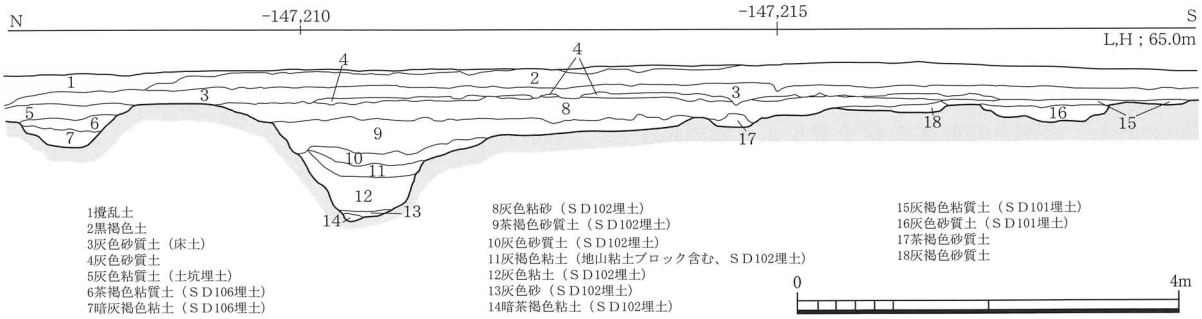
奈良市教育委員会では、平成13年度から事業地の発掘調査を実施しており、今年度で3年目となる。昨年度までに、9箇所4,703㎡の発掘調査を行った。今年度は連続立体交差関連公共施設整備事業に係る調査として実施した。事業地はJR大和路線、桜井線および主要地方道奈良生駒線の南に広がる水田地帯であり、東から西へと緩やかに低くなる沖積地上に位置する。また、事業地中央には用水路が西流している。南北方向の地形はこの用水路付近に向い緩やかに下がっている。今回の調査地は事業地の最東端で、JR桜井線に接する位置にある。

調査は昨年に引き続き、平城京左京五条四坊十六坪、五坊一・二坪及び東四坊大路・条間北小路の想定地で行い、当初2箇所、計880㎡の発掘区を設定した。後に遺構の密度が高いことなどから1箇所638㎡に調査箇所を減じ、総面積を縮小して実施した。検出した遺構には弥生時代と奈良時代以降のものがある。昨年度の調査に引き続いて、当該調査地周辺に弥生時代の遺跡が広がることを明らかにし得た。なお、報告に際して用いる遺構番号については、昨年度までの例に従い、坪ごとに古墳時代以前の遺構に2桁の番号を、奈良時代以降のものに3桁の番号を付している。これらの番号は今後の各坪調査での通し番号とする。

Ⅰ．はじめに

東四坊大路と五条条間北小路との交差点、およびこれに面する五坊一・二坪の各宅地の一部にかけて、638㎡の範囲で発掘区を設けた。発掘区北側で、昨年度実施したHJ486次発掘区と接する位置にある。

発掘区内での基本的な土層序は、耕作土である黒褐色土以下、灰色砂質土、灰褐色砂質土と続き、現地表下約0.4mで黄白色粘土または黄褐色粘土を主とする地山となる。発掘区内での地山は、東から西へ向かって緩やかに低くなっており、また、南北の方向では中央の条間北小路付近に向かって緩やかに下がる。東四坊大路と条間北小路との交差点付近では、流水による浸食の影響でさらに低くなっている。地山の標高は発掘区北東で64.2m、北西で64.0m、中央東で64.1m、同西で63.9m、南東で64.2m、南西で63.9mである。発掘区北端では、この地山上面に弥生時代後期の遺物を包含する黄灰色粘質土の堆積が認められる。昨年度実施した市HJ486次調

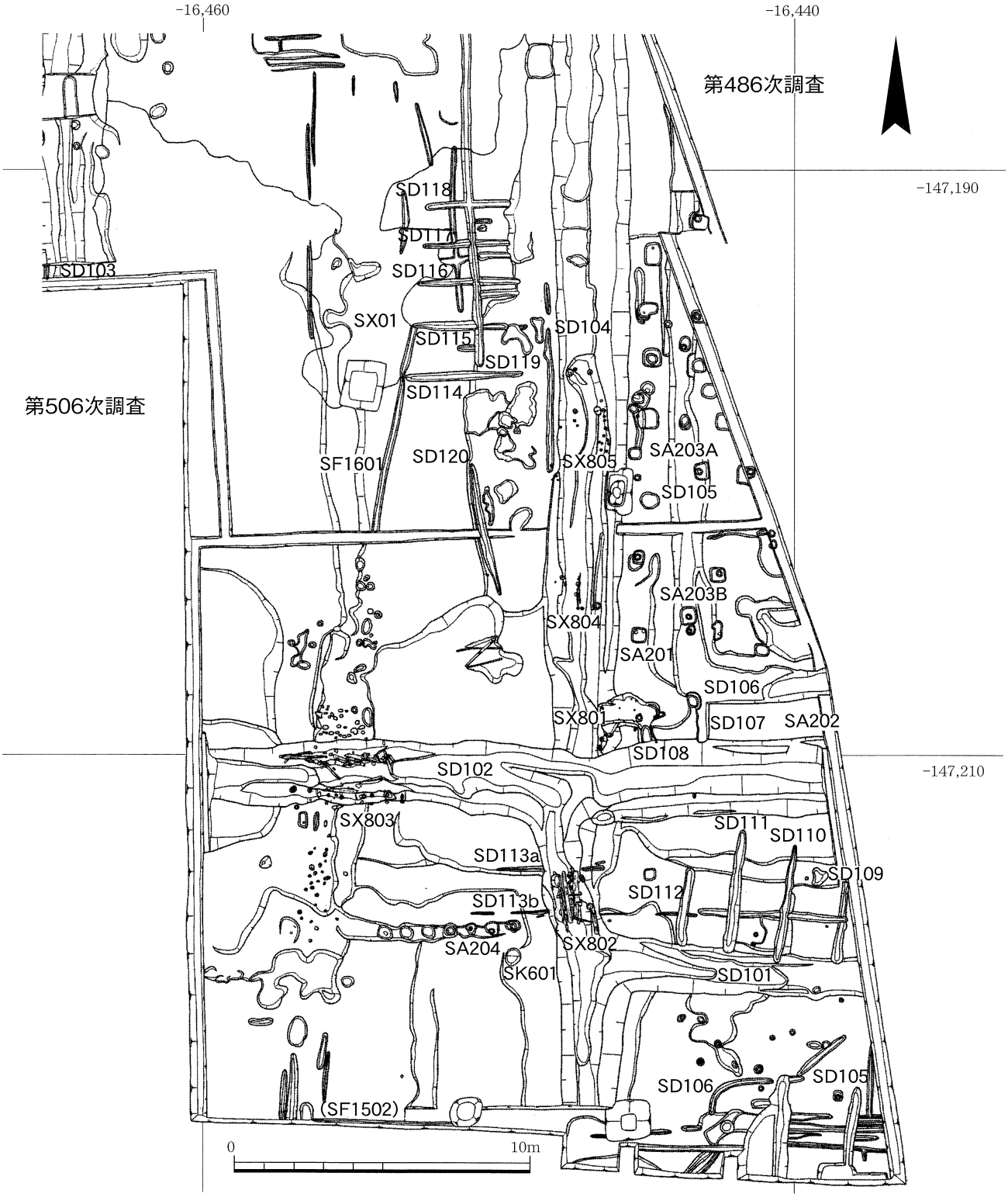


第 506 次調査　発掘区東壁土層図　1/80

査区の南辺でも同様の堆積土を検出しており、これに続く弥生時代の遺物包含層である。また、発掘区南東隅でも同様に、地山の黄褐色粘土上面で弥生時代の遺物が出土する溝を検出している。今回の発掘区内ではこれ以外の弥生時代の遺構は確認できなかったが、発掘区南へ更に広がる可能性を示した。

Ⅱ．検出遺構

遺構は、前述の弥生時代の遺構以外は奈良時代以降のもので、基本的に黄褐色粘土もしくは黄白色粘土の地山上面で検出した。検出遺構には、東四坊大路、同東側溝、五条条間北小路、同南北両側溝、橋、側溝護岸、五条五坊一坪の西面及び南面を限る築地塀、同雨落溝、排水暗渠、掘立柱建物・塀、溝、土坑がある。また、東四坊大路と五条条間北小路との交差点を検出したが、条間北小路の北側溝が大路路面を横断し、西に流れることが明らかとなったことは特筆すべき事である。



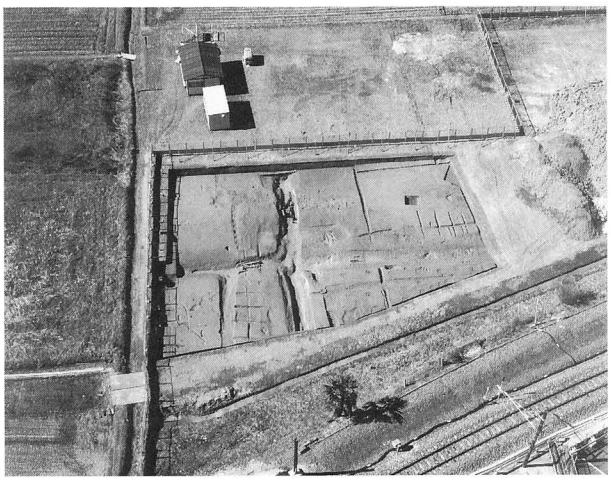
第 506 次調査　遺構平面図　1/200

ＳＦ1601は東四坊大路である。東四坊大路は、昨年度北側での市HJ486次調査で東西両側溝を検出しており、側溝心々間距離で17.4m の幅員があることが明らかになっている。今回の調査では東側溝を検出し、東側溝西肩から約12m 分の路面を検出した。路面上には、これまでと同じく特に舗装などの造作は見られなかった。路面の横断面形状は、HJ486次調査では東側溝から西側溝への片流れとなっていたが、今回の発掘区内では路幅の中央付近から両側溝へ向かい緩やかに下る蒲鉾状となっている。また、大路の中軸線に合わせて、条間北小路北側溝ＳＤ102に橋ＳＸ803が架けられていた。この橋近くでは、側溝流水の溢れによる浸食を受け、側溝の最終埋没段階では通行可能な路面として幅3m 程度が残るのみであった。この状況は、条間北小路北側溝ＳＤ102の南側の大路路面でも同様にみられ、側溝流水が路面へ想像以上に大きく溢れていたことが窺える。更に、条間北小路北側溝が横切るところの大路の路面には、流水による地山の浸食痕が非常にはっきりと細い溝状に残っていた。

ＳＦ0102は五条条間北小路である。南北両側溝を検出しており、側溝心々間距離で6.7m の幅員がある。平成13年度 HJ477-1次調査において、左京五条四坊坊間路との交差点付近で同小路南北両側溝を検出しており、この際には側溝心々間距離が5.8m であることが明らかになっている。大路路面と同じく、路面上に舗装などの造作は認められなかった。小路の中軸線よりやや南寄りで、東四坊大路東側溝ＳＤ104に橋ＳＸ802が架けられる。

ＳＤ104は東四坊大路東側溝である。条間北小路北側溝ＳＤ102より北側では幅2.2 ～ 2.5m で南に流れる。これが後に路面側へと溢れ、最終埋没段階には幅8m 余りにも広がる。宅地側の溝肩は垂直に近く落ちるのに対し、路面側は溢れによってなだらかとなる。宅地側からの深さは0.6m。一部に溝肩の浸食を防ぐため、護岸を設けている箇所を認めた。うち、護岸ＳＸ804では側板とこれを留める杭を検出した。護岸ＳＸ805では、杭の痕跡のみが溝底両側に並ぶ。溝底の標高は北端最深部で63.6m、条間北小路北側溝ＳＤ102への合流部では63.3mである。一方、条間北小路北側溝ＳＤ102の南側でも、当初幅2m 程度であったものが路面側への浸食により3.5m 程度へと広がり、最終的には7.5m 以上にまで溢れる。また同じく宅地側からの深さは0.6mで溝肩が垂直に近く落ちるのに対し、路面側はややなだらかに落ちる。条間北小路南側溝ＳＤ101と合流し、橋SX802にあたるところで流水による溝底の抉れが見られ、やや溝が深くなる箇所がある。溝底の標高は南端最深部で63.5m、条間北小路北側溝ＳＤ102への合流部では62.9m である。この溝底の標高差から見ても、東四坊大路東側溝ＳＤ104の排水は南北ともに条間北小路北側溝へ集められ西へ流されていたことは確実であろう。溝埋土は大きく4層に分けることができる。最下層は灰褐色砂質土もしくは一部に灰色砂、第2層は茶褐色砂質土もしくは灰色粘土、第3層は灰褐色粘質土であり、最上層に灰色粘砂が堆積する。この第3層以上が堆積する段階でほぼ側溝は埋まり、大きく路面上へ溢れているようである。さらに最上層が堆積する段階に至ると、交差点付近は溢れた水で湿地状となり、路面の高い部分だけがかろうじて道路の形態を保っていたような状態であったろうことが窺える。

ＳＤ102は五条条間北小路北側溝である。幅2.5m、検出面からの深さ1.3mの溝。西に流れる。一坪の宅地側である溝北肩は垂直に落ちるのに対し、路面側である南肩はやや緩やかに落ちる。溝はこの周辺の基幹水路となっており、頻繁に溝浚えが行われていたようである。このため浚渫の困難な橋ＳＸ803の構築される部分の溝底が他の溝底よりも一段高い状態に残っている。この橋ＳＸ803の上流部分のＳＤ102内の下層と第２層には、多くの祭祀遺物が溜まっていた。人面墨書土器やミ



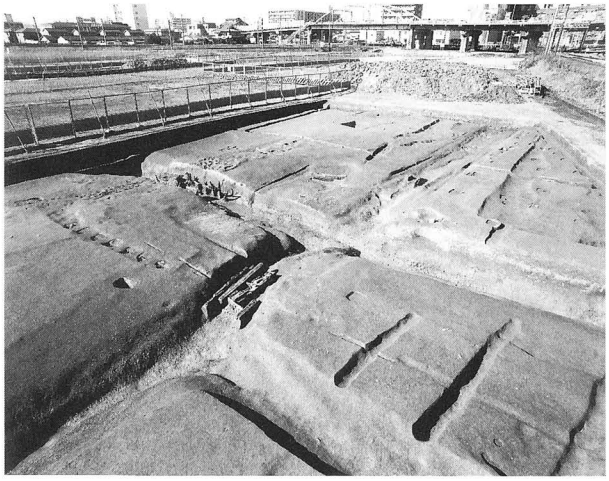
第 506 次調査　発掘区全景（東から）

東四坊大路東側溝 SD104（北から）

ニチュア土器、斎串、大型人形等がある。さらに、側溝北岸に接して多くの馬の骨が出土していることも特筆すべきであろう。溝底の標高は東端で、63.0m、東四坊大路東側溝ＳＤ104との合流箇所で62.9m、橋ＳＸ803の溝底で63.1m、西端で62.8mとなる。溝埋土は基本的に4層であり、下層から灰色粘土もしくは灰褐色粘土、灰色砂質土、茶褐色砂質土であり、最上層に灰色粘砂が堆積する。最上層の段階では南に4.5～5.2mほどに広がり、条間北小路路面から南側溝上面にまで大きく溢れる。また、最下層に灰色砂が堆積するところもある。

ＳＤ101は条間北小路南側溝である。素掘りの溝で、発掘区西端では幅1.5m、検出面から0.25mと他の条坊側溝に比して狭く、浅い。東四坊大路東側溝ＳＤ104との合流部に向かうにつれ、徐々に深くなるとともに路面側へ広がり、幅2m程度になる。溝底の標高は東端で64.0m、合流部で63.5mである。埋土は基本的に2層あり、下層から灰色砂質土、灰褐色粘質土である。東四坊大路東側溝ＳＤ104との合流部に近づくにつれ、最上層に条間北小路北側溝ＳＤ102から路面を越えて溢れた灰色粘砂が溜まっていた。

五条条間北小路北側溝 SD102 と SD104（北から）



五条条間北小路南側溝 SD101（手前）と SD102・SD104 の合流部（南東から）

ＳＸ802は条間北小路SF0102の中軸よりやや南に合わせて、東四坊大路東側溝ＳＤ104に架けられた木橋である。溝肩に杭を打ち込み、これに橋桁、橋板を架ける構造であると考える。橋板は既に崩落していたが、一部流出せずに落ち込んでいるものも見られた。造り替えは見られない。ただ、溝がほとんど埋没した状態で、小路路面から大路路面まで人頭大の石を置き、飛び石状の石橋を造っている。

ＳＸ803は東四坊大路ＳＦ1601の中軸に合わせて、条間北小路北側溝ＳＤ102に架けられた木橋である。溝肩に杭を打ち込み、これに橋桁、橋板を架ける構造であると考える。橋板は既に崩落していたが、一部流出せずに落ち込んでいるものも見られた。橋脚の杭の並びや打ち込み深さなどから、橋は最低3時期の造り替えがあることが窺える。更に最終段階では橋ＳＸ802と同様に大路路面から溝を越え対面の路面まで人頭大の石を置き、飛び石状の石橋とする。また、当初の橋板が落下した時点で、橋板の一部を用い護岸する。

ＳＤ105・106は東四坊大路東側溝ＳＤ104、条間北小路北側溝ＳＤ102と約1.4～1.7mの空間を隔て平行する素掘りの溝である。幅1～1.2mで、検出面からの深さ0.2～0.3m。宅地を囲むようにＬ字状に曲がる。溝埋土は茶褐色粘質土である。側溝との間に坪を限る何らかの閉塞施設があり、その雨落ち溝となろう。ただ、検出した空間の幅を考えると、築地塀を想定することは難しく、小規模な土塀もしくは掘立柱塀であったろうか。

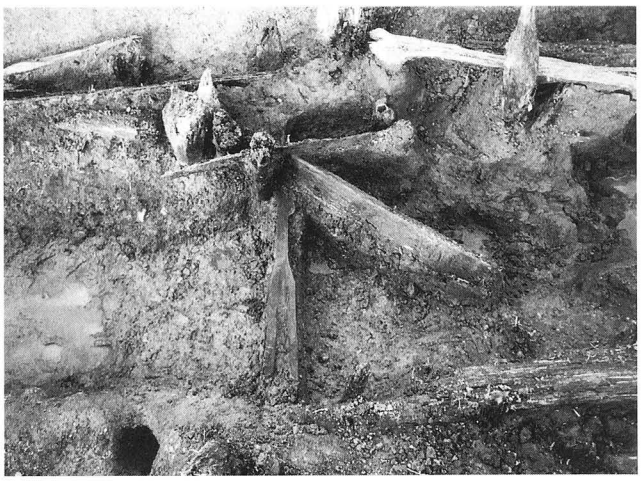
ＳＤ107は前述の雨落ち溝から条間北小路北側溝ＳＤ102へ繋がる溝である。幅0.4m、検出面からの深さ0.2mの素掘り溝で、溝壁面は垂直で溝底は平らである。暗渠となろうか。

ＳＡ201・202は条坊側溝と前述の雨落ち溝ＳＤ105・106に挟まれた平坦な空間地である。一坪の南・西を限る閉塞施設の存在を考える。ただし、土塀などの痕跡は全く残っていない。

ＳＡ203はＳＡ201の空間地に並ぶ掘立柱列である。重複関係からＡ・Ｂの2時期がある。ＳＡ203Aは空間地の中央で南北4間の柱列を検出した。柱間は北から1.8－1.8－2.1－2.7mである。ＳＡ203BはＡの柱穴に重複する南北3間の柱列。柱間は北から1.8－3.6－2.4mである。これらの柱列はおそらくは閉塞施設の一部であろう。特にＡ列は柱穴の深さも深く規模も大きい。ただし、南北に繋がる柱穴が認められないためその詳細は不明。

ＳＸ801は一坪の南西隅、塀ＳＡ201がＳＡ202へ曲がる角につくられた、東西2.1m、南北1mの平面長方形の土坑である。坑底は西に下がり、東四坊大路東側溝

木橋 SX802 検出状態（南東から）



大型の人形木製品出土状態（南から）

ＳＤ104に開く。検出面からの深さ約0.5m。坑内の長辺に沿って側板を立て、径2cm 程度の杭を打ち、留める。その後裏込土で側板を押さえるものであろう。当初は溝ＳＤ108で、条間北小路北側溝ＳＤ102に繋がっていたが、後に溝が先に埋められたものと考える。坑底の標高は西端で63.4m である。

ＳＤ108はＳＸ801からＳＤ102に繋がる溝である。幅0.4m、検出面からの深さ0.3m である。溝肩は垂直に掘り下げられ、底は平坦に近い。溝底の標高は63.6m。

ＳＤ108、ＳＸ801の両遺構の性格については、坪のこの位置に構築する遺構の類例がなく、現状では不明である。また、溝ＳＤ108の溝底の標高と条坊側溝のそれを比較するとかなりの高低差があり、どのような状況でこれが機能していたのかを窺い知ることはできない。

ＳＡ204は東四坊大路路面上で検出した小土坑列である。条間北小路ＳＦ0102の路面南端及び橋ＳＸ802の南端に合わせ、東西に並ぶ。西端はほぼ橋ＳＸ803の東端に位置を合わせ止まる。ほぼ0.7m 間隔で並ぶ小土坑は、平面は一辺0.4m の方形であるが、いずれも掘形が浅く底面に凹凸がある。柱を立てたのではなく、石を据えたような痕跡に見える。またこの土坑列東端の土坑から南に１ｍのところに、土坑ＳＫ601がある。こちらは掘形も深く柱穴であろうと考える。ただしこれに続く柱穴はない。ともに、橋と小路の位置を意識しているように見え、何らかの標識とする意図があったのであろうか。

ＳＤ113は条間北小路路面から橋ＳＸ802上を通り、東四坊大路路面へ続く、幅1.5m で平行する2条の溝である (a・b)。荷車などの轍の痕跡と考えられる。東四坊大路東側溝 SD104がある程度埋没した段階で、崩壊した木橋を覆う埋土の上面に人頭大の石を置き、石橋とした時期の遺構である。

ＳＤ109～112は条間北小路ＳＦ0102の路面で検出した、ほぼ1.8m間隔で平行する4条の溝。溝は、国土方眼方位北で東に10°振れる。各溝は、それぞれ幅0.3m、検出面からの深さ0.3m程の素掘溝で、埋土からは奈良時代の遺物が出土。条間小路の両側溝の埋没よりも早くに埋まっているが、側溝開削の当初には開いていた可能性もある。これと同様な溝が東四坊大路路面上にもある。

ＳＤ114～118は東四坊大路ＳＦ1601の路面で検出した、ほぼ1.5m間隔で平行する5条の溝。こちらの溝はほぼ国土方眼方位に沿う。溝の幅は、それぞれ0.2m程度、検出面からの深さ0.2m程度の素掘溝である。同じように大路東側溝 SD104の埋没よりも早くに埋まっているが、大路側溝開削当初の時期には開いていた可能性もある。

ＳＤ119はＳＤ114～118に重複する溝で、これらの溝よりも新しい。昨年度調査HJ486次発掘区から続く。幅0.2m、検出面からの深さ0.2mの素掘溝である。ＳＤ120はＳＤ119の南で検出した幅0.2m、検出面からの深さ0.1m程度の溝。全長4.4mを確認した。北で西に振れる。ＳＤ105は発掘区南東隅で検出した幅0.3m、検出面からの深さ0.3mの素掘溝である。二坪宅地内での溝。ＳＤ109～112までの溝と同方位を示す。埋土から８世紀代の遺物が出土。ＳＤ106は同じく発掘区南東部、二坪の宅地内で検出した溝である。東四坊大路東側溝ＳＤ104、条間北小路南側溝ＳＤ101から約3m離れ、これに平行するようにＬ字状に曲がる。条坊側溝に平行することから、残存状態が悪いが坪北西の閉塞施設の雨落ち溝であった可能性も否定できない。全長3.5m程度を検出。溝埋土からの出土遺物はなく、時期は不明である。　（立石堅志）

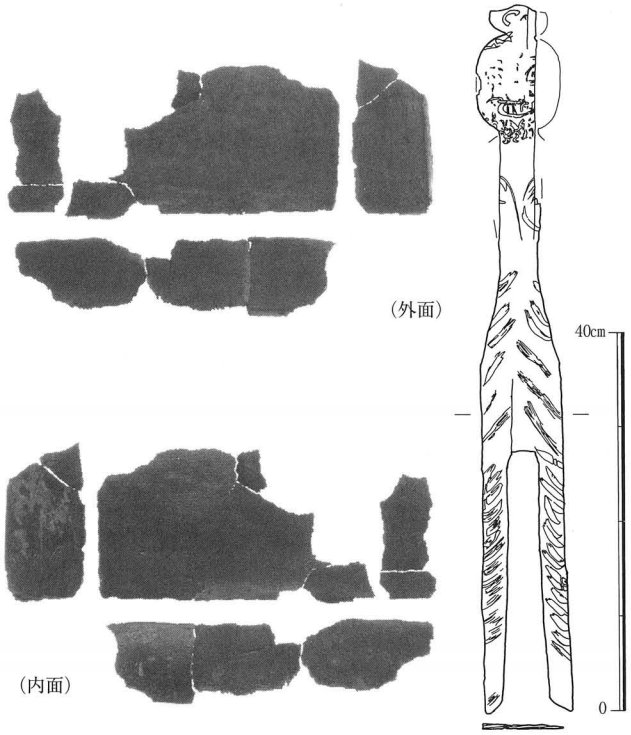
出土遺物　弥生時代の土器、石器、８～９世紀初頭にかけての瓦塼類、土器類、土製品、銭貨、金属製品、木製品、漆製品、石製品、鋳造関連品、獣骨、種子類が合わせて遺物整理箱112箱分と、木橋ＳＸ802・803の部材77点がある。弥生時代のものは、素掘溝と遺物包含層のほか、条坊道路側溝等から出土した。土器は、小片で詳細な時期は不明であるが、庄内式と思われる破片も

ある。石器には、弥生時代遺物包含層から出土した花崗岩製敲石？１点、凝灰岩製磨製石斧？１点、剥片２点、条坊道路側溝等から石鏃１点、削器１点、掻器３点、楔形石器４点、二次加工のある剥片１点、剥片15点、砕片１点、原石１点がある。特に記述のないものの材質は、サヌカイトである。奈良～平安時代のもののうち、瓦塼類、土製品、銭貨、金属製品、木製品、石製品、鋳造関連品、獣骨、種子類は表にまとめた。末尾の数値は基本的に破片数だが、接合したり、明らかに同一個体と判別できるものは１点に数えた。瓦塼類には他に丸瓦・平瓦がある。

条坊道路側溝や同時期の遺構で出土した土器類には、土師器杯・皿・杯蓋・椀・高坏・甕・壷・鉢・盤・羽釜、竈・甑・ミニチュアの竈と甑と壷、須恵器杯・皿・杯蓋・椀・高坏・甕・壷・壷蓋・鉢・盤・羽釜・平瓶・横瓶・ミニチュアの壷蓋と平瓶、黒色土器Ａ類杯・皿・椀、灰釉陶器椀がある。以上には、墨書のあるものがあり、判読可能なものを表にまとめた。また、窯記号と考えられるものを含む線刻を施したものが16点、人面墨書土器（土師器甕・壷Ｂ）が20点ある。この他に製塩土器の小片が遺物整理箱１箱分ある。陶硯類は円面硯が３点あるが、このうち脚部に胡人の頭部を意匠したものが１点ある(写真)。残存する破片は高さ6.5cm、幅8.15cm、厚さ3cmである。また、須恵器杯Ｂ底部外面や蓋内面を利用した転用硯がある。

木製品は、橋の部材を除くと遺物整理箱10箱分あり、その大半が部材などを割り裂いて薪などに使用した燃えさしや、用途不明品、剪定した枝類などである。

漆製品はＳＤ102第２層からの乾漆箱がある（写真）。



SD102 出土乾漆箱、大型の人形 1/8

一番大きな破片が底面の一角で長辺16.5cm、短辺10.9cm。側の破片は高さ5.9cm。底面との接点がないため、正確な高さは不明だが、6.0cm程に復元できる。詳しい分析は行ってないが、構造は粗布を芯に両面に漆を塗り重ね、外面は砥の粉漆のような光沢のない仕上げになっている。内面は紙を１層貼って黒漆を薄く塗る。側縁の芯は、さらに外側に幅6mm程の布を貼っている。表面の粗さから未製品の可能性もある。漆に関しては、他に土師器や須恵器の壷、皿の内面や底部外面に漆が付着したものがＳＤ104最下層～第２層、ＳＤ102最下層～第３層、ＳＸ801の最上層から合わせて18点が出土。（原田香織）

出土遺物一覧

遺構	瓦塼類	土製品	銭・金属製品	木製品（主なもの）	石製品・鋳造関連品	獣骨（馬）	種子類
SD104 最下層	軒平：型式不明１、塼１	土馬９	神功開寶１	横櫛１	千枚岩加工屑１、凝灰岩製部材１、鉄滓４		桃核 47、クルミ殻３
SD104 第２層	軒平：6666A １、6685A ２、6703A １点、型式不明１、二彩丸瓦１	土馬６				小片	
SD104 第３層	軒丸：型式不明１						
SD104 最上層	軒丸：型式不明１	土馬３、土錘１			流紋岩製不明石製品１		
SD102 最下層	軒平：6644C １、塼２		鉄釘１	大型人形１、人形１、斎串２、矢形？１、刀形か桧扇１、留針？１		下顎骨１、脚部 10	桃核 32、梅核８、栗皮７、ウリ類種子 10
SD102 第２層	塼３	土馬４	銅製帯金具（鉸具）１、佐波理製瓔珞１	馬形１、横櫛２、人形？１、曲物蓋板１、曲物底板内面漆塗り１、留針？２		下顎骨１・右半部１、脚部７	桃核 68、梅核２、クルミ殻２、栗皮２、瓢箪皮１
SD102 第３層	塼２点	土馬６、土錘１				脚部１	
SD102 最上層	軒平：6644A １、6682B １、6685A １、6721I １、型式不明１、塼 11	土馬２			榛原石製部材、滑石製磚？１、被熱した凝灰岩片１		桃核１
SD104・102 最上層	軒平：6703A １点、塼１点				ガラス坩堝１		
SX801 最下層							桃核１
SD103 のあふれの埋土	塼２	土馬１、不明土製品１	萬年通寶１				
SA204						歯片２	
SD113							桃核１
SD114		土馬１					
SD116		土馬１					

Ⅲ　まとめ

今回の調査では、東四坊大路と五条条間北小路の交差点を明らかにすることができた。道路の交差点での調査例はこれまで20数例が知られているが、大路、小路それぞれに側溝を検出し、かつ架橋遺構を残していた例は無く、非常に貴重な成果を得ることができた。また、大路の路面を条間小路の一方の側溝が横切り、排水が図られる例も希有である。平城京条坊計画の施工に当たり、どの程度当時の地形が影響したのかを考える上で良好な資料になると考える。条坊遺構を今回のように広範囲に渡って検出した例は無く、今後出土遺物の検討が進むことにより、当該地での条坊遺構の存続と廃絶に至るまでの過程を明らかにすることができるであろう。最後に今回検出した条坊遺構の国土座標成果を記し、今後の参考とする。

（立石堅志）

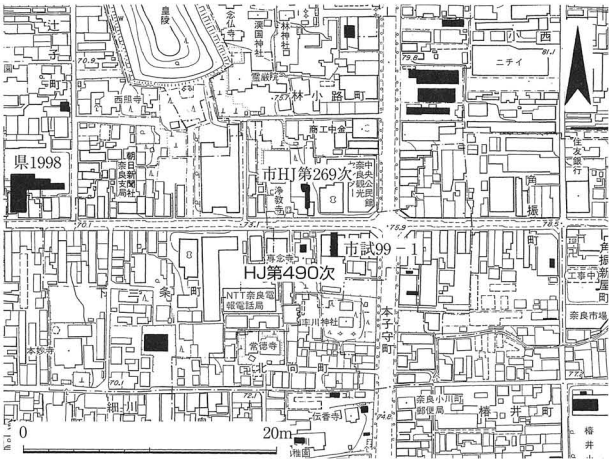
東四坊大路東側溝
X = −147,210.0　　Y = −16,447.0
同西側溝（HJ486次成果）
X = −147,192.0　　Y = −16,464.08
五条条間北小路北側溝
X = −147,210.45　　Y = −16,455.0
同南側溝
X = −147,217.45　　Y = −16,440.0

出土墨書土器一覧

番号	出土遺構	種類	器種	記載位置	釈文・文字情報	土器の時期	備考	
1	SD104最下層	須恵器	杯Ａ ヵ 皿Ａ	底部外面	□〔血または向ヵ〕	8C ～		
2	同上	須恵器	壺ヵ甕	体部外面	□□〔大一ヵ〕	8C ～		
3	同上	須恵器	杯Ｂ	底部外面	笠□成（人名ヵ）	8C 後半～		
4	同上	土師器	杯ヵ皿	底部外面	□〔内ヵ〕	8C		
5	同上	須恵器	杯Ａ	底部外面	（絵または記号ヵ）	8C ～		
6	同上	須恵器	杯Ａ	口縁～底部	＜内＞西□〔塩ヵ〕□	8C	転用硯	
				内外面	＜外＞筆ならし		内全面墨付着	
7	同上	須恵器	杯Ｂ	底部外面	□〔西ヵ〕	8C 後半～		
8	同上	須恵器	杯Ｂ	底部外面	十または＋（記号）	8C 末～ 9C 初	灯明皿転用	
9	同上	須恵器	杯ヵ皿	底部外面	大福	8C ～		
10	同上	須恵器	杯ヵ皿	底部外面	□（記号ヵ）	8C ～		
11	SD104最下層、SD101下層	須恵器	杯Ｂ	底部外面	甲	8C ～		
12	SD104最下層・第2層	須恵器	杯蓋	頂部外面	□〔大または天ヵ〕一	8C ～		
13	SD104第2層	須恵器	杯ヵ皿	底部外面	□〔竹ヵ〕	8C ～		
14	同上	須恵器	杯Ａ	底部内外面	＜内＞□（筆ならしヵ）	8C ～		
					＜外＞　（絵または記号ヵ）			
15	SD104第3層	須恵器	杯Ａ	底部外面	豆	8C ～		
16	SD104最上層	須恵器	杯Ａ	底部外面	□〔千ヵ〕	9C ～？		
17	SD102最下層	須恵器	杯Ｂ	底部外面	□〔藻ヵ〕□	8C 後半～		
18	SD102最下層・第2層	須恵器	皿Ｃ	底部外面	西□	9C 前半		
19	SD102第2層	土師器	皿Ａ	底部外面	備（異体字）器	9C 前半		
20	同上	須恵器	坏蓋	頂部外面	□〔鮑ヵ〕	8C ～		
21	同上	須恵器	杯Ｂ	底部外面	甲	8C ～		
22	同上	須恵器	杯Ｂ	底部外面	□〔大ヵ〕	8C 末～ 9C 初		
23	同上	須恵器	皿Ｃ	底部外面	供養	8C		
24	同上	須恵器	杯Ａ ヵ 皿Ｃ	底部外面	内	8C 末～		
25	同上	須恵器	杯ヵ皿	底部外面	大	8C ～		
26	SD102第2層・第3層	須恵器	皿Ｃ	底部外面	西丈	9C 初		
27	SD102最上層	須恵器	杯Ｂ	底部外面	豆	8C ～		
28	SD103あふれの埋土	須恵器	椀	底部外面	□〔居ヵ〕	9C		
29	遺物包含層	須恵器	杯Ｂ ヵ 皿Ｂ	底部外面	□〔大ヵ〕一	8C ～		

3．平城京跡（左京四条六坊八坪）・奈良町遺跡の調査　第490次

調査次数	HJ 第490次	調査期間	平成15年４月10日～４月24日
工事内容	個人住宅建設	調査面積	30㎡
届出者名	専念寺　菊池　耕	調査担当者	中島和彦
調査地	奈良市上三条町15番地		



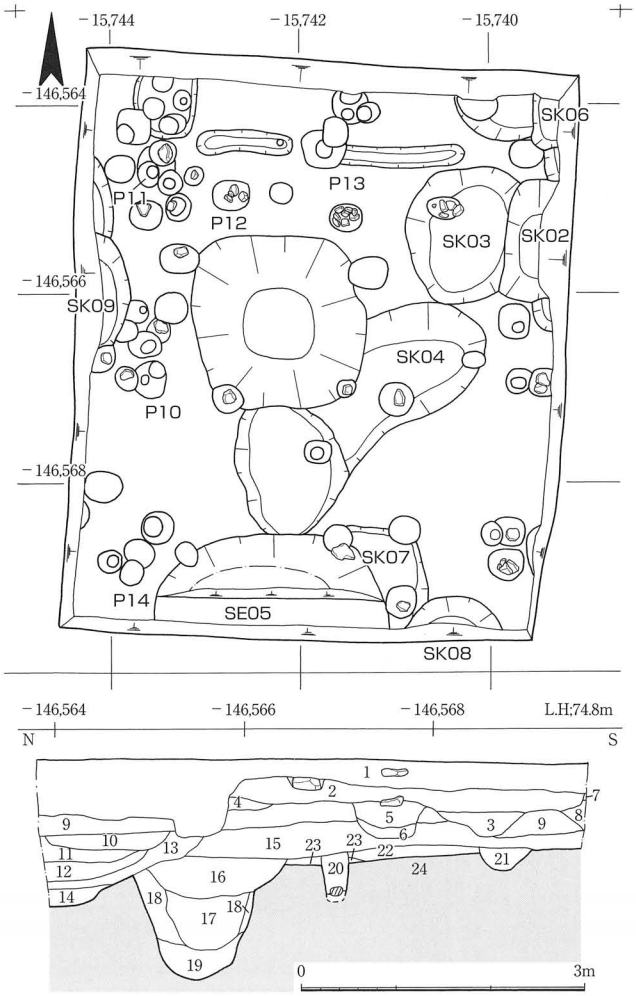
第 490 次調査　発掘区位置図　1/6,000

調査地は平城京左京四条六坊八坪の北辺部にあたり、三条大路の南側に面する。また中世以降は興福寺・東大寺の門前町として発展してきた奈良町遺跡にあたる。調査地の専念寺は、慶長年間の創建で、現在の本堂、方丈、門は元禄以降の造営と伝えられる。境内には、永享２年（1430年）２月26日銘の五輪塔の残欠、永禄４年（1561年）7.4日銘の宝篋印塔残欠と他１基の宝篋印塔残欠がある。

周辺の発掘調査では、古代から中近世の遺構遺物が数多く見つかっている。調査地の東に隣接する調査（市99－１次調査）や、道路をはさんだ北側の浄教寺境内の調査（市 HJ 第269次調査）でも、各時代の遺構遺物が見つかっているが、特に平安時代後半から鎌倉時代にかけての遺構遺物が多いのが特徴である。

専念寺境内は南北に長く、北から庫裡、本堂、墓地と境内が三分され、発掘区は北側の庫裡の部分にあたる。発掘区内の層序は、大きく４層に分かれ、上から近現代の層（１・２）、江戸時代遺物包含層（９）、鎌倉・室町時代遺物包含層（15）、平安時代後半遺物包含層（22・23）で、地表下約1.0m で暗黄褐色土の地山になる。地山面の標高は約73.4m で、遺構検出は地山上面で行った。

検出した遺構には井戸１基、埋甕遺構１基と約60基の土坑と柱穴がある。その内約８割が平安時代後半（11世紀末～12世紀後半）のもので、他に室町～江戸時代の各時期のものが少量ある。以下主なものを記す。



1. 造成土
2. 淡灰褐色土
3. 灰褐色土（鉄滓多く含む）
4. 灰褐色土
5. 茶灰色土
6. 明茶灰色土
7. 灰褐色土
8. 暗灰褐色土
9. 暗茶褐色土（焼土含む）
10. 暗茶褐色土
11. 暗茶褐色土（炭含む）
12. 茶褐色土（礫多く含む）
13. 暗灰色粘質土
14. 灰色粘質土（黄褐色粘土ブロック含む）
15. 淡茶褐色土（土器片多く含む）
16. 明茶褐色土
17. 黒灰色土
18. 灰褐色土
19. 暗灰色粘土
20. 暗黄褐色土（灰褐色土含む）
21. 暗灰褐色土（黄褐色粘土ブロック含む）
22. 茶褐色土
23. 淡茶褐色土
24. 暗黄褐色土

第 490 次調査　遺構平面図・東壁土層図　1/80

平安時代後半の遺構には、SK01～04、SE05等がある。SK01～04はいずれも11世紀後半頃の土坑で、特にSK01からは土器が完形で数多く出土した。SK01は平面方形で、断面形はＵ字形で深さ約1.6m あり、形態から井戸の可能性も考えられるが、湧水はほとんどなかった。土器は上から0.7m までの層内から多く出土した。SE05は12世紀中頃のもので、深さ約1.3m まで掘削したが、底には至らず、井戸枠も確認出来なかった。ここからも

完形の土器が多く出土した。発掘区全域で検出した径約0.3mの小柱穴群もこの時期のものと考えられる。調査面積が小さく建物としてまとめられなかったが、これら小柱穴から鋳造関係の遺物が出土するものがあり注目される。鋳造関係遺物には鋳型（P10出土以下同じ）、とりべ（P11・13・14）、鉄滓・銅滓・鞴羽口他（P12他）がある。奈良町遺跡内において中世以前の鋳造遺物の出土は珍しい。

室町時代の遺構にはSK06～09がある。SK06は14世紀後半頃、SK07・08は16世紀頃の土器が少量出土した。

江戸時代の遺構にはSK15・SX16がある。SK15はSK01上面にある17世紀中頃の土坑、SX16はSE02上面にある18世紀頃の瓦質土器深鉢の埋甕土坑である。いずれも下層の遺構と重複しているため平面図には図示していない。また発掘区北西部には、鉄滓を多く含む土坑が壁面に見られる。

出土遺物には、土器類が遺物整理箱12箱、瓦類が遺物整理箱３箱、金属製品（鉄釘等）銭貨１点（判読不能）、鋳型、とりべ、鉄滓、銅滓、砥石、安山岩剥片、骨、桃種がある。

とくにSK01からの出土土器が多く、遺物整理箱６箱分あり、他に少量の瓦類、不明銅製品１点、鉄滓、桃種１点がある。土器類は破片で1078点出土しており、土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿、須恵器甕、白磁椀がある。土師器皿が約53％、瓦器椀が約37％あり、両者で９割を占める。瓦器椀の見込みの暗文には、放射状、格子状、ジグザグ状、螺旋状のものがあり、ジグザグ状のものが多い。11世紀後半の良好な一括資料である。

P10出土の鋳型片はすべて小片で４点あり、何の鋳型かは不明である。鋳型の１つは一辺約４m、厚さは約2.5mで、平坦な面に蓮華文があり、平たい板状の製品が想定される。この他にも遺物包含層から時期不明の鋳型が１点出土している。これも何の鋳型かは不明だが、径約14mの製品が復元できる。

今回の発掘調査で検出された遺構のうち、そのほとんどが平安時代後半のもので、この時期頃から遺構数・遺物量が増加し出すことがわかる。また、この時期に周辺で鋳造品生産が行われていたことも確認でき、中世の奈良町遺跡の形成を考える上で貴重な資料が得られた。鎌倉・室町時代の遺構は今回の発掘調査区内では少ないが、周辺の発掘調査成果からみて、引き続き人々が居住していたことはうかがえよう。江戸時代には専念寺が創建されると伝えられるが、それを示す資料は得られなかった。

（中島和彦）

第490次調査　発掘区全景（南から）

第490次調査　発掘区全景（北西から）

4．平城京跡（右京七条一坊十四坪）の調査　第491次

調査次数	ＨＪ491次	調査期間	平成15年４月24日～７月９日
工事内容	医院建設	調査面積	1,560㎡
届出者名	医療法人康仁会	調査担当者	武田和哉　池田裕英
調査地	奈良市七条町95－１、100－１・３・７		

第491次調査　発掘区位置図（1/6,000）

調査地は、平城京の条坊復原では右京七条一坊十四坪の西辺中央付近に該当しており、敷地の西辺部には西二坊大路が想定されている。

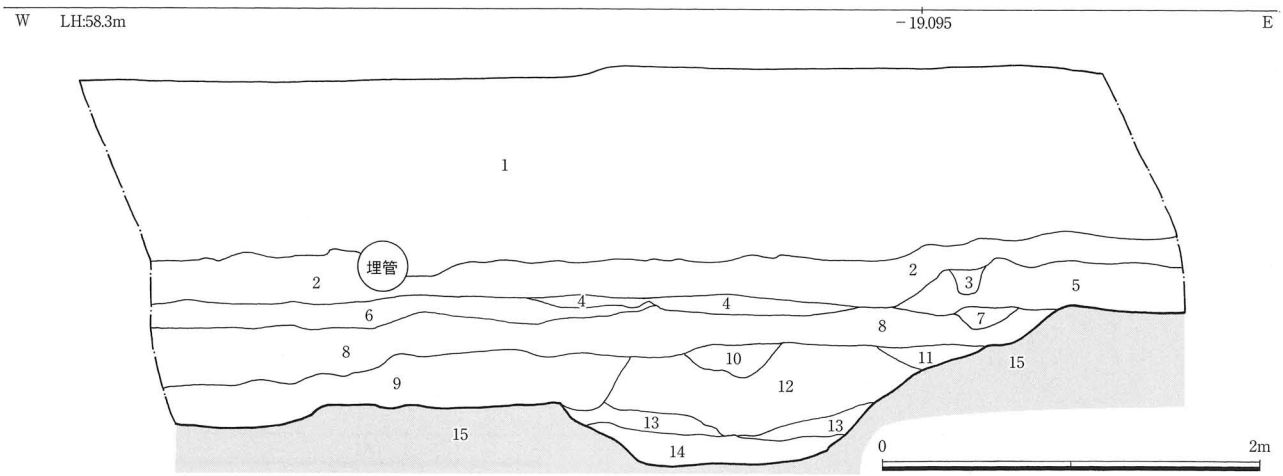
調査地周辺では過去に調査例が５件あり、このうち北隣の調査（市ＨＪ第97次）や北東隣の調査（市ＨＪ第427次）、東隣の調査（県1992年度調査）では、奈良時代の掘立柱建物や井戸、中世の土坑、井戸等が検出されている。

今回の調査では、計画されている建築物により遺構が破壊される部分を中心に、南北２箇所の発掘区を設定した。調査面積は計1560㎡である。

発掘区内の基本層序は、北・南発掘区ともに（西壁・東壁）では、上から順に、造成土（約1.0m）、黒灰色土（＝旧耕作土 0.2～0.3m）、灰茶色砂質土（＝旧床土約 0.1m）と続き、地表面下約1.3m程度で、黄灰色（または青灰色）粘土（砂質土）の地山層に至る。地山上面の標高は、北発掘区北西隅付近では56.7m前後、また南発掘区南東隅付近では、56.7～56.8mであった。

検出した主要な遺構は、奈良時代の掘立柱建物、掘立柱列、条坊側溝、性格不明の遺構、平安時代後半の井戸、平安～鎌倉時代の井戸、室町時代の粘土採掘坑である。

ＳＤ01は、北・南発掘区ともに、西端で検出した。北隣の調査でも検出されており、位置的にみて、西二坊大路の東側溝と考えられる。ただし、南発掘区では後世の遺構や攪乱等により大きく削られ、残存状況はよくない。一方、北発掘区では長さ約８m分を検出した。深さは約0.8mを測る。幅は発掘区内では西肩を検出していないので不明であるが、約4.8m分を確認した。埋土は基本的には３層に分かれているが、局所的に下層の下に更に灰色砂層が堆積していた。この最下層には、奈良時



1：造成土　2：灰黒色土（旧耕作土）3：淡黒灰色土　4：茶灰色砂質土　5：灰褐色砂質土　6：灰茶色砂質土（旧床土）7：暗茶灰色砂質土　8：暗灰褐色土〔ＳＤ01上層埋土〕9：黄橙色粘質土〔ＳＤ01上層埋土〕10：暗灰褐色土〔ＳＤ01上層埋土〕11：茶黄色土＋灰褐色土〔ＳＤ01上層埋土〕12：橙黄色粘質土＋灰褐色粘質土〔ＳＤ01上層埋土〕13：茶橙色粘質土＋灰褐色砂質土〔ＳＤ01中層埋土〕14：暗灰色砂〔ＳＤ01下層埋土〕15：青灰色（黄灰色）粘土〔地山〕

北発掘区西北隅ＳＤ01付近　北壁土層図　1/40

代の遺物が含まれ、中層の埋土には10世紀頃の遺物が、また上層の埋土には11世紀中頃から12世紀中頃にかけての遺物が、それぞれ含まれていた。こうした状況から、ＳＤ01は奈良時代以降、平安時代後半頃までは機能していたことがうかがわれる。なお、ＳＤ01溝心の国土座標値は、X＝－148,430.0　Y＝－19,096.1〔旧座標第Ⅵ系〕。

第491次調査　遺構平面図　1/400

ＳＢ02は、南発掘区の南東隅付近で検出した奈良時代の掘立柱建物である。柱間は、東西２間（約3.6m）、南北１間（約1.8m）分を検出した。建物の北側は後述の室町時代の粘土採掘坑によって削平されている。

ＳＡ03は、南発掘区の南東隅付近で検出した奈良時代の掘立柱列である。柱間は、東西２間（約3.6m）分を検出した。遺構の北側は、室町時代の粘土採掘坑により著しく削平されており、また南側は発掘区外となるために詳細は確認できなかったが、建物となる可能性がある。

ＳＸ04は、北発掘区の北西隅で検出した奈良時代の性格不明の遺構。前述のＳＤ01の東端付近から東へと延びている。長さ約2.3m分を検出。幅は約0.2m、深さは約0.1mで、溝状に掘られた掘形の内部の西寄りの場所に丸瓦が凹面を上にして置かれていた。周囲の遺構の様相からみて、この場所には築地の存在が推測されることから暗渠のような施設ではないかと考えられる。

ＳＥ05は、南発掘区の南西隅付近で検出した井戸。上部は粘土採掘坑により削平を受けていた。検出面からの深さは約1.2mである。内部には曲物の枠材が３段分残存しており、枠の径は約0.3m、残存している高さは約0.6m。枠内からは奈良時代の土師器・須恵器とともに、11世紀後半頃の土師器・黒色土器Ｂ類が出土した。

ＳＥ06は、南発掘区の中央やや南よりで検出した井戸。掘形は、平面ほぼ円形で、径約2.3m、検出面からの深さは約1.8mある。内部には方形の縦板組隅柱横桟留めの木製の枠材が構築されていた。枠の内法の一辺は約0.9m、残存する井戸枠の高さは約1.4mを測る。枠内から奈良時代の土師器・須恵器とともに、11世紀前半頃の土師器・黒色土器Ｂ類が出土した。

ＳＥ07は、北発掘区の中央よりやや南西寄りの場所で検出した井戸である。ＳＥ07の掘形は室町時代の粘土採掘坑によって削平されている部分があり、明確な掘形の規模は不明であるが、径は2.0m程度の平面円形になるとみられ、検出面からの深さは最大約1.3mを測る。内部には方形縦板組隅柱横桟留めの木製の枠材が据えられていたが、土圧で潰されたような状態で検出した。枠の一辺は約0.9m、残存する高さは約1.2mある。枠内の埋土から奈良時代の土師器・須恵器に加えて12世紀中頃の土師器・瓦器が出土した。

ＳＥ08は、北発掘区の中央よりやや南西の場所、ＳＥ07の東側約３m付近で検出した井戸。上部は粘土採掘坑により削平されていた。掘形は平面円形で、残存している掘形の規模は東西約0.5m、南北約0.4m。検出面からの深さは約0.1mしか残っていない。内部には曲物の枠材が１段分あり、枠の直径は約0.4m、残存している高さは約0.1mである。枠内から12世紀後半の瓦器が出土。

ＳＥ09は、北発掘区の中央よりやや南西寄りの場所、ＳＥ08の南南東側約３m付近で検出した井戸である。掘形は平面円形で、径は約0.7m、検出面からの深さは約0.5mである。掘形を縁取るように、瓦や土器が敷き詰められており、その中に径約0.3mの曲物を２段に重ねて置いていた。残存する枠の高さは約0.4mある。上・下の曲物の接合部の外側には瓦片が複数入れられていて、井戸枠の役割を果たしている曲物を支える目的で入れられたものと推定される。小規模ながら、湧水層まで到達していることから井戸の可能性が高い。枠内から12世紀後半～末頃の土師器・瓦器が出土した。

ＳＡ10・11・12は、北発掘区の北西付近で検出した掘立柱列である。いずれも柱穴の掘形は最大でも約0.5m程度の規模に留まり、多くの柱穴の底には河原石を据えている。遺物は少ないが、瓦器が出土している穴がいくつかある。状況からみて12世紀頃の掘立柱列ではないかとみられるが、あるいは他の柱穴が削平されているなどの理由で、本来は建物である可能性もある。

このほか、北発掘区の東端から中央部、西側南半部、また南発掘区の西端と南東隅付近を除く全域で、室町時代の粘土採掘坑を検出した。掘形は、平面不整形で、径２～６m程度のいくつかの単位に分かれるものとみられ、深いものでは約１mにまで達している。埋土からは16世紀前半頃の大和型擂鉢が多く出土した。擂鉢の多くは磨滅した痕跡が無く、またいくつかはほぼ完形で出土していることから、何らかの意図により置かれたものと推測される。採掘の対象は、地山の黄灰色粘土であった模様で、同層の下層にある暗灰色粘土の上面に到達すると概ね掘削を止めている形跡があり、また青灰色砂質土の地山となっている北発掘区の北西部分では採掘をしていないため、それ以前の遺構が残存する結果となっている。南発掘区の南東付近では、黄灰色粘土の地山が堆積しているにも関わらず、粘土採掘をしていない箇所もある。

鎌倉・室町時代の時期における粘土採掘については、農閑期に田畠を借地して実施していたことが古文書などの記載にみえる。南発掘区南東隅付近には畦畔の痕跡があり、その部分から南側は遺構が良好に残存していて、発掘区外南側へと続いていくように見受けられる。本調査地東隣における調査（県1992年度）でも、良好な黄灰色粘土の地山が存在しつつも、粘土採掘が行われておらず、奈良時代の遺構が残存していることが確認されている。こうした様相は、当時の粘土採掘の実態を知る上で貴重な手かがりである。

ＳＸ13は、北発掘区の北西隅、ＳＤ01の東岸のすぐ

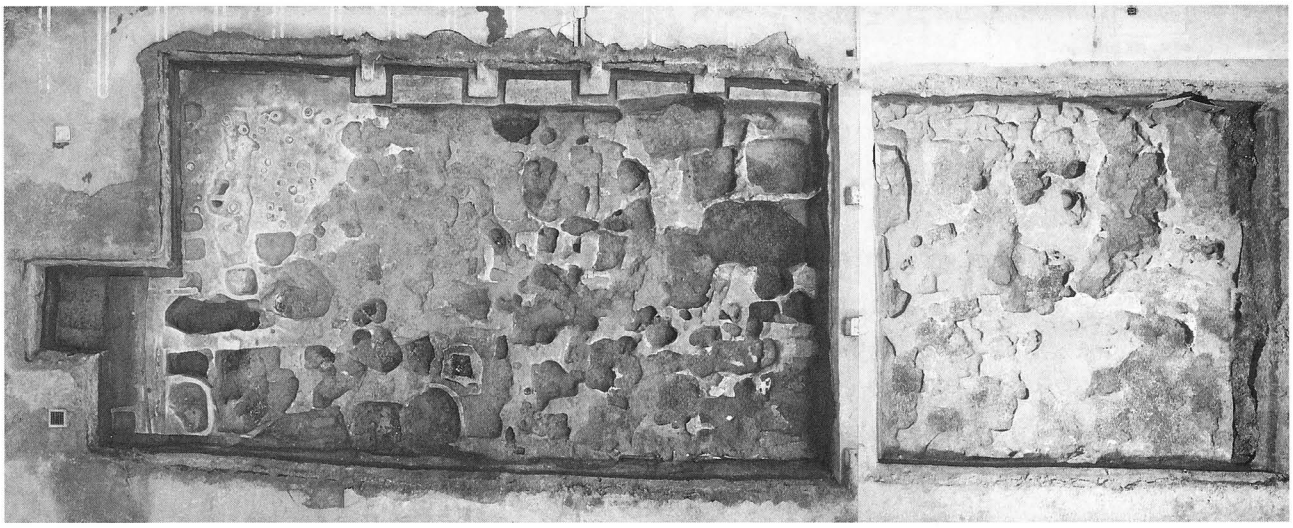
東隣で検出した南北方向の溝状の遺構である。掘形はＳＸ04同様溝状に掘られており、長さ約５ｍ分を確認した。幅は0.2～0.4m、深さは約0.1mであり、掘形内部には丸瓦を伏せて南北方向に置いている。詳細な時期については不明であるが、遺構の重複関係からみて、室町時代の粘土採掘坑より新しいので、少なくとも16世紀前半よりは後の遺構と思われる。

遺物は、整理箱約110箱分が出土した。土器・土製品は、古墳時代の埴輪、奈良・平安時代の須恵器・土師器・黒色土器（Ａ・Ｂ類）・製塩土器・灰釉陶器・緑釉陶器・土馬・竈・墨書土器、鎌倉時代の土師器・瓦器、室町時代の瓦質土器擂鉢、中国産磁器（白磁・青磁）がある。

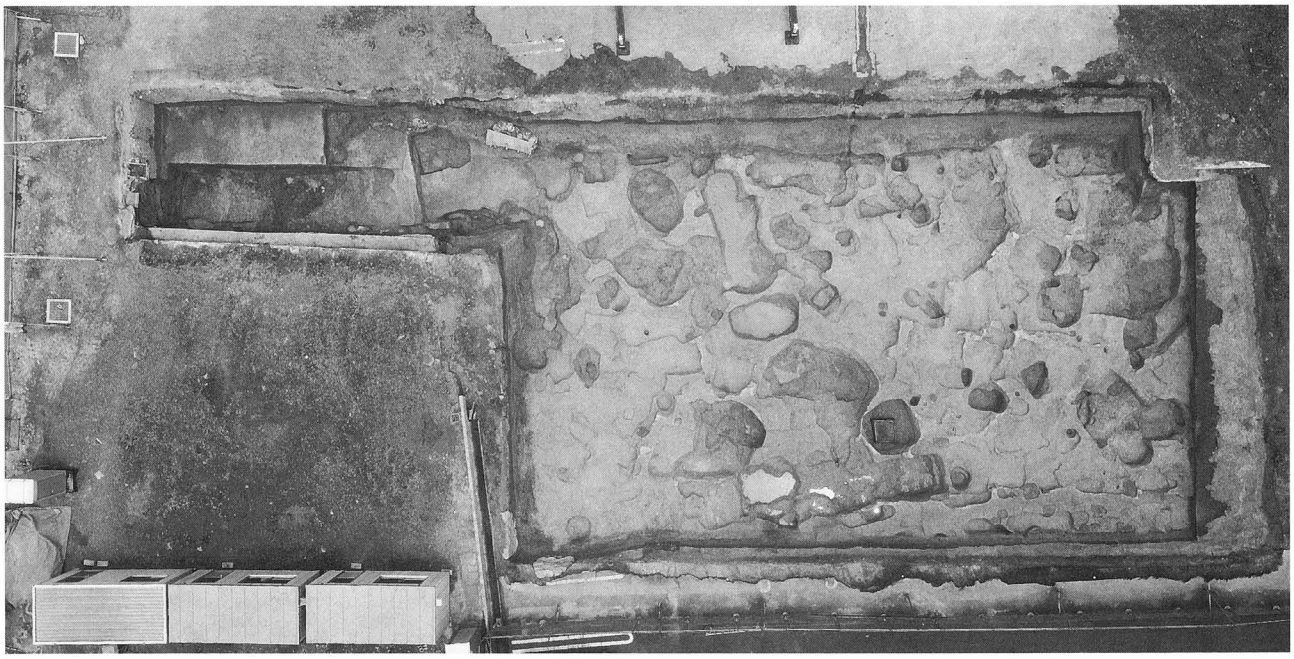
瓦塼類は、奈良・平安時代時代の丸・平瓦、軒丸瓦（6012Ｂ１点・6282Ｇ１点・6316Ｇ１点・6236Ｄ２点・平安時代以降２点）、軒平瓦（6663Ｈ１点、6691Ａ１点、平安時代以降１点）、道具瓦（熨斗）、塼、時期不明の土管がある。

このほかに、曲物、鉄釘、鉄滓、鞴羽口、石製品などが出土した。石製品には、石錘（丸鞆・巡方各１点）および未製品４点がある。調査地の近隣で実施した過去の調査においても、同様に石錘とその未製品が出土していることから、その関連性が注目されよう。

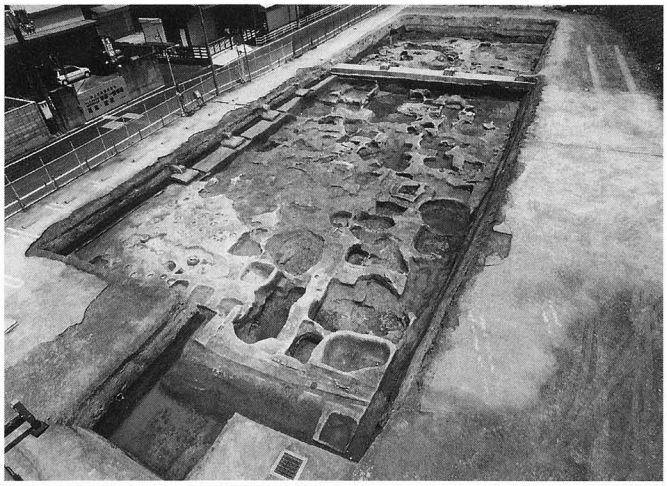
遺構に関しては、室町時代の粘土採掘坑により、それ以前の遺構の多くが削平されていたが、井戸等の深い遺構は残存部分を検出できた。生活に直結した井戸が存在していることやわずかながらも奈良時代の掘立柱列等を確認したことで、調査地が奈良時代より利用されていたことが判る。鎌倉時代の井戸や柱穴も複数確認したこととも併せ、奈良～室町時代にかけての土地利用の実態を知る上で重要な成果である。　（武田和哉・池田裕英）

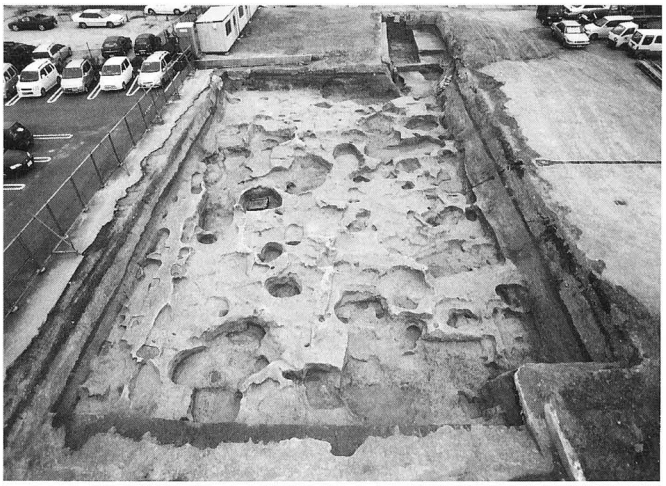


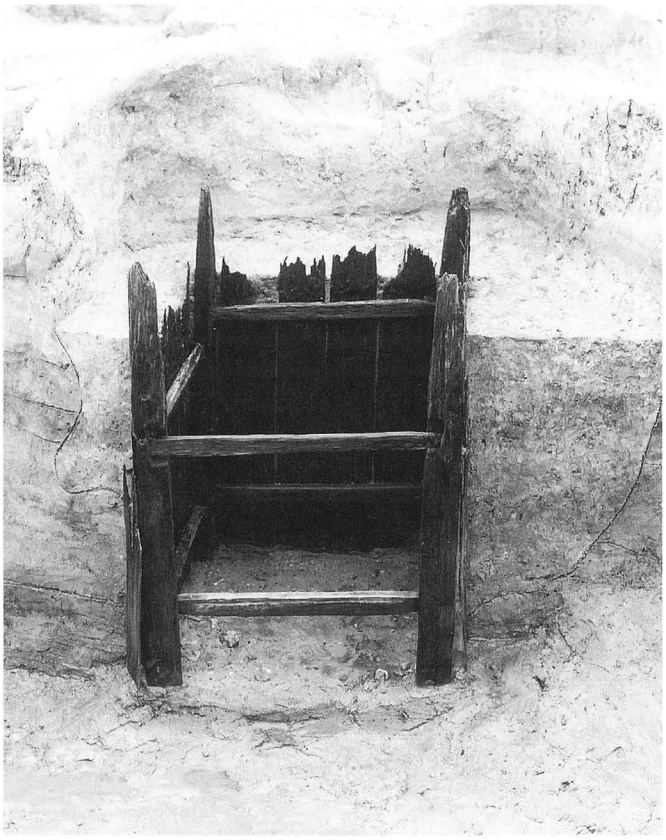
第491次調査　北発掘区全景（垂直写真）



第491次調査　南発掘区全景（垂直写真）







上段左：北発掘区全景（西南西から）

中段左：北発掘区西側・SD01（北から）

下段左：北発掘区全景（東南東から）・薬師寺両塔遠望

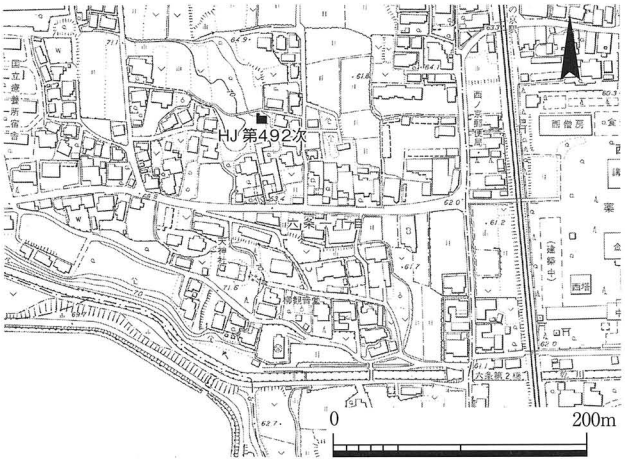
上段右：南発掘区全景（東から）

中段右：南発掘区西側部分（北東から）

下段右：南発掘区井戸 SE06

5．六条野々宮古墳・平城京跡（右京六条三坊六坪）の調査　第492次

調査次数	HJ 第492次	調査期間	平成15年５月6日～５月29日
事業名	個人住宅増築	調査面積	52.5㎡
届出者名	個人	調査担当者	三好美穂
調査地	奈良市六条一丁目497－4番地		



第492次調査　発掘区位置図　1/6,000

Ⅰ．はじめに

届出地は、西ノ京丘陵の東緩斜面途中にある住宅地の一画で、付近一帯は近年宅地化が進み、造成工事等により丘陵本来の地形を留めていない所が随所に見られる。

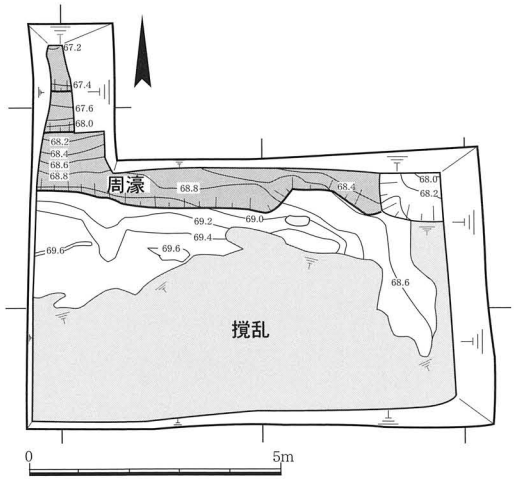
平城京の条坊復原では、右京六条三坊六坪の南東部に相当する。これまでの六坪内の調査は、今回の届出地の西隣で平成14年度（市 HJ 第489次調査）に実施しており、奈良時代の掘立柱列・土坑の他に、円筒埴輪の据付穴、江戸時代の濠等を検出した。奈良時代の遺構の検出は、丘陵上に位置する六坪内の宅地の利用状況を知る貴重な成果となった。

さらに、円筒埴輪の据付穴を検出することができ、５世紀前半頃には古墳が築造されていたことも明らかになっただけでなく、古墳の墳丘自体は、奈良時代以降に壊されたことも判明した。

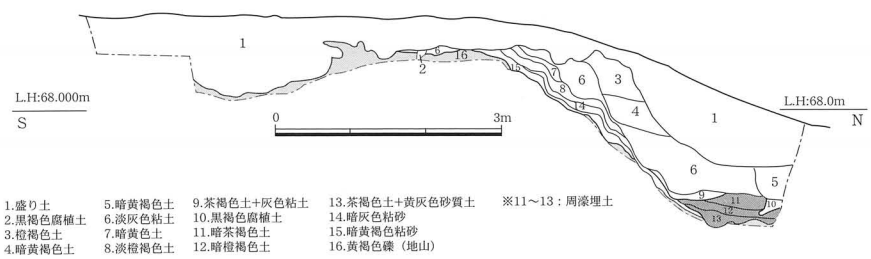
今回の調査は、市第489次調査地のすぐ東隣に位置していることから、奈良時代の遺構の検出及び古墳の形状・規模等古墳の遺存状態を把握することも調査課題に加えて実施した。

Ⅱ．検出遺構

発掘区の大半が現代の攪乱により遺構面が大きく削平されており、発掘区南半分では造成土の下がすぐに黄褐色礫で、遺構は残存していなかった。幸い、発掘区北半分までには攪乱は及んでおらず、古墳の周濠を検出することができた。周濠は、長さ約4.0m 分、幅 0.85m 分を確認した。検出面からの深さは約1.3m ある。市 HJ 第489次調査成果から見て、古墳の北東部を廻る周濠の一部と考えられる。周濠内の底部には、上から順に暗茶褐色土（0.2m）、暗橙褐色土（0.1m）、黄灰色砂質土が混ざった茶褐色土（0.1～0.2m）堆積していた。最下層の茶褐色土には、円筒埴輪の破片と８世紀代の須恵器杯 B、壷胴部片が包含されており、少なくとも北東の周濠は奈良時代には壊されずに存在していたことが窺われる。周濠埋土と造成土との間に堆積している3.6・10の層に

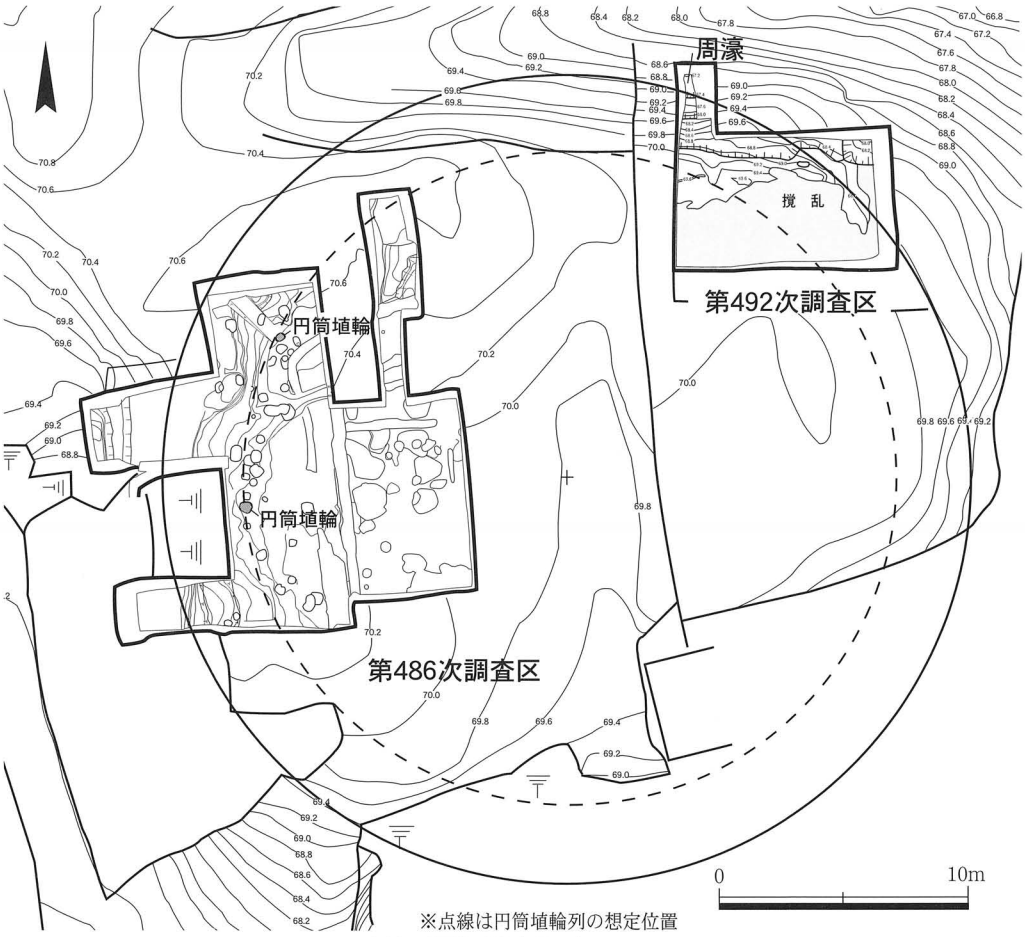


第492次調査　遺構平面図　1/150



第492次調査　発掘区西壁土層図　1/100

発掘区西壁断面（東から）



※点線は円筒埴輪列の想定位置

古墳の規模（推定復元）1/300

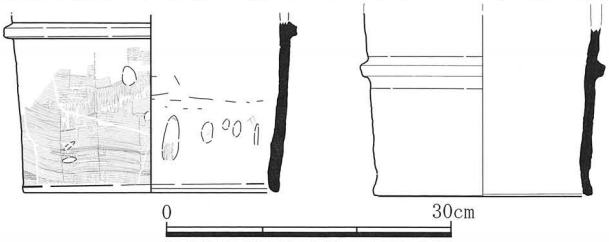
は、14～15世紀の土師器が若干包含されている。堆積状態からみて、14～15世紀頃までは周濠がそのまま溝状に窪んでいたが、室町時代以降になって人為的に一挙に埋め立てられ、平坦になったものと考えられる。

Ⅲ．まとめ

古墳の形態と規模は、埴輪の据付け穴およびや周濠との位置関係から推測すると以下のようになる。

古墳の形態

HJ 第489次調査では、埴輪の据付け穴を２基検出しており、これ以外にも多数の小穴を検出している。小穴からは埴輪は出土しなかったが、一連となって弧を描くような状態で分布していることから、本来は埴輪の据付け穴であったと考えられる。また、据付け穴と周濠との位置関係から古墳の形態を考えると、円墳か前方後円墳になる可能性が高い。古墳の南辺部が壊されているために明確なことは不明だが、仮に円墳とした場合の規模は、径30m 前後の大規模な古墳となろう。　（三好美穂）



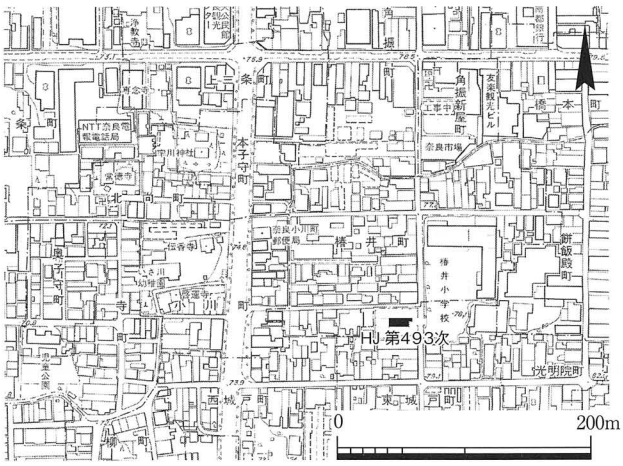
第 489 次調査出土円筒埴輪 1/8

第 492 次調査　発掘区全景（東から）

発掘区北西部（北から）

平城京左京四条六坊十坪・奈良町遺跡の調査　第493次

調査次数	HJ 第493次	調査期間	平成15年5月20日～6月30日
工事内容	共同住宅建設	調査面積	176㎡
届出者名	株式会社ケイ・エム・ケイ	調査担当者	立石堅志、松浦五輪美、原田憲二郎
調査地	奈良市東城戸47、椿井町20		



第493次調査　発掘区位置図　1/6,000

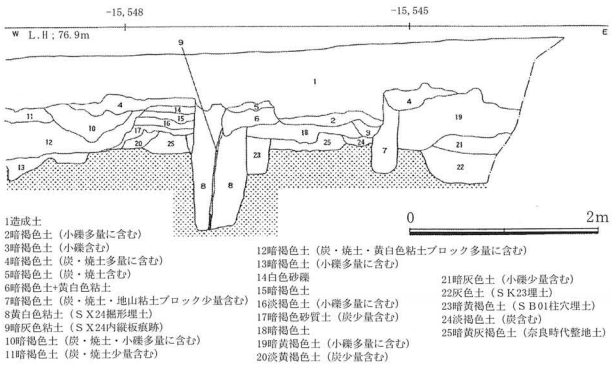
第493次調査　発掘区全景（南から）

Ⅰ．はじめに

当該地は、平城京条坊復原では左京四条六坊十坪の東端ほぼ中央にあたり、調査地の東に坊間東小路が想定される。また、同時に奈良町遺跡の範囲内にあり、近世東城戸町の北端にあたる。

ちょうど北側の路地が東城戸町と椿井町の境界となっており、当該敷地の西側の一部に椿井町の張り出しがある。届出地の現況は、駐車場であるが、駐車場以前は銀行の建物があったことが知られている。この銀行の建設時に幾つかの民家敷地を統合し、ひとつの敷地として造成されたものと思われ、この際に東城戸町椿井町にまたがる形での現在の敷地が形成されたのであろう。

北側の路地は、東から西に向かって低くなっており、当該地の旧地形もこれにあった雛壇状の敷地割りであったことが窺える。



第493次調査　発掘区東端北壁土層図　1/80

発掘区は、敷地の北東部分に東西20m、南北10mで設定したが、最終的に進入路にかかる東南の24㎡を除外する形で調査を実施した。

Ⅱ．検出遺構

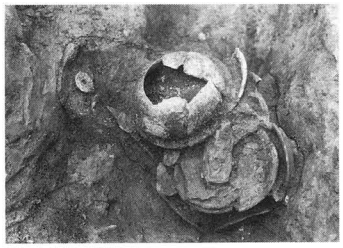
発掘区内では、造成土の下に厚さ0.6mの炭、焼土を含む暗褐色土を主とする幾層もの堆積があり、その間に何時期かの遺構面があることが窺えた。一部に焼土の堆積層も認められる。地山は基本的に黄褐色粘土であり、その標高は、発掘区東端で76.4～76.5m、発掘区西端で76.3mである。

発掘区東側の一部には奈良時代の整地土があることを確認した。遺構は、基本的に地山面直上で検出した。

検出した遺構には、掘立柱建物、土器埋納坑、井戸、埋甕遺構、方形石組遺構、土坑、柱穴がある。以下に、遺構の概要を述べる。

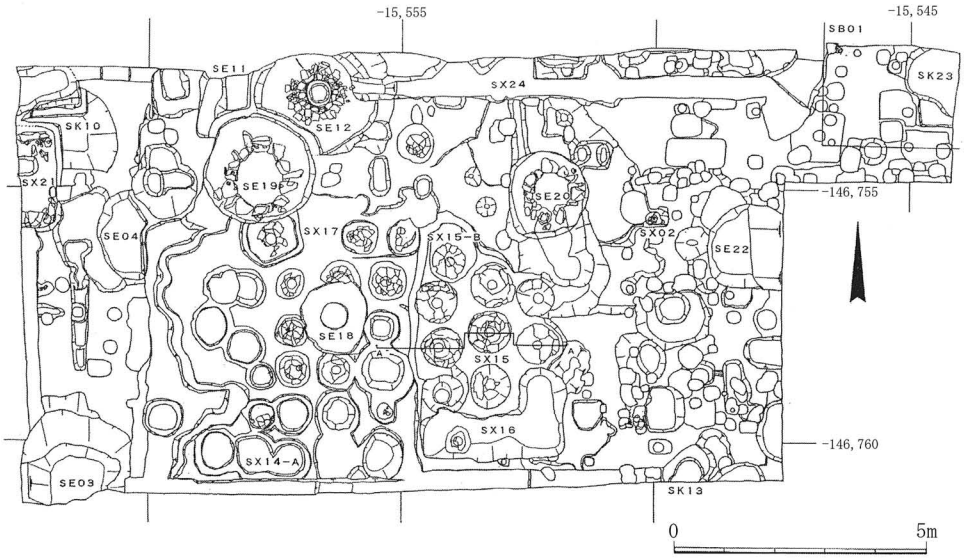
遺構は大きく奈良時代、鎌倉時代から室町時代、江戸時代から近代のⅢ期に分けることができる。

奈良時代　掘立柱建物（ＳＢ01）１棟、土器埋納坑（ＳＸ02）１基がある。



SX02・土師器壷出土状態（東から）

ＳＢ01は、東西１間以上、南北１間以上の掘立柱建物であり、発掘区外へのびる。柱間は検出した東西の柱間で3.6m（12尺）と広く、柱穴も一辺



第493次調査　上層遺構平面図　1/150

2.0mと非常に大きい。

ＳＸ02は、ＳＢ01の南西で検出した土器埋納遺構である。径0.4m、検出面からの深さ0.23mの小坑に土師器皿８点と壷２点、銅銭12点を埋納していた。坑内の底部に須恵器と土師器の破片を敷き、その上に銭貨を置いて、さらにこれらの上に土師器壺を下向き置く。次に壷の上に５点の土師器皿を重ねて載せ、最上位の皿に銭貨を置く。これに裏返した土師器皿で蓋をし、この上にも銭貨を置いている。更にもう１点皿を裏返して重ね、最後に下向きにした土師器壷で蓋をする。

また、土坑の壁際からも銭貨が重なった状態で出土している。納められた銭貨は１点は和同開珎であるが、他は錆化のため判読することが出来ない。地鎮遺構の可能性がある。

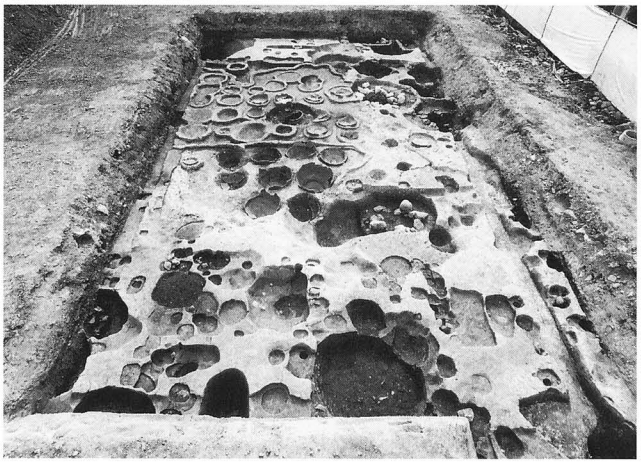
鎌倉時代～室町時代　井戸（ＳＥ03～06・11）５基、埋甕遺構（ＳＸ14～17）４基、土坑（ＳＫ07～10・13）５基がある。

井戸　ＳＥ03は発掘区南西端で検出した一辺2.2mの平面方形井戸である。枠はない。南北1.8mまで確認したが、発掘区外南に続くため南北方向の規模は不明である。検出面からの深さは約1mである。井戸底の標高は75.3m。12世紀代の土師器片と瓦器片が少量出土した。

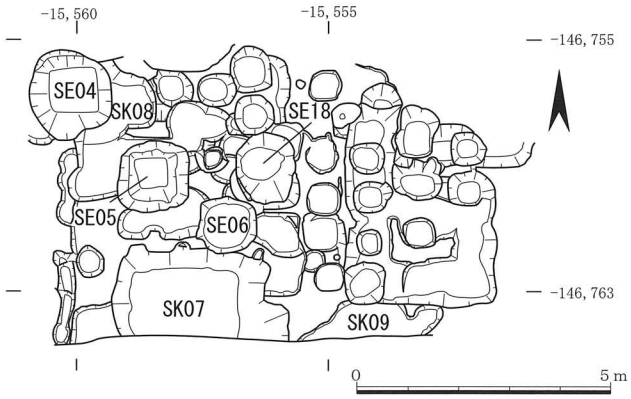
ＳＥ04は発掘区西端で検出した一辺1.6mの平面隅丸方形の井戸である。枠はない。検出面からの深さは約1.9mである。井戸底の標高は74.3m。埋土から12世紀代の土師器皿・羽釜片が少量出土した。

ＳＥ05はＳＥ04の南東で検出した一辺1.4mの方形井戸である。枠はない。検出面からの深さは約1.0m。底部は平らで、標高は75.05m。埋土から12世紀代の土師器皿・羽釜片が少量出土した。

ＳＥ06はＳＥ05の南東で検出した一辺1.1mの平面隅丸方形の井戸である。枠はない。検出面からの深さは約1.0m。底部は平らで、標高は75.2m。埋土から土器類など多くの遺物が出土した。

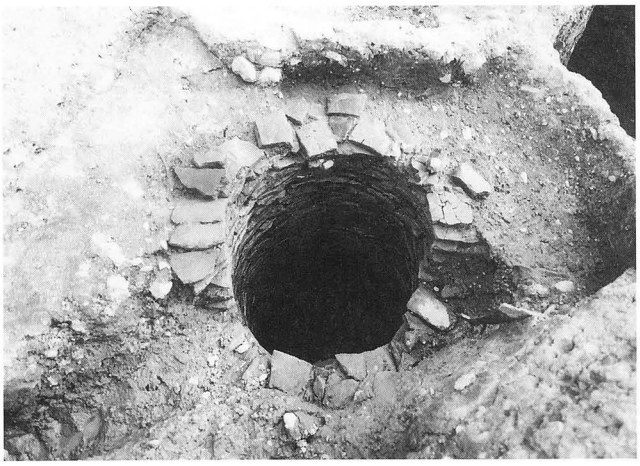


第493次調査　発掘区全景（東から）



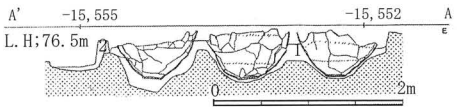
第493次 下層遺構平面図　1/150

ＳＥ11は発掘区北、ＳＥ12・ＳＥ19と重複する位置で検出した井戸である。東西1.0m、南北1.6mを確認した。他の井戸との重複により遺構の平面形は確認できなかった。検出面からの深さ約1.0mまで掘削したが、湧水があ



井戸 SE12（北から）

埋甕遺構 SX14～17（南から）



1黄褐色砂礫土（地山粘土ブロック含む、ＳＸ15掘形埋土）
2暗灰色土（地山粘土ブロック含む、ＳＸ14-Ａ掘形埋土）

SX14・15 立面図　1/80

り、それ以上の掘り下げは隣接井戸の崩壊の危険があったので断念した。井戸枠は既に抜き取られており、地山の黄褐色粘土と砂礫によって埋められていた。埋土から12世紀代の土師器皿・羽釜片、瓦器片が少量出土。

土坑　ＳＫ07は発掘区南端で検出した東西3.0m、南北1.7m以上の平面長方形の土坑で、東側の一部が東へ0.5m広がる。掘形は発掘区外南へ続く。検出面からの深さは0.5mである。

ＳＫ08はＳＥ04の東側で検出した東西1.5m、南北1.5m、検出面からの深さが0.3mの平面不整形の土坑である。重複関係からみて、ＳＥ04よりも古い。

ＳＫ09はＳＫ07の東側で検出した東西2.5m、南北0.7mの平面不整形の土坑である。検出面からの深さ0.2mと浅い。重複関係からＳＸ15・16よりも古い。

ＳＫ10は発掘区北西隅で検出した東西2.0m、南北1.6mの平面楕円形の土坑。検出面からの深さ約0.6m。11世紀後半の土師器皿、12世紀初頭の瓦器椀が少量出土。

ＳＫ13は発掘区南東で検出した長辺1.0m、短辺0.6mの平面隅丸方形の土坑である。一部発掘区外へ延びる。検出面からの深さは約0.6m。11世紀末から12世紀初頭の土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿等が少量出土した。

埋甕遺構　発掘区中央で大甕を据付けた土坑を検出した。何回かの造り替え、重複がみられ、比較的長期間にわたって遺構が存続していたことが窺えた。

ただし、甕が残るものも、体部上半は全て甕内に落ち込んだりして欠損しており、また抜き取られて据付け痕跡を留めるだけのものも多い。甕内や抜き取り痕に焼土が堆積しているものもある。

ＳＸ14は、発掘区中央西よりで検出した埋甕遺構である。大きく３時期の造り替えがある。古い順にＣ－Ｂ－Ａ期とした。

Ｃ期・Ｂ期では、甕はいずれも抜き取られ、据付けの痕跡を留めるのみである。Ｃ期は東西４列、南北４列、Ｂ期は東西３列、南北４列で甕を据える。

また、最終のＡ期では東西４列、南北５列以上の据付け痕跡が認められ、大甕の底部が残存しているものが８個あった。うち、常滑窯産大甕が６個、備前窯産大甕が２個である。

さらにＡ期では西側に甕が追加して据えられたようで、北側に２個、南に１個の列からずれた据付け痕跡がある。３時期ともに甕を据える範囲に大きな掘形を設け、これに甕を並べ、据え置くものである。

ＳＸ15は、ＳＸ14の東側で検出した埋甕遺構である。東西約3.0m、南北約4.0mの掘形に、東西３列、南北４列で甕を据える。後に、北側に新たに１個の甕を追加している(15－Ｂ)。甕は体部下半まで残るものが８個あり、いずれも常滑窯の製品である。14世紀後半から15世紀前半にかけてのものがある。甕内には焼土が堆積しており、体部上半が落ち込んでいるものもみられた。重複関係から判断して、ＳＸ14より古い時期に造られている。

ＳＸ16は、ＳＸ15の南１列と東側列の南２個については造り替えられており、掘形を掘りなおしたうえで、高を変え、新たに甕を据え直した痕跡である。このため掘形の埋土がこの部分だけ異なり、精良な黄白色粘土で埋められている。この黄白色粘土からは遺物はほとんど出土していない。

ＳＸ17は、ＳＸ14の北側で検出した埋甕遺構である。他の２つの埋甕遺構より設置面が高く、削平のため甕を設置する際の掘形の痕跡がほとんど残っていない。南１列と、東１列で計４個の甕を確認した。かろうじて甕の底部が残っており、南側の３個が常滑窯産、北側の１個

が備前窯産である。ＳＸ14・15よりも新しい時期の遺構である。

近世から近代　井戸５基（ＳＥ12・18～20・22）、方形石組遺構（ＳＸ21）１基、土坑（ＳＫ23）１基、溝状遺構（ＳＸ24）１条がある。

井戸　ＳＥ12はＳＥ11と重複する井戸である。径2.4ｍの掘形中央に内法0.6ｍの瓦積みの井戸枠を造る。検出面からの深さは3.4ｍに及ぶ。井戸底の標高は73.0ｍである。井戸最下部には瓦質土器甕の底部を打ち欠いたものを水溜として据えている。この甕の上部に10～15㎝程の平らな川原石を敷き、基礎とした上に瓦を積み上げていく。平瓦が主体であり、これに丸瓦、軒平瓦等を併せて用い、隙間を河原石で詰めている。これらの瓦には、「興福寺」銘がある軒平瓦等14世紀中頃の特徴をもつものがある。また、中には14世紀後半代の常滑窯で生産された大甕の口縁部があったが、埋甕遺構に用いられていたものを転用したものであろうか。埋土中からは14世紀後半代の土師器皿・羽釜、18世紀以降の土師器皿片、刷毛などの木製品が出土した。

ＳＥ18は発掘区中央で検出した長辺1.5ｍ、短辺1.4ｍの平面長方形の井戸。中央に径55㎝、高さ45㎝の瓦製井筒を３段重ねて据える。さらに、１段分の破片が井筒内に落ち込んでいたことから、当初は４段以上重ねられていたことがかわる。検出面からの深さは1.5ｍであり、井戸底の標高は75.0ｍである。このような瓦製の井筒は、18世紀以降に都市遺跡を中心に多く見られる。

ＳＥ19は、ＳＥ11・12、ＳＸ17に重複する位置で検出した石組み井戸である。径2.1ｍの平面円形掘形のやや南側に、内法東西0.9ｍ、南北1.0ｍの石積みの井戸枠を組む。検出面から0.7ｍまで掘り下げたが、石組みが崩壊するおそれがあったため、それ以上の掘り下げは断念。

埋土から土師器皿・羽釜片、瓦質土器鉢・羽釜、信楽窯産擂鉢片が少量出土したが詳細な時期は不明である。

ＳＥ20は、発掘区中央東よりで検出した石組み井戸である。径1.6ｍ、の円形掘形の中央に内法0.6ｍの石積み井戸枠を組む。石組みの南側上部は南側の土坑の掘削により壊されていた。検出面からの深さは1.67ｍあり、井戸底の標高は74.7ｍである。埋土から17世紀前半の土師器皿片、常滑窯産甕片、陶器片、白磁皿片が出土した。

ＳＥ22は、発掘区東端で検出した南北1.7ｍ、東西1.5ｍ以上の平面方形の井戸である。井戸枠は抜き取られたようで、地山の黄褐色粘土ブロックを多く含んだ土で埋められている。検出面から2.2ｍまで掘り下げたが、井戸底には至らず、崩壊の危険があったため掘り下げは断念した。埋土からは、17世紀代の土師器皿片、瓦質土器鉢片が少量出土した。

土坑　ＳＸ21は発掘区西端で検出した東西0.9ｍ以上、南北2.1ｍで発掘区西へ延びる方形石組遺構である。方形の掘形に沿って方形の石積み枠が組まれる。石は裏込めの土で固められており、水溜めなどに利用されたものであろうか。検出面からの深さ0.3ｍ程である。枠内埋土から土師器皿片、瓦質土器片、国産陶磁器片が少量出土。

ＳＫ23は、発掘区北東隅で検出した東西1.0ｍ、南北1.2ｍの平面不整形の土坑。検出面からの深さは0.4ｍ。17世紀代の土師器小片が少量出土した。

ＳＸ24は発掘区北で検出した幅0.6ｍの溝状遺構である。東西約10ｍ分を検出した。東西両端で発掘区外北へ曲がる。検出面からの深さは約1.0ｍであるが、発掘区壁面での土層観察によると、より上層から構築されていることが窺え、確認できた深さは約1.4ｍにも及ぶ。ほぼ垂直に掘り込まれ、断面は箱状となる。中心には厚さ２㎝程度の板を立てる。この縦板は底から上面にまで至っており、また、全長に渡り立てられている。坑内は非常に精良な黄白色粘土により埋められており、17世紀代の輸入白磁片が１点出土。何らかの施設の周りを囲うような性格のものであろうか。

Ⅲ．まとめ

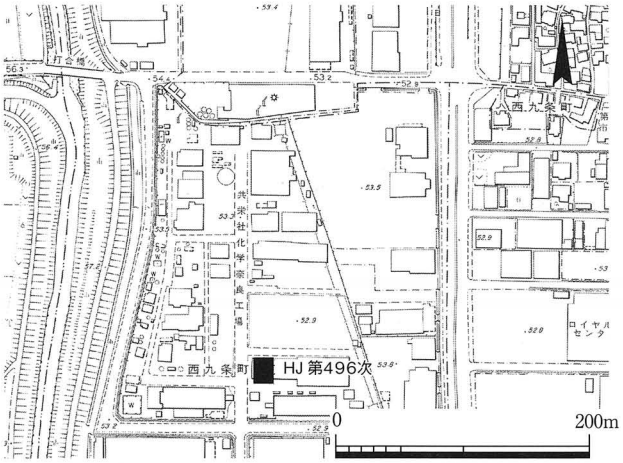
今回の調査では、古代から近代までの各時期の遺構を検出することができた。非常に多くの遺構が、重複しつつ残っており、当該地の遺跡の変遷を追うことのできる良好な資料を得ることができた。

奈良時代の遺構としては、大規模な建物の一部を検出したが、当該地周辺でこのような規模の建物が残存し、またそれを検出したのは稀有な事例である。併せて地鎮遺構も確認することができた。おそらくはこの建物に関係すると考えているが、非常に興味深い発見である。

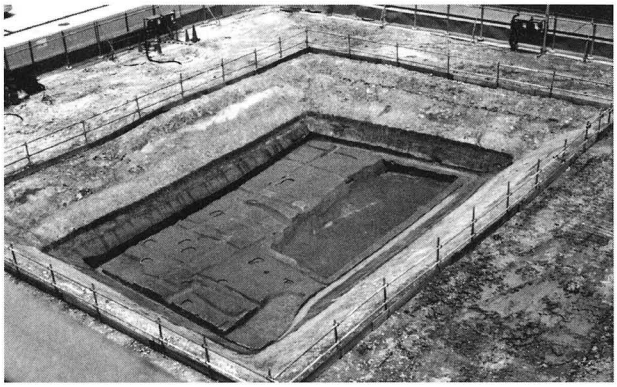
また、室町時代に埋甕遺構が集中して構築されている状況を明らかにすることができた。今回の調査でも、これらの甕が何に用いられたのかを示す資料は得ることはできなかったが、比較的長期に渡り同一地で繰り返し構築された例はこれまでに確認されていない。さらに、瓦積み井戸に転用されている瓦に、瓦当面に「興福寺」銘を持つ軒平瓦があった。これは同笵品が興福寺旧境内で出土しており、14世紀中頃に比定されているものである。同時に刻印を押印された平瓦・丸瓦類、鳥衾瓦等も分割して転用されているが、おそらくは同じ場所で用いられていた瓦類であろうと想像できる。これら大量の瓦類の利用に際して、建物解体後転用のために備蓄しておくということがあったのであろうか。今後の類例の蓄積を待ち、分析していきたい。　（立石堅志）

7．平城京跡（左京九条一坊七坪）の調査　第496次

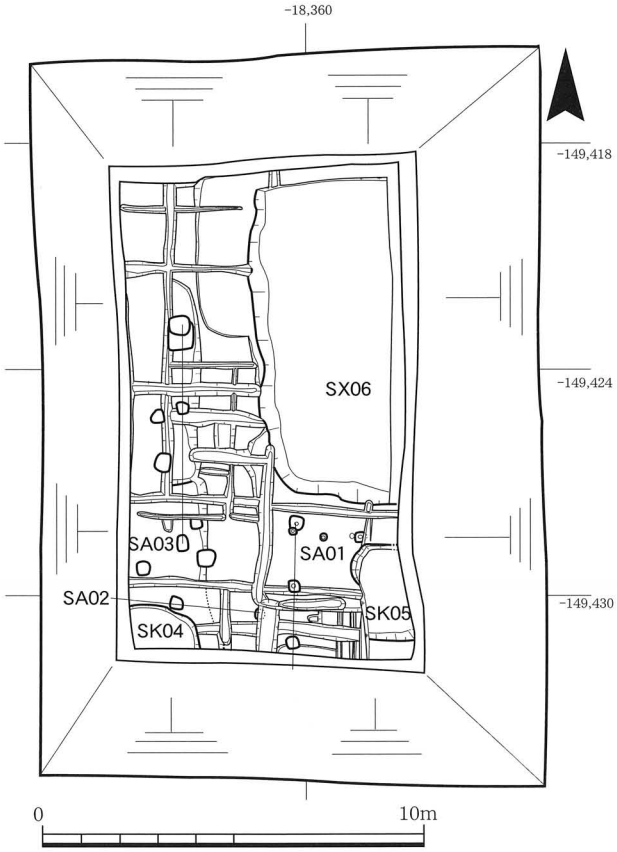
調査次数	HJ 第496次	調査期間	平成15年６月２日～６月23日
工事内容	研究所新築	調査面積	263㎡
届出者名	共栄社化学工業株式会社	調査担当者	三好美穂
調査地	奈良市西九条町五丁目２番地		



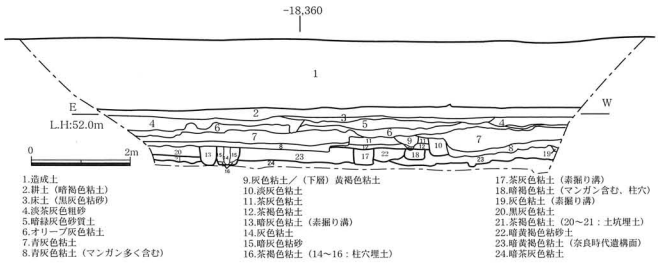
第 496 次調査　発掘区位置図　1/6,000



第 496 次調査　発掘区全景（南東から）



第 496 次調査　遺構平面図　1/200

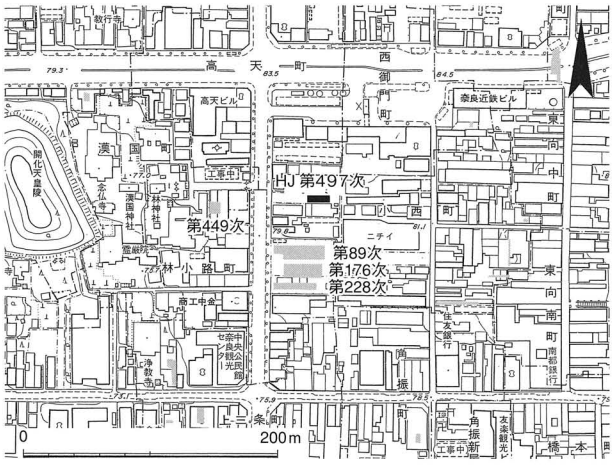


第 496 次調査　発掘区南壁土層図　1/150

届出地内は、これまでに２回の発掘調査を実施している。昭和 63 年度の市 HJ 第 167 次調査では、二・七坪の坪境小路と両側溝、雨落溝２条、井戸１基を検出した。井戸内からは銅製の分銅（平成６年度に奈良市指定文化財に認定）が出土。平成 11 年度の調査では、奈良時代の掘立柱塀、土坑を検出している。今回の調査は、七坪内の宅地の利用状況を知ることを目的として実施した。発掘区内の基本層序は、造成土（約 1.4m）の下に、耕土・床土、淡茶灰色粗砂、暗緑灰色砂質土、オリーブ灰色粘土、青灰色粘土が堆積し、地表下約 2.1m で奈良時代の遺構面である暗黄褐色粘土の地山に至る。耕土・床土の下から地山までの間に堆積している土層は、周辺の調査成果から旧佐保川が氾濫した時の堆積であることがわかる。検出した遺構には、掘立柱列３条 (SA01 ～ 03)、土坑２基（SK04・05)、性格不明の遺構１（SX06)、中世素掘り溝がある。遺物は、８世紀代の土師器・須恵器、瓦、13 世紀の瓦器、青磁、白磁、15 世紀の瓦質土器等の破片が遺物整理箱で１箱分が出土。素掘り溝以外の遺構から出土したものはなく、大半が旧佐保川の氾濫層からのものである。今回の調査地は、遺構密度は少なかったが、奈良時代には宅地として利用されていたことが判明。素掘り溝を検出したことにより、鎌倉時代頃には田畠として利用されたことが判る。それ以降は、旧佐保川が何度も氾濫し、宅地はもとより田畠としても暫くの間は利用できなかったことが窺える。（三好美穂）

8．平城京跡（左京三条六坊十一坪）・奈良町遺跡の調査　第497次

調査次数	HJ 第497次	調査期間	平成15年６月３日～６月19日
工事内容	共同住宅建設	調査面積	85㎡
届出者名	株式会社ビルド	調査担当者	中島和彦
調査地	奈良市林小路町1－1、1－10番地		



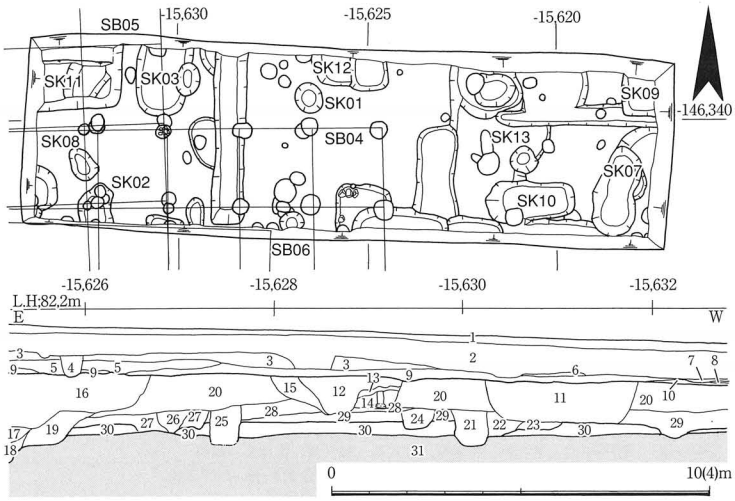
第 497 次調査　発掘区位置図　1/6,000

調査地は、平城京左京三条六坊十一坪の南西部にあたり、また中世以降は興福寺・東大寺の門前町として発展してきた奈良町遺跡の中心部にあたる。林小路の名は鎌倉時代には文献に現れており、調査地の南約40m の所には、筒井順慶の父筒井順昭の菩提所の円証寺があった。同寺は1984年に生駒市に移転し、その跡地には商業ビルが建ち景観は大きく変化している。

林小路町内では過去４回の発掘調査（市 HJ 第89・176・228・449次調査）があり、いずれの調査でも奈良～江戸時代の各時代の遺構・遺物を検出しており、遺構密度の高い地域である。特に調査地南の円証寺周辺の調査（市 HJ 第89・176・228次調査）では平安時代後半から鎌倉時代の土器が大量に出土しており注目される。

調査地は東西に細長く、東から西へ向かい緩やかに傾斜している。発掘区は調査地の東半部に設定した。発掘区内の層序は、大きく５層に分かれ、上から近現代の造成土・表土層（１・２）、江戸時代の土間等の整地土層（３～11）、江戸時代の遺物包含層（21）、鎌倉・室町時代の遺物包含層（30・31）、奈良時代以前の遺物包含層（32）と続き、明黄橙色砂礫（33）の地山になる。発掘区内の地山面はほぼ平坦で、標高は約80. 9ｍある。発掘区東側に行くに従い堆積土は厚くなり、発掘区西端では地表下約1.0m で、東端では約1.3m で地山に到る。

検出した遺構には掘立柱建物３棟の他約60基の土坑と柱穴がある。これらは平安時代後半～江戸時代の各時期のものであるが、鎌倉時代のものは見つかっていない。



1 アスファルト
2 造成土
3 暗褐色粘土
4 暗茶褐色土
5 黒褐色土（漆喰含む）
6 暗灰褐色土
7 明灰色砂質土（漆喰層?）
8 黒灰色土
9 灰褐色土
10 明黄褐色砂質土（漆喰層?）
11 暗灰褐色土（瓦礫多く含む）
12 暗灰褐色土
13 暗茶褐色土
14 灰褐色土
15 茶褐色砂礫
16 暗灰褐色土（煉瓦、コークス含む）
17 暗灰色砂質土
18 明茶灰色土
19 灰褐色土
20 淡灰褐色土
21 茶褐色土
22 灰褐色土
23 淡灰褐色土
24 茶褐色土
25 茶褐色土（地山ブロック含む）
26 灰褐色土
27 暗灰褐色土
28 暗茶灰褐色土
29 暗茶褐色土
30 暗黄褐色粘質土
31 明黄橙色砂礫

第 497 次調査　遺構平面図　1/200　及び　発掘区南壁土層図　1/80

第 497 次調査　発掘区全景（北西から）

また奈良時代以前の遺物包含層を確認したが、同時期の遺構はなかった。以下主要なものを記す。

平安時代の遺構にはSK01・02があり、いずれも11世紀末頃のものである。なお、後世の遺構からもこの時期の遺物は多く出土している。

室町時代の遺構にはSB04～06、SK07・08がある。SB04は、東西２間（2.1m）以上、南北２間（4.2m）以上の総柱建物と考えられる。柱間はすべて2.1m等間である。柱穴の１つから15世紀後半以降の土器が出土した。SB05は桁行５間（9.5m）以上、梁間２間（2.1m）以上の総柱建物と考えられる。柱間は桁行が1.9m等間、梁間は2.1m。重複関係からSB04より新しい。柱穴から安山岩製の石鋳の未製品が出土した。SB06は東西２間（5.4m）以上の建物または塀と考えられ、大半は発掘区外にあり詳細は不明である。柱間は2.7m等間である。掘り込まれる層位から室町時代のものと考えられる。SK08からは15世紀前半の土器と供に五輪塔の台座が出土しているが、形態的特徴からみて時期が下る可能性がある。

江戸時代の遺構にはSK09～15があり、17世紀代のもの（SK09・10）と、19世紀代のもの（SK11～13）とがある。SK15は北辺に沿い人頭大の石を３つ列べており、石組土坑の石を抜き取った跡とも考えられる。出土遺物が少なく明確な時期は不明。SK12・13は、地山上面では２つの土坑であるが、断面観察から両者は同一の土坑であることがわかる。土坑内からは瓦が大量に出土した。

出土遺物には、遺物整理箱５箱分の土器類と７箱分の瓦類、石製品（砥石、硯、石臼、石鋳の未製品）、石造物（五輪塔台座）、金属製品（鉄釘、銅鋲他）、鉄滓、獣骨などがある。多くは江戸時代以降のもので、特にSK12・13から出土のものが多い。

第497次調査　発掘区全景（東から）

今回の発掘調査では、11世紀末頃から遺構・遺物量が増加することや、遺構は検出できなかったが、奈良時代以前の遺物包含層が確認できるなど、従来の林小路町内の調査成果と同様な傾向がうかがえよう。一方、従来の発掘調査と比べると、遺構密度・遺物量ともに少なめである。発掘区が敷地の奥側であることが、１つの要因と考えられるが、明確な理由は不明である。（中島和彦）

遺構一覧表

遺構番号	平面形	平面規模（m）	深さ（m）	年代	主要出土遺物	備考
SK01	円形	径0.7	0.3	11世紀末	土師器皿・羽釜、瓦器椀、鉄滓	
SK02	不整楕円形	東西0.9×南北2.0以上	0.05	11世紀末	土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿	
SK03	楕円形	東西1.4×南北2.0以上	0.2	14世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器鉢、ミニチュア羽釜、須恵器鉢、常滑窯甕、瀬戸美濃窯椀？	
SK07	不整楕円形	東西1.5以上×南北3.0以上	0.3	15世紀後半	土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・深鉢、常滑窯甕、白磁皿、青磁椀、銭貨（洪武通寶）	
SK08	不整楕円形	東西0.9×南北2.0以上	0.4	15世紀前半以降？	土師器皿・羽釜、瓦質土器深鉢、五輪塔台座部	
SK09	方形？	東西0.9以上×南北1.1以上	0.6	17世紀中頃	土師器皿、瓦質土器深鉢、国産陶器（肥前窯椀・皿、信楽窯擂鉢、瀬戸美濃窯椀）、国産磁器（肥前窯皿）、青花椀、白磁椀、軒丸瓦、軒平瓦、熨斗瓦、砥石	
SK10	長方形	東西2.4×南北1.0	0.3	17世紀後半	土師器皿、瓦質土器深鉢、国産陶器（肥前窯椀・壺、信楽窯擂鉢・甕、常滑窯甕、軟質施釉陶器鉢）、国産磁器（肥前窯椀・皿）、青磁椀、白磁椀	
SK11	方形？	東西2.3以上×南北1.7以上	0.8	19世紀前半	土師器皿・炮烙、瓦質土器浅鉢・深鉢・蓋、国産陶器（信楽窯擂鉢・甕、京信楽系窯椀・鉢・鍋・蓋、堺窯擂鉢）、国産磁器（肥前窯椀・皿）、軒丸瓦、軒平瓦、土管、砥石、鉄滓	
SK12・13	不整形	東西8.0以上×南北5.0以上	0.9	19世紀中頃	土師器皿・炮烙・ミニチュア羽釜・焼塩壺、瓦質土器深鉢、国産陶器（肥前窯椀・盤、信楽窯擂鉢・甕、京信楽系窯椀・皿・鍋・壺、堺窯擂鉢、丹波窯擂鉢、軟質施釉陶器皿）、国産磁器（肥前窯椀・皿・壺、瀬戸美濃窯椀・皿）、伏見人形、軒丸瓦、軒平瓦、鳥含瓦、鬼瓦、熨斗瓦、井戸枠瓦、磚、土管、硯、鉄釘	大量の瓦を廃棄する
SK14	長方形	東西0.8×南北4.6以上	0.6	江戸時代？	土師器皿・羽釜、瓦質土器深鉢	
SK15	長方形？	東西1.5×南北1.2以上	0.4	17世紀中頃以降？	瓦質土器深鉢、国産陶器（京信楽系窯鍋）、国産磁器（肥前窯椀）、銅鋲、獣骨	石組土坑か？